

## Historical Memories of an Ethnic Community Preserved through a Ritual Tradition : Focusing on a Court Case Involving “Darqad” during the Dao Guang Era together with a Historical Analysis

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 楊, 海英 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00004028">https://doi.org/10.15021/00004028</a>

## 儀礼が維持する集団の歴史的記憶

—道光年間における祭祀者ダルハトの訴訟事件が反映する歴史観—

楊 海 英\*

Historical Memories of an Ethnic Community Preserved  
through a Ritual Tradition: Focusing on a Court Case Involving “Darqad”  
during the Dao Guang Era together with a Historical Analysis

Yang Haiying

「スニト部のギルーン・バートル」(Sönid-ün Gilügün Bayatur)という人物は、13世紀のモンゴル・ハーン国時代に大いに活躍した、と年代記はそろって記述する。スニトは13世紀の『モンゴル秘史』にも見られる有名な部族の名称である。ギルーンは名前で、バートルは「勇士」を意味する爵号である。ギルーン・バートルはまずチンギス・ハーンをまつる八白宮祭祀のなかでその存在が認められる。祭祀者たち(Darqad)にチンギス・ハーンからの恩賜を配る儀礼の場で、ギルーン・バートルの直系子孫を称する者がその祖先の功績に基づいてチンギス・ハーンからの恩賜を拝受する。八白宮祭祀のなかで、ギルーン・バートルはチンギス・ハーンに追随した「4人のバートル(勇士)」のひとりとして位置づけられている。このような位置づけは17世紀以降に書かれたモンゴルの年代記の記述とも一致する。

つづいて19世紀半ば頃の清朝道光年間にギルーン・バートルはもう一度登場する。今度は八白宮の祭祀者ダルハトのひとり、ユムドルジ(Yümdorji)という人物が、自らは13世紀のギルーン・バートルの直系子孫で、代々八白宮の祭祀者集団内のバートル(勇士)という職掌をつとめてきたと主張する。ユムドルジは税金納入をめぐるオルドスの貴族たちと対立するが、シリング盟のスニト左旗の王公たちの支持をとりつけたため、ことを有利に運ぶ。スニト左旗の王公たちとユムドルジは、13世紀のスニト部のギルーン・バートルはユムドルジの直接の祖先である、という共通した歴史的認識を有していたことから、ユムドルジを支持したのである。このように、ギルーン・バートルという13世紀に存在したとされる人物はチンギス・ハーンの八白宮祭祀のなかで

---

\*静岡大学人文学部

**Key Words** : Ordos Mongols, Naiman Čayan Ordun, Darqad, Gilügün Bayatur.

**キーワード** : オルドス・モンゴル, 八白宮, ダルハト, ギルーン・バートル

その功績がずっと認められてきただけでなく、その子孫を称する人物も広く認知されていた。モンゴルにとって、歴史あるいは歴史上の人物は決して過去のものではなく、現在を生きる存在であることが分かる。

There is a man's name that appears several times in historic documents of Mongolia compiled at different times over many centuries. The name is Gilügün Bayatur, and the man was from a tribe called Sönid. Sönid is mentioned in *The Secret History of the Mongols*, which was written in the 13<sup>th</sup> century. To be exact, "Gilügün" was, in fact, his name by birth, whereas "Bayatur" was an acquired title meaning "brave warrior". Amongst ancient records, the oldest reference to "Gilügün Bayatur" is found in the description of the traditional ritual of "Eight White Tents", which is dedicated to Genghis Khan. Part of the ritual is the reconstruction of a historic scene, in which officiating priests called "Darqad" in Mongolian are bestowed with royal gifts by Genghis Khan. Involved with this tradition is a direct descendant of Gilügün Bayatur, who comes forward to receive the reward from Genghis Khan, thus being honoured on behalf of his ancestors for their devotion and allegiance to his lordship of supremacy. As these proceedings of "Eight White Tents" suggest, Gilügün Bayatur is defined as one of the leading followers of Genghis Khan, manifesting the values of heroic loyalty, and contributing to his lordship's historic expedition. As a matter of fact, this great warrior figure concurs with some expressions discovered in Mongolian chronicles from the 17<sup>th</sup> century onward.

Following these precedents, the famous warrior appears once again in a manuscript written in the middle of the 19<sup>th</sup> century during the Dao Guang (道光) era of the Qing dynasty. Contained in this document is a statement by a man named Yümdorji, an officiating priest (Darqad), who claims that he is a legitimate direct descendant of Gilügün Bayatur, the courage of whom was recorded in the 13<sup>th</sup> century archive, and that his family has been serving in the proceedings of "Eight White Tents" through generations, fulfilling the role of "Bayatur". Once Yümdorji was involved in a conflict with local aristocrats (Tayiji) in the Yeke Juu League (Ordos) in relation to an issue of tax payments. As soon as unequivocal support was extended, however, to Yümdorji by feudal lords of the Sönid East Banner in the Silingol League, the situation turned round entirely in his favour. The reason why the royals of the Sönid East Banner took the side of Yümdorji was that they acknowledged that he was the legitimate descendant of Gilügün Bayatur from the ethnic group of Sönid during the 13<sup>th</sup> century. What is worth noting is that the man named Gilügün Bayatur, who is believed to have existed during the 13<sup>th</sup> century, has always been honoured over many centuries in the tradition of "Eight White Tents", the ritual to worship Genghis Khan, for his bravery and dedication.

Furthermore, this fact itself emphasizes that historic figures as well as history are not a mere representation of the past, but that they exist in the present, symbolizing the fundamental values of Mongolia.

1 はじめに—本論文の目的	4.1 事件の主要登場人物
2 問題の所在と従来の研究	4.2 事件の背景—ダルハトの法的地位の問題
2.1 問題の所在	4.3 事件の経過
2.2 ダルハトの出自に関する従来の研究	4.3.1 事件当時の郡王旗
3 八白宮祭祀におけるギルーン・バートル	4.3.2 事件の発端
3.1 民族誌の描写と『金書』の記述	4.3.3 事件の真相
3.2 軍神祭祀の編陣から見た年代記の記述	4.3.4 ダルハトの地位をめぐる双方の主張
3.3 『金書』の編纂とギルーン・バートル	4.4 玉虫色の決着
3.4 チンギス・ハーンの死とギルーン・バートル	5 おわりに—人類学的歴史研究の有効性
4 八白宮の祭祀者とギルーン・バートル—訴訟事件が語る歴史観	5.1 儀礼が維持する歴史的認識
	5.2 「個人」と歴史の関係
	5.3 「個人」と歴史の現在性
	付録—訴訟事件に関する主要文書

## 1 はじめに—本論文の目的

チンギス・ハーンを対象とした八白宮 (Naiman Čayan Ordun) 祭祀の研究は、歴史を避けて通ることができない。それは、チンギス・ハーンが歴史上の人物であって、その歴史的行為が祭祀にどのように反映されているのかを把握しなければならないというだけではない。たとえば17世紀に書かれたロブサンダンジン『黄金史』のように、モンゴルの年代記には八白宮の起源をチンギス・ハーンの死去直後に求めている記述があること (Lubsangdanjin 1990: 127b) を考慮すれば、現在までおよそ数百年間にわたって祭祀活動が維持されてきたという認識自体、ひとつの歴史的な連続性が理念的に構築されているといえよう。また、今日においても、祭祀者たち (Darqad) は、彼らが伝統的と自認している手法に依拠しながら、「歴史的な事実」のリアルな再現を目指して諸種の儀礼をおこなっている。このように、数百年間という時間的な連続性と祭祀者たちの過去に関する集合的記憶、それに年代記や祭祀用文書等によっ

て傍証しうる文字資料の存在が、チンギス・ハーンの八白宮祭祀の歴史的な性格をより強固なものにしているのである。

八白宮祭祀とその祭祀者集団の歴史的な変遷を追っていると、ひとりの人物名が2つの異なる時代に登場している現象が注目を引く。その人物はスニト部（*Sónid ayimay*）出身のギルーン・バートル（*Gilügen Bayatur*）である。ギルーンは本名で、バートル（勇士）は爵号であろう。

17世紀頃からのモンゴル語年代記に登場するこの人物をどう表記するかは、研究者によって異なる。たとえばサガスターは *Kilügen* と表現している（*Sagaster 1970: 495-505*）のに対し、*Gilügen* と転写する人もいる（*De Rachewilts, Krueger and Ulaan 1990: 69, 72, 80-81*; 烏蘭 2000: 584-585, 588-589）。オルドスのモンゴル人、八白宮の祭祀者のダルハトたちは、ギルーン、ギルグーダイ、ギョルグダイなどと発音するため、私は以前に *Gölügedei* と表記した（楊 1998: 95, 107）。ギルーンにしても、ギルグーダイあるいはギョルグダイ<sup>1)</sup>にしても、語源の *Gölüge* はオオカミやイヌの仔を意味する。

ギルーン・バートルはまず13世紀のモンゴル・ハーン国時代に現れる。チンギス・ハーンの西夏征服に同行する。大ハーンがかの地で逝去した後は挽歌を吟唱し、その遺骸をモンゴル高原に運びかえる際にも大きな役割を果たした。17世紀頃からの年代記はそろってギルーン・バートルの上記の功績について述べている（表1）。

時代は下って19世紀半ば清朝の道光年間に入る。今度は八白宮の祭祀者のひとりがギルーン・バートルの末裔を名乗りでて、イケ・ジョー（伊克昭）盟郡王旗の支配者札薩克<sup>ジャサク</sup>などチンギス・ハーンの直系子孫たちが祭祀者から不当に徴税しようとしていることを訴えたのである。訴えてた祭祀者はダルハン・バートル（*Darqan Bayatur*）の爵号を持つユムドルジ（*Yümdorji*）という人物である。自らがモンゴル・ハーン国時代の功臣ギルーン・バートルの子孫である、という由緒正しい出自をユムドルジは全面に出して訴訟を起こした。ユムドルジはさらにシリングル盟スニト左旗に赴いて自らの正統を主張し、清朝時代における「スニト部」を巻きこむかたちで、ギルーン・バートルとのつながりを強調し、ことを有利に進めた。シリングル盟スニト左旗の王公たちもユムドルジがモンゴル・ハーン国時代のギルーン・バートルの子孫であることを認めて事件に介入した。イケ・ジョー盟内部の貴族対庶民という些細な出来事だと思こんでいたオルドスの王公たちもスニト左旗の介入によって認識を改めなければならなかった。認識を逆転させたのはやはりギルーン・バートルという歴史上の人物の存在である。こちらは、道光年間の公文書資料が伝えるギルーン・バートル

表 1 モンゴルの年代記におけるギルーン・バートル

年代記	成立年代	表記	事跡
<i>Činggis Qayan-u Altan Tobči Ner-e-tü-yin Čädig</i>	1260年以降 (16世紀か・17世紀頃書写?)	Sönid-ün Gölgedei Bayatur	臨終の付き添いと挽歌吟唱
<i>Qad-un Ündüsün-ü Quriyangyü Altan Tobči</i>	1625	Sönid-ün sayin Gölgedei Bayatur	臨終の付き添いと挽歌吟唱
<i>Ertēn-ü Qad-un Ündüstilegsen Törü Yosun-u Jokyal-i Tobčilan Quriyaysan Altan Tobči Kemeki Orusbai</i>	1635?	Sönid-ün Gölgedei Bayatur	臨終の付き添いと挽歌吟唱
<i>Ertēn-ü Mongyol-un Qad-un Ündüsün-ü Yeke Sir-a Tuyuji Orusbai</i>	1643-1662?	Sönid-ün Gölgedei Bayatur	臨終の付き添いと挽歌吟唱
<i>Erdēn-yin Tobči</i>	1662	Sönid-ün Gölügen Bayatur	臨終の付き添いと挽歌吟唱、サルトル遠征とアムバガイ・ハン制圧に同行
<i>Asaračı Nereti-yin Teuke</i>	1677	Sönid-ün Gölgedei Bayatur	臨終の付き添いと挽歌吟唱
<i>Altan Kürdün Mingyan Kegeštü</i>	1739	Sönid-ün tümen-i dayayaysan Gölgedei Bayatur	西夏征服時に軍召集、臨終の付き添いと挽歌吟唱

表 1 は Dorungy-a (1998), Lujinsüwe (2000), Lubsangdanjin (1990), De Rachewiltz, Krueger and Ulaan (1990), Шлацной (1957), Jamba (1984), Dahrm-a (1987) などの年代記資料に依拠している。なお、*Činggis Qayan-u Altan Tobči Ner-e-tü-yin Čädig* の書写年代については、Kesigtoytqu (1998: 15, 1999: 207) を採用した。

である。

このように時空間を超越して、ギルーン・バートルという人物がくりかえし年代記や公文書、そして祭祀者たちの記憶に現れている。モンゴルの歴史上、ギルーン・バートルが重要な存在であることを表していると見てもさしつかえなかろう。17世紀頃からの年代記の作者たちが何故ギルーン・バートルについて描写したかは、本論文の主題ではない。むしろ後者すなわち19世紀道光年間において再びギルーン・バートルが登場するという現象に注目してみたい。モンゴル・ハーン国時代のギルーン・バートルにしても、道光年間のユムドルジにしても、まず2人ともバートルの爵号を所持している点が共通している。祭祀者ユムドルジがギルーン・バートルの子孫を自称している以上、ギルーン・バートルは八白宮祭祀とも何らかのかたちで関係している可能性が高い。八白宮祭祀において、モンゴル・ハーン国時代のギルーン・バートルはどのように反映されているのか。そして、ユムドルジとギルーン・バートルをつないでいる歴史認識がどのように表象されているのかを考察するのが、本論文の目的である。

本稿があつかうような歴史的な色彩のきわめて濃厚な祭祀や儀礼について、人類学者はどのように観察してきたのであろうか。たとえば、エリアーデはかつて『永遠帰郷の神話』のなかで、儀礼分析の方法として、「祖型と反復」(archetypes and repetition)説を出している。それによると、「いずれの儀礼も、神的なモデル、祖型を持つ」としたうえで、「未開人の間では、儀礼だけがこうした神話的モデルを有するのではなく、あらゆる人間の行為が神、英雄、もしくは祖先によって太初の時にあたってなされた行為を、どの範囲まで正確に『くりかえす』かによって、その効力が獲られるとされる事実」に注意しなければならないことを主張している(エリアーデ1970: 33-34)。エリアーデだけではない。その後レヴィ=ストロースも、歴史儀礼もしくは記念儀礼は、神話時代の神聖祥福の雰囲気再現するものであり、歴史儀礼は過去を現在のなかに持ちこむものである、と指摘している(レヴィ=ストロース2000: 284)。周知のとおり、エリアーデの主たる関心は「古代文明群」と「伝承文化民群」の固有の宗教史的価値の再発見にあったし、レヴィ=ストロースは人間の「家畜化された状態」とは異なる「野生状態」の思考を探索し、歴史と弁証法との関係について論じた時に上記のような立場を示したものである。以下では、「祖型の反復」説とレヴィ=ストロースの仮説を射程におきながらモンゴルの歴史的儀礼をとりあげる。八白宮のような歴史的な性格の強い儀礼において、モンゴル人はどのように過去を現在に「持ちこみ」、いかなる解釈を示していたのだろうか。本論文はこのような

立場に基づいて年代記や古文書資料を用いて、清朝時代における八白宮の祭祀者たちの歴史認識について、再構成を試みる。

ここでまず本論文の構成について触れておこう。以下第2章ではまず問題の所在を示したうえで、従来の研究を総括する。つづく第3章では現代の八白宮祭祀において、13世紀のギルーン・バートルという人物が如何に表象され、かつそれが年代記とどのように関連しているかを検討する。第4章では清朝の道光年間に発生した祭祀者ダルハトの訴訟事件をとりあげ、ギルーン・バートルの直系子孫を自称する人物の系統認識を分析する。最後に第5章ではモンゴルにおける儀礼と人びとの歴史認識との関係について考察する。なお、本論文であつかうモンゴル語古文書資料はローマ字に転写し、日本語訳をつけたうえで、付録として巻末に添付する。

## 2 問題の所在と従来の研究

### 2.1 問題の所在

チンギス・ハーンの八白宮と軍神黒いスウルデをまつる祭祀者集団を「五百戸の黄色いダルハト」という。ダルハトは西と東（あるいは大と小）の二部に分かれ、西部（大部）ダルハトは八白宮の祭祀を主催し、東部（小部）ダルハトは軍神黒いスウルデをまつる。西部ダルハトの多くは『モンゴル秘史』に登場するモンゴルの有力な部族集団の血統を引くが、東部ダルハトにはチンギス・ハーンの親衛部隊ゲシクの末裔を名乗る者が多い。ダルハトのこのような組織にはモンゴルの政治原理が反映されており、いわば一種の出自を超越した政治集団である（楊 1995: 31-32）。

出自を超越した集団であるがゆえに、出自の政治性をより明確に示しておく必要が常にダルハトたちに求められている。その際、自らの出自を特にチンギス・ハーン個人と結びつけることによって、モンゴルにおける政治的な立場を維持してきたのである。これは、ダルハトという祭祀者集団に付与された八白宮祭祀の政治構造の一側面でもあった。

では、祭祀者ダルハトとチンギス・ハーン個人とのつながりを示す強固な装置として、何を挙げることができようか。まず考えられるのが、文字によって記された家系譜であろう。たとえばナラソンとワンチュクラが公開した西部ダルハトの統率者とされるボウルジ（Buyurji）の家系譜は次のようにはじまる（Narasun and Wangcuy 1998: 1140）。

Temüjin suutu boyda Činggis Qayan-u yisün örlüg tüssimed-ün aqamad Mongyol-un erkim sayid čing kičiyeltü mergen tayisi küllüg Buγurji noyan bidan-u tulγur ebüge:

テムジンこと英明聖主チンギス・ハーンの九人の將軍の長、モンゴルの尊き幕僚、忠誠にして聡明かつ深慮な太師、駿馬ボウルジ殿がわが鼎柱たる祖先である。

上に示した家系譜 (Narasun and Wangčuy 1998: 1140) の冒頭の文言は、ボウルジがチンギス・ハーンの「九人の有能な將軍」のトップであったこと、「四駿」と称される4人の功臣のひとりだったことを明記している。ボウルジ家の系譜はいつの時代から編纂がはじまったかは定かではない。チンギス・ハーン個人と強いつながりを持つモンゴル・ハーン国時代の人物に一族の起源を求めている点から、歴史的な連続性を誇示しようとしている意識がよみとれよう。上記家系譜を検討したところ、ボウルジ家の子孫達のなかには、ダルハト集団内の「尊き4つの爵号」(erkim dörben čolas) を持っていた者が多く、実質上ダルハトの指導者でありつづけたことが分かる。

ボウルジ家だけでなく、一般的にモンゴル人のあいだには一族の系譜を記憶し、祖先の功績を家系譜に記録するという意識が強かった (楊 1996: 667-679)。祭祀者ダルハトの場合は一般の人びと以上に家系譜を重んじ、チンギス・ハーンとのつながりを理念的に構築してきたのである。いうまでもなく、ダルハトたちが日常的に抱く、チンギス・ハーンとの連帯意識には強烈な政治性が潜んでいる。本論文では清朝時代において、ダルハトたちのこのような出自認識が如何に表象され、それが時の為政者たちにどのように理解されていたかを検討する。

清朝にとって、チンギス・ハーンをまつるダルハトとはどんな性質を持つ集団なのか、その出自を再確認するような事件が道光年間 (1821-1850) に相次いで発生した。まずはダルハトの持つ「尊き4つの爵号」であるタイシ (太師)、タイボ (太保)、ホンジン (官人)、ザイサン (宰相) は「朝廷の大号」にあたるとして、その使用を禁止すべきだと主張された事件が道光4 (1824) 年から道光8 (1828) 年にかけて起きた。内・外モンゴルの多くの王公たちの強い反対にあい、この事件は最終的には清朝政府側が一旦出した爵号廃止令を撤回するかたちで収拾された (Qurča 1990: 94-105, 岡 2001: 4-8)。もうひとつは、本論文がとりあつかうダルハン・バートル・ユムドルジをめぐる訴訟事件である。東部ダルハトの一員であるユムドルジは、自身がチンギス・ハーンの功臣のひとり、スニト部のギルーン・バートルの子孫であると称し、ダルハトが本来所有していた租税免除の特権を再確認しようと動きだしたのである。前回の爵号廃止事件と同様に、ユムドルジの訴訟もまたオルドス以外の王公を巻きこむ事件に発展していった。

ユムドルジが何故スニト部のギルーン・バートルの子孫と称したのか。清朝時代のスニト部の継承者たるシリングル盟のスニト旗がどのような反応を示したのか。これらの問題は、スニト部のギルーン・バートルがチンギス・ハーン祭祀とどう関係するのか、との問題でもある。したがって、本論文ではまずチンギス・ハーン祭祀とギルーン・バートルとの関わりを検証する。そのうえで、道光年間に発生したユムドルジ事件の真相を考証し、ユムドルジのようなダルハトたちの歴史認識を検討する。

## 2.2 ダルハトの出自に関する従来の研究

ダルハトについて、中国内モンゴル自治区オルドスの民族学者サインジャラガルとシャラルダイはその名著『黄金オルドの祭祀』(*Altan Ordun-u Tayily-a*)のなかで、詳しく記述している。両氏はまず、ダルハトが西部(大部)と東部(小部)に分かれ、その内部にゲシクと称する18のグループが存在することを明記している。そのうえで、ダルハトの父系親族集団(*obuy*)を列挙し、ダルハトはモンゴルの各部から招集された集団であることを説明している(Sayinjiryal and Šaraldai 1983: 413-462)。その後、私はサインジャラガルらの研究をふまえたうえで、私自身の実地調査で入手した資料ともあわせて、ダルハトの社会構造について試論を呈示した。具体的には祭祀者集団の組織や夏季大祭の儀礼を分析することによって、ダルハトが出自を超越した政治集団であることを明らかにした(楊 1995: 29-34)。ダルハトの組織については、ドイツ在住のモンゴル学者ホルチャバートルも同様の議論を展開している(Qurčabayatur 1999: 45-62)。

以上の諸研究はいずれもダルハトの組織編成の原理に注目している。ダルハトの組織編成を研究することによってモンゴルにおける集団の統合と再編成の原理を抽出しようと試みたものである。このほか、ダルハト集団内の個々の父系親族集団の実態についての研究も見られる。たとえば、ナ・ホルチャはダルハト集団内のケレイト部(*Kereyid obuy*)の名称について興味深い報告をしている(Qurča 1991: 33-38)。ダルハト集団内部において、個々の父系親族集団(*obuy*)の成員がどのように自己を歴史と結びつけて認識しているかについては、本研究が最初であろう。

ダルハトの歴史認識といっても、それには複数の側面がある。複数の側面は事件の複雑さ、認識の多様性を反映している。複数の側面と多様な認識、それに年代の幅も広いことから、研究者たちも異なる角度からダルハトの出自に注目してきた。たとえば、ドイツのサガスターは、スニト部のギルーン・バートルが詠みあげた有名な「チンギス・ハーン挽歌」とチンギス・ハーン祭祀との関係に着目している。「チンギス・

ハーン挽歌」のなかのチンギス・ハーンとゆかりのある「宮帳」(ordu qarsi), 喇叭と軍神スウルデ (büriye sülde), 妃たち (qatud) が後日, 八白宮の神聖な遺品として反映された可能性について論じている (Sagaster 1970: 495-505)。「チンギス・ハーン挽歌」がとりあげている神聖な品々が後世の八白宮の遺品に反映されているならば, 挽歌そのものを詠みあげた人物が八白宮祭祀にどのように関わったかということが新たな課題となってくるのも当然であろう。

本論文は冒頭でチンギス・ハーンの功臣ボウルジの家系譜について言及した。ナ・ホルチャも, ダルハト集団内におけるボウルジの子孫たちに注目している。ナ・ホルチャはモンゴル語年代記の記述をもとに, チンギス・ハーン的第一の功臣ボウルジが八白宮祭祀の最初の主催者となっただけでなく, 後世においてもダルハト集団内の「尊き4つの爵号」であるタイシ (太師), タイポ (太保), ホンジン (官人), ザイサン (宰相) をも主としてボウルジの子孫が継承してきたことを述べている。また, この「尊き4つの爵号」が清朝の道光年間に一度廃止された後, 再び承認された経緯についても記述している (Qurča 1990: 94-105)。

近年, 歴史学の視点から八白宮祭祀に注目した研究も現れるようになった。岡は, 『チンギス・ハーンの八白宮』(Činggis Qayan-u Naiman Čayan Ordu, 1998) 所収の文書を「清代公文書資料」と位置づけたうえで, その資料を用いてチンギス・ハーン祭祀に対する清朝の政策を検討した。盟旗制度下において, 祭祀者ダルハトと貴族タイジとの伝統的な関係がどのように表出したかに関心を寄せた。具体的には, 道光, 咸豊年間のダルハトの帰属をめぐる訴訟事件, 道光年間のダルハトの爵号廃止事件を分析対象としている。その結果, 清朝のチンギス・ハーン祭祀に対する態度は, きわめて慎重であるとともに, 矛盾にみちたものであったと指摘している (岡 2001: 1)。岡の研究からチンギス・ハーン祭祀に関する歴史学者の強い関心を伺いしることができよう。

以上のような従来の諸研究の特徴からも分かるように, 八白宮祭祀とその祭祀者集団ダルハトについて論考する際には, どうしてもダルハトたちが主張する「13世紀のチンギス・ハーン時代」を想定せざるを得なくなる。とはいえ, 13世紀の同時代資料は少ない。資料の多くが後世のものである。そのため, 資料運用の面では後世のモンゴル語年代記をはじめ, 公文書資料や祭祀用文書, それに現在おこなわれている儀礼そのものに頼らなければならない。以下では, このような資料使用の原則に基づいて, 八白宮祭祀の草創期に活躍したとされるギルーン・バートルに焦点をあててみたい。

### 3 八白宮祭祀におけるギルーン・バートル

本章では八白宮の草創期において、祭祀活動に関わった人物、スニト部のギルーン・バートルをとりあげる。八白宮祭祀や年代記に登場するギルーン・バートルの人物像を整理することによって、ダルハトの出自の一端を明らかにしたい。

#### 3.1 民族誌の描写と『金書』の記述

ここでまず『黄金オールドの祭祀』(Sayinjiryal and Šaraldai 1983)の記述に沿って、現在おこなわれているチンギス・ハーンの軍神黒いスウルデ祭祀の一幕を見てみよう。この祭祀にはスニト部のギルーン・バートルの末裔が大切な役を演じている。

軍神黒いスウルデのもっとも重要な祭祀はダルハトたちが「13年に一度」と表現する辰年の「血祭」である。陰暦10月5日におこなう「血祭」にはモンゴル人男性のみが参加できる。いわゆる「血」とは、頭の黄色いヒツジの血と、背中に灰色の毛があるヤギの血を乳酒にまぜたものである<sup>2)</sup>(Sayinjiryal and Šaraldai 1983: 319)。

儀礼は上記の血を飲むことで最高潮に到達する。供物のヤギが刺殺された後、祭祀の進行係(gökügčün)が「スニト部のシベクチン氏族で、ロンホチンという骨を持つグショーチ・バートルはいるか?」(Sönid ayımay-un Sibegčün obuytai. Longqučin yasutai Qosiyučı bayatur bayınau?)と大声で号令を発する。グショーチとは「先鋒」を指す言葉で、グショーチ・バートルは「先鋒たる勇士」の意味であろう。待機していたグショーチ・バートルが号令を聞いて応じると、また「こっちへ来い」と命じられる。グショーチ・バートル(先鋒勇士)は左腕を肩から露出し、右手に大刀を持ち、左足で片足跳びをしながら登場する。進行係は血を指して「飲め」との指令を出す。グショーチ・バートルは渡された血を飲み干す<sup>3)</sup>(Sayinjiryal and Šaraldai 1983: 322-323)。

「血祭」は、敵を鎮圧する目的でおこなうものである、と祭祀者たちは解釈している(Sayinjiryal and Šaraldai 1983: 311)。同様な「血祭」はオールドス地域のウーシン旗にあったチャガン・スウルデとオトク旗でまつられていたアラク・スウルデにもあった(楊 1999: 157-160; 2001: 105-107)。このような「血祭」は軍隊の出陣式の一環を彷彿させる面があり、かつて生きた人間をスウルデの生贄にしていたという記録もある(Heissig 1959a: 41-46; 楊 1995: 48)。1911年から1912年のあいだ、独立のために戦っていたモンゴルの将帥たちは敵の心臓を摘出して軍旗に捧げていたことも(ハイシッ

ヒ 2000: 132-136), 軍神スウルデの「血祭」と本質的には同様なものであろう。

以上は主として現在の祭祀者ダルハトたちの証言に基づいて書かれた民族誌である。その記述から分かることは、「血祭」において血を飲むなど重要な役を演じている祭祀者はスニト部の出身とされていること、その祭祀者はグショーチ・バートル(先鋒たる勇士)の爵号を持っていたこと、という2点である。

現在から遡って清朝の道光17(1837)年7月、軍神黒いスウルデをまつる祭祀者の2人、ダルハン・バートル爵のユムドルジとその弟、グショーチ・バートル(先鋒たる勇士)のナヤンタイが突如訴訟を起こした。オールドスの郡王旗の支配者札薩克<sup>ジャサク</sup>や貴族タイジらがダルハトから税金を徴収しようとしたことに対抗するためである。彼らは上告文のなかで自らを「(軍神)スウルデの御前にて鮮血を飲むバートル」(付録:文書1)と呼んでいる。そしてバートルたるダルハトの由来については次のように表現している(付録:文書1, 3)。

Činggis ejen-ü emün-e  
 主君チンギスの御前にて  
 qar-a čilayu metü yasutu.  
 磐石のような硬骨を持ち  
 qar-a usun metü čisutu.  
 海水の如き熱血を有し  
 qaril ügei sanayatu.  
 衰えぬ意志を持ち  
 qaltural ügei joriyту  
 動揺せぬ決意を保ち  
 qari tan yeke dayisun-du  
 悪敵どもに対し  
 qatayujin yabuju  
 破竹の勢いで突進し  
 küčün-iyen öggügsen  
 尽力してきた  
 Sónid-ün Gölügen Bayatur-un ači  
 スニト部ギルーン・バートルの子孫  
 ……

上告文のなかのこのような表現から、道光年間において、軍神黒いスウルデの「血祭」において、血を飲む儀礼に携わっていた者は、スニト部の出身であったことが明かである。先に紹介した現在の「スニト部のシベクチン氏族で、ロンホチンという骨を持つグショーチ・バートル(先鋒たる勇士)」が道光年間のユムドルジの子孫かど

うかは確認できていない。重要なのは、道光年間のダルハン・バートル・ユムドルジが現在の血を飲むダルハトと同じようにスニト部とのつながりを強調していることである。その際、両者ともスニト部のギルーン・バートルを自分たちの祖先にしている。では、スニト部のギルーン・バートルとは如何なる人物で、チンギス・ハーンの八白宮祭祀にギルーン・バートルはどのように関わったのであろうか。

まず、チンギス・ハーン祭祀の指針書、『金書』のなかの記述を見てみよう。八白宮祭祀のなかで、陰暦5月15日におこなわれる「夏季大祭」がある。この際、儀礼の一環として祭祀者ダルハトたちに「黄金の恩賜」(altan tügel)が分配される。「黄金の恩賜」はチンギス・ハーンの英雄功臣たちの功績を表彰するため、その子孫たちに下賜されるものである(Sayinjiryal and Šaraldai 1983: 103-194; 楊 1995: 30-31)。「恩賜」を配る時、功臣たちの功績を称えた詩文が朗読される。この詩文にはギルーン・バートルも登場する。

康熙61(1722)年に書写された『金書』のなかに、「チンギス・ハーンの偉大な黄金恩賜」(*Činggis Qayan-u yeke altan tügel*)という詩文が収録されている。ここでは、ギルーン・バートルについて次のように描いている(楊 1998: 95)。

qara čilayun metü yasutu  
盤石のような硬骨を持ち、  
qara usu metü čisutu  
海水の如き熱血を持ち、  
qaril ügei sanayatu  
衰えぬ意志を持ち、  
qalturil ügei joriytu  
動揺せぬ決意を保ち、  
qaratan dayisun-du qatayučin yabuju kücüben öggügsen  
敵陣に切りこんで力を捧げた  
Sübegedei Bayatur Sönid-ün Gölügedei Bayatur,  
スウベクダイ・バートル、スニト部のギルグダイ・バートル、  
Čölgedei Bayatur, Mangyud-un Quldari<sup>4)</sup> Bayatur  
チョルグダイ・バートル、マンゲート部のホ(イ)ルダル・バートル、  
baras metü jirüketü ede bayatur-un (ür-e) bayu tügel  
猛虎の如き心臓を持つこれらバートルたち(子孫)の恩賜。

ここで、スニト部のギルーン(ギルグダイ)・バートルはマンゲート部のホイ  
ルダルらとともにチンギス・ハーンの「4人のバートル」を構成している。道光年間に  
ダルハン・バートルのユムドルジが上告した時に、『金書』のなかの文言を引用して

いたことは明らかである。

「黄金の恩賜」は決して無原則に乱発するものではない。ホルチャの研究によると、「黄金の恩賜」をもらう資格のある人物は69人で、この数字は『十善福白史』のなかにある「ハーン主君の皇倉からの恩賜、浩蕩たる69のヤム」(ejen qaγan-u sang-un tügegel delgerenggüi-yin jiran yisün yamu)との表現と一致するという(Qurčabilig 1994: 47)。『十善福白史』はフビライ・ハーンもその編纂に関わり、モンゴルの政治と宗教のありかたを理論的に定めた書物であるとの認識があり(Liujinsüwe 1981: 3-8)、厳密な記述が要求される<sup>5)</sup>。したがって、「黄金の恩賜」が与えられる69人も、モンゴルの政治的な判断によって厳選された者でなければならない。八白宮祭祀では、ギルーン・バートルはチンギス・ハーンの「4人のバートル」のひとりとして位置づけられ、その功績が称えられている。ギルーン・バートルの子孫は、祖先の功績を恩賜拝受のかたちで受けついでいる。

### 3.2 軍神祭祀の編陣から見た年代記の記述

ギルーン・バートルとホイルダル・バートルらはチンギス・ハーンの「4人のバートル」のうちの2人であったことを『金書』は描写している。後世において、ギルーン・バートルの子孫は八白宮祭祀の儀礼の場で、血を飲む役を担当していることについても述べた。では、血を飲む以外にどのような役割を果たしていたのであろうか。つづいてチンギス・ハーンの軍神黒いスウルデをまつ時、バートルを含む祭祀者たちの編陣(jiγsaγal)を見てみよう。

ダルハト特に東部ダルハトには、モンゴル・ハーン国時代の軍隊の組織が反映されているという(Sayinjiryal and Šaraldai 1983: 446-447)。モンゴル軍には「風馬の如き威勢ある布陣」(čoy kei mori-yin jiγsaγal)と「吉祥の布陣」(belge-yin jiγsaγal)という二通りの布陣がある(図1参照)。図1から分かるように、行き先案内人(γajarčün)につづくのがグショーチ・バートル(先鋒たる勇士)で、グショーチ・バートルの後ろにはダルハン・バートル(ダルハンたる勇士)が陣取っている。つまり、グショーチ・バートルとダルハン・バートルは一对となって軍の先鋒を構成していたという編陣形式である。

黒いスウルデは、チンギス・ハーン自らが生前から崇敬し、まつっていた全モンゴル軍の軍神である(Sayinjiryal and Šaraldai 1983: 280-281)。黒いスウルデをまつ際のダルハトたちの編陣形式が多少とも13世紀におけるモンゴル軍の組織を反映しているとするならば、モンゴル・ハーン国時代の軍隊構成についての記録を検討する必

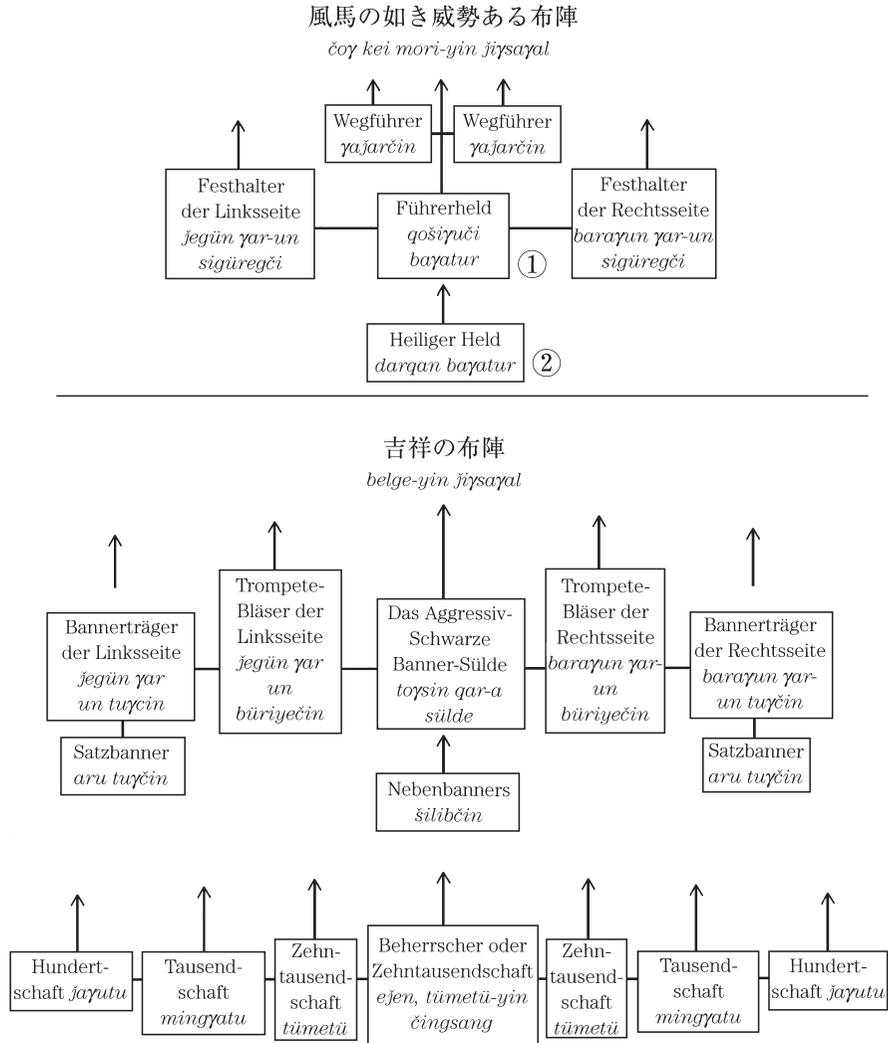


図 1 八白宮の祭祀者ダルハトが再現するモンゴル・ハーン国の軍陣  
 ※ Qurčabayatur (1999) を改変  
 ① Qošiyuči Bayatur ② Darqan Bayatur

要があろう。モンゴル・ハーン国時代の軍隊内のギルーン・バートルについては、後世の史料ではあるが、『蒙古源流』には興味深い記述が2ヶ所ある。それはいずれもチンギス・ハーンの軍事行動の項にある。

その1

tendeče yučin dörben-iyen ji taulai jile Sartayul-dur morilan бүкүй-e: tedüi Sartayui-un Jalildun Sultan qaγan Saγari Tarbayatai-a uytuju jolyaqui-dur: Sönid-ün Gilügen Bayatur: Mangyud-un Quyildar Qosiyüči qoyar uduridču čabčün: Jalildun Sultan qaγan-i alaju: tabun muji sir-a Sartayul ulus-i erke-dür-iyen oruyulbai ❖ (Haenisch 1955: 35).

(チンギス・ハーンは)己卯年(1219)34歳の時、サルトルに出征した。サルトルのジャラルドン・スウルタン・ハーンは、サーリ、タルバガタイの地で迎え討った。その時、スニト部のギルーン・バートルとマンゲート部のホイルダル・グショーチの2人が先陣をきって突入し、ジャラルドン・スウルタンを殺し、5つの藩地からなるサルトルを支配下においた。

その2

döčin doluyan-iyen uu luu jile morilaysan-dur: Ambayai qaγan arban tümen čerig-üd-iyen abču: Bayiyal mören-e uytun irejü: yurban qonuy bayilduqui-a: ejen öbesüben terigilejü: Arlad-un Buyarči noyan. Jalayir-un Muquli noyan: Sönid-ün Gilügen Bayatur: Mangyud-un Quyildar Qosiyüči-tai: udurid-un oruju: yeke qarγui bostal ülidken čabčuγad: Ambayai qaγan-i alaju. albatu ulus-i anu oruyulju abubai ❖ (Haenisch 1955: 36).

(チンギス・ハーンが)47歳の戊辰年に出征した時、アムバガイ・ハンが10万の軍を率いてバイカル・ムレンまで迎撃してきて、3日間戦った。主君(チンギス・ハーン)自ら先頭にたち、アラルト部のボウルジ・ノヤン、ジャライル部のムカリ・ノヤン、スニト部のギルーン・バートル、マンゲート部のホイルダル・グショーチとともに切り殺し、大きな屍体の山ができるほど戦った。アムバアイ・ハンを殺し、その部衆を征服した。

以上のように、年代記のなかでもギルーンとホイルダルは一对となって登場している。スニト部のギルーンはバートルの称号を持ち、一方のマンゲート部のホイルダルにはグショーチ(先鋒)の称号がついている。このグショーチ(先鋒)をグショーチ・バートル(先鋒勇士)の略称と見てもさしつかえなかろう<sup>6)</sup>。スニト部のギルーンのバートル(勇士)という称号は、いつ誰から贈られたものかは不明である。上記『蒙古源流』の記述を見る限り、ギルーン・バートルはかなり早い段階でチンギス・ハーンに追隨し、輝かしい戦功の持ち主であったことを、17世紀の年代記の作者サガン・セチェンはいおうとしている。

### 3.3 『金書』の編纂とギルーン・バートル

以上は八白宮祭祀の指針書である『金書』や年代記が伝えるスニト部のギルーン・

楊 儀礼が維持する集団の歴史的記憶

バートルである。ギルーン・バートルは八白宮祭祀において「4人のバートル」のひとりとしてだけとりあげられているわけではない。『金書』そのものの編纂事業とも関係している。

『金書』には複数の種類がある。『金書』のうち的一种、「祈祷用ヒツジのトイ書」(*Sibsilgen qonin tölügen sudur*)は、ギルーン・バートルが編纂したのではないかと見られている。

いわゆる「祈祷用のヒツジ」(*sibsilgen qoni*)はチンギス・ハーンの八白宮の春季大祭の時に登場する。八白宮祭祀の最高責任者であるジノンが立会いのもとで、生きたままの状態で肝臓と胆嚢を出される。その肝臓と胆嚢にはチンギス・ハーンからの啓示が記されているとされ、ダルハトたちがそれを読みとってトイをおこなう(*Sayinjiryal and Šaraldai* 1983: 157-159; 利光 1989: 36-46; *Qurčabayatur and Üjüm-e* 1991: 407-413; 楊 1998: 66-67; *Hurcabaatur* 1999: 135-144)。

「祈祷用ヒツジの儀礼」は、秘密とされてきたことから、従来、ヒツジトイに関する情報は決して多くなかった。近年、オルドスの民族学者サインジャラガルはこの「祈祷用ヒツジ」のトイについて、きわめて貴重な写本が存在していることを伝えている(*Sayinjiryal* 1998)。このサインジャラガルは先に紹介した『黄金オルドの祭祀』の著者のひとりでもある。

「祈祷用ヒツジのトイ書」はサインジャラガルがオルドスのハンギン旗のトゥクルク・ソム(*Tögürig sumu*)に住むバトオチル(*Batuwačir*)という老人から入手したという(*Sayinjiryal* 1998: 80)。ただし、入手した時期等については明言していない。写本の内容としては、天に祈祷し、祝詩を述べ、乳を振りまいてからヒツジの角、唇、耳、舌の動きや尿尿を観察すること、また屠った後の血管、血液、胆嚢などを見るなど、およそ30種類のトイ方法が記されているという(*Sayinjiryal* 1998: 80)。かつてヨーロッパからの旅行者が、モンゴルの大ハーンが動物の内臓を用いてトイをおこなったとの情報ともあわせて考えると、ヒツジの内臓トイこそ、モンゴルのもっとも古い占トのひとつである、とサインジャラガルは主張している(*Sayinjiryal* 1998: 80)。

その後サインジャラガルは手写本の内容を自身の新著『モンゴル族の祭祀文化』(*Mongyul Takily-a*)のなかで公表している(*Sayinjiryal* 2001: 213-215)。その奥付は次のようになっている。

Gümeli Mergen Jinung-un jakiy-a-bar erten-ü qayad-un tungyayşan Sonid-un Gilügen Bayatur-un tölügen sudur qaçuçirayşan-i köke luu jil-un jun-u ekin sar-a-yin sin-e-yin yurban-du Sungçi

Qarçayai sinedken biçibeı:

ゲムリ・メルゲン・ジノンの指示により、いしえのハーンたちが書写したスニト部のギルーン・バートルのトいの書が古くなったため、甲辰年夏の最初之月（陰暦4月）の3日に、（ダルハトの）スウンチ職をつとめるハルジャガイが新たに書写した。

ゲムリ・メルゲン・ジノンとはゲンビリク・メルゲン・ジノンのことで、1506年に生まれ、1532年にジノンの位を継承し、1550年に死去した人物である（Sayinjiryal 1998: 80）。文中の甲辰年は1544年にあたる。「スニト部のギルーン・バートルのトいの書」という『金書』は、歴代のハーンたちによって書写がくりかえされていることから、古くから伝わるものであろうとサインジャラガルは見ている（Sayinjiryal 1998: 80）。

サインジャラガルはさらにもうひとつの『金書』にも言及している。「聖主の祝詩および尊き食べ物の作法の書」（*Boyda-yin irügel-ün yamu yosu jang üile-yin debter*）という『金書』である。もともとこの『金書』は1909年12月にモスタールト（Mostaert）師がオルドスのジュンガル旗から収集したものである。セールイス師が整理したモスタールト・コレクションのなかではNo.75の文書にあたる（Serruys 1975: 200）。その後、セールイス師はこれを2回に分けて1982年と1984年に発表している<sup>7)</sup>（Serruys 1982: 141-147; 1984: 29-62）。

1985年、ホルチャバートルがこの「聖主の祝詩および尊き食べ物の作法の書」と題する『金書』のゼロックス・コピーをイタリアのモンゴル学者キョードー（Chiodo）女史から入手した。ホルチャバートルは八白宮祭祀の一儀礼、祈禱用ヒツジの内臓トいに関する研究にこの『金書』を活用している（Qurçabayatur and Üjüm-e 1991: 407-413）。

その後、私はホルチャバートルから同『金書』のゼロックス・コピーを借用し、その内容について詳しく検討した（楊 1998: 26-29）。その結果、「聖主の祝詩および尊き食べ物の作法の書」は次のような内容から構成されていることが分かった。

- 1) ジェースをあぶる書（jegesü tögnekü sudur）
- 2) ヒツジが昇天する書（qoni manduqu sudur）
- 3) ジョタイ腸を浸す（儀礼に関する）書（jotai singgegekü sudur）
- 4) ホトクを祝福する祝詩（qutuy miliyaqu irügel）
- 5) 招福儀礼の歌声（dalalyan-u dayu）
- 6) ヒツジトいの書（sibsilgen qonin-u sudur）
- 7) 白い群れ祭の慣行（Çayan Sürüg-un jang üile）

以上7つの部分からなる『金書』であるが、7番目の「白い群れ祭の慣行」を除けば、すべてが祈祷用ヒツジに関する内容となっている。つまり、いわゆる「聖主の祝詩および尊き食べ物の作法の書」は、実際は祈祷用ヒツジを用いた占ト儀礼に関する『金書』であったことははっきりしている。なお、この『金書』はホルチャバートルと私(Čoytu)が共同編集した『チンギス・ハーンの「金書」』に全文、影印の形で収録されている<sup>8)</sup>(Qurčabayatur and Čoytu 2001: 41-61)。

「聖主の祝詩および尊き食べ物の作法の書」という『金書』の第6番目の内容すなわち「ヒツジ占いに関する内容」が完了した箇所に、「大臣ギルーンが書いた書物から創作した冊子なり(Gilügen sayid-un nomlaysan-ača jokiyaysan sudur bui)」とある(楊 1998: 29; Qurčabayatur and Čoytu 2001: 58)。サインジャラガルはこの一句を「大臣ギルーンに起源し、創作した書(Gilügen sayid-un uylaysan-ača jokiyaysan sudur)」と解説している(Sayinjiryal 1998: 80)。

「大臣ギルーンが書いた書物から創作した冊子」(楊 1998: 25)にせよ、「大臣ギルーンに起源し、創作した書」(Sayinjiryal 1998: 80)にせよ、この「大臣ギルーン」(Gilügen sayid)がスニト部のギルーン・バートルであろうという推定に反論の余地はない。となると、少なくとも現時点では、スニト部のギルーン・バートルと結びつく『金書』は2つあることが明白である。1544年に書写された「スニト部のギルーン・バートルのトいの書」と、いわゆる「聖主の祝詩および尊き食べ物の作法の書」である。両者とも祈祷用ヒツジのトいに関する内容であり、ヒツジトいの『金書』は、その成立と編纂をギルーン・バートルと結びつけていることから、スニト部のギルーン・バートルと八白宮祭祀との関連性がますます高くなったことになろう。

### 3.4 チンギス・ハーンの死とギルーン・バートル

ギルーン・バートルはチンギス・ハーンの死にもっとも身近で接触していた人物であることを、17世紀頃からのモンゴル語年代記は記述している。八白宮祭祀はチンギス・ハーンの死とともに出現し、少しずつ整備され、充実してきた(楊 2000: 27-77)。ギルーン・バートルは『金書』の編纂事業とも関わっていることを『金書』自体が伝えている。となると、ギルーン・バートルは八白宮祭祀の成立とも無関係ではなからう。

モンゴルの諸年代記がギルーン・バートルについてどのように表記し、その主な事跡として何を挙げているかを表1にまとめた。各年代記に共通して見られるのは、チンギス・ハーンの臨終の際のつきそいと、挽歌の吟唱である。ここで、『モンゴル

秘史』や『黄金史』を中心に、その他の各年代記の記述を要約する形で、ギルーン・バートルとチンギス・ハーンの最期との関連について述べたい。

『モンゴル秘史』によると、1226年秋に西夏征服に出発したチンギス・ハーンは、黄河南岸のアルプハ（現アルプス）山中でクランの卷狩をおこない、落馬にて健康を害した（Eldentei and Ardajab 1986: 890）。西夏征服の途中、一向に回復しないチンギス・ハーンにスニト部のギルーン・バートルは以下のように遺言を乞うた、と『黄金史』は伝えている（Lubsangdanjin 1990: 126）。

……

örügüsün qočuruysan Börtegeljin seçen qatun-tu činu:  
寡婦となって悲しむであろう賢妃ボルテルジンに、  
önüčün qočuruysan Ögedei terigüten köbegün-tür činu:  
孤児となって悲しむであろうオゴタイをはじめとする皇子たちに、  
ködege yajar usun jiyaju:  
荒野のなかの水源を見つけるが如く  
ködel yajar jam jiyaju ögkü ajiyamu  
未知の地にあっては道を教えるが如く

ギルーン・バートルの嘆願を聞いて、チンギス・ハーンは次のような最期の言葉を残した（Lubsangdanjin 1990: 126）。

……

qas čilayun-tur arasun ügei  
玉石には衣がない、  
qatan tömür-tü darusun ügei  
鉄鋼には表層がない、  
qayiran törtügsen beyen-dür möngke ügei  
惜しむべくして生まれてきたこの身も永遠なる存在ではない。  
qaril buçal ügei yabuju qatayujin sedkigdün da ❖  
たゆまず前進して努力するものだ。  
jayun üile-yi üildün bötügebesü üile-yin oki  
百の事跡を成し遂げたら、事の頂点といえよう。  
ünen ügen-tür-iyen kürügsen kümün-ü sedkel beki:  
有言実行の人は意志も固い。  
öčüken duran-iyar yabuju olan-luy-a joki:  
欲望を寡少にして大勢と協調するように。

……

このようにいい残してチンギス・ハーンは逝去する。ここで、ギルーン・バートルは大ハーンから遺言を乞うことのできる立場にあったことが記されている。西夏

征服も終了し、モンゴル軍は大ハーンの「黄金の遺体」(altan kegür)を馬車にのせて北のモンゴル高原を目指した際、ギルーン・バートルは次のような賛辞を述べた(Lubsangdanjin 1990: 126)。

qaliqu qarçayai-yin jigür bolun odban çi ejen minu:

飛翔する鷹の羽となって逝ってしまった君、わが主よ。

qangginaqu tergen-ü tegegsi bolbau çi ejen minu:

ギーギーと音を立てて動く馬車の積み荷となった君、わが主よ。

……

注目すべきは、ここではギルーン・バートルが褒め称えた(maytarun)と表現している(Lubsangdanjin 1990: 126)ことである。『蒙古源流』では、「泣いて称賛した」(maytan ukilar-un)となっている(Haenisch 1955: 41)。悲しみながらも、長旅の安全と順調を祈る意味で、賛辞(maytayal)を唱えたと理解できよう。この過程で、ギルーン・バートルは祝詩師(irügelčin)の役を演じていたと理解できよう。

ところが、大ハーンの「黄金の遺体」を運んだ馬車は黄河近くの泥沼にはまり、五色の駿馬で牽いても動かず、全モンゴル軍は多大な悲しみに包まれた(Lubsangdanjin 1990: 126-127)。それはモンゴルの葬送儀礼と関係があるからである。野辺送りの際、遺体を運ぶ馬車等は目的地に到着する前に道中止まってはいけないという習慣がある。そのため、チンギス・ハーンをのせた馬車が動かなくなった時、モンゴル軍の動揺は相当大きかったにちがいない。そこで再び登場したのがやはりスニト部のギルーン・バートルである。彼は霊前において、かの有名な挽歌を詠みあげたのである(Lubsangdanjin 1990: 126-127)。挽歌の吟唱が功を奏し、馬車はまた動きだす。それを見て、「あまねく人びとが安堵し、『大いなる地』(qan yeke yajar)、かしこに(黄金の遺体を)届けた」のである。「大いなる地」とは、チンギス・ハーン一族の歴代祖先が眠る場所<sup>9)</sup>を指す。

話を再度モンゴルの葬送儀礼にもどそう。実際に野辺送りの時に遺体を運ぶ馬車等が途中に止まらざるを得なかったら、遺族たちは死者が生前に使用していたものをその地に残すなどの儀礼をおこなわなければならない(楊 2000: 41-42)。年代記のなかには、「着用していた內衣、(使用していた)宮帳、靴下をかの地に残してまつた」(emüsügsen čamča, örgüge ger, oriyasun oyimasun-i tende ongyulaba)とある(Lubsangdanjin 1990: 127)。ここではongyulabaという言葉が使われている。このongyulaqu(完了形ongyulaba)には、「埋める」、「埋めてまつる」などの意味がある。したがっておそらくモンゴル軍も同様の儀礼を挙行しただろう。私は以前、ケシク

トクトホらの学説（Kesigtoytaqu 1999: 30）を検討しながら、ギルーン・バートルが詠みあげた挽歌を分析した際に、馬車が泥沼にはまった黄河の沿岸に一種の「記念祭殿」（Durasqal-un Ongyun）のような施設が一時的に設置されていただろうと推定した（楊 2000: 41-46）。となると、チンギス・ハーンの内衣や靴下、それに宮帳類を使用しまつる設備を創った（ongyulaba）際も、挽歌を詠みあげたギルーン・バートルが先頭にたっていたと考えても不思議ではなからう。

以上、スニト部のギルーン・バートルがチンギス・ハーンの死と如何に関わっているかについて、年代記の記述を通して検討した。先に触れたように、黄河沿岸にあったと思われる「記念祭殿」は何らかの形で八白宮と連動していた可能性が高いことを考えれば（楊 2000: 40-46）、ギルーン・バートルは八白宮祭祀の起源とも無関係とはいえないだろう。何よりも注目しなければならないのは、彼の挽歌吟唱という行為が、馬車を動かした直接の原因であるように諸年代記がそろって記述していることである。ギルーン・バートルをめぐる一連の記述が事実かどうかは別として、そのように年代記に描かれるのに相応しい人物であったことは明らかである。ギルーン・バートルには詩文の吟唱力、祝詩の朗読力、そして葬送儀礼を運営できる能力がある、と後世の年代記作者たちに広く認められていたのであろう。

諸年代記の記述をもとに、スニト部のギルーン・バートルの人物像を次のように整理できよう。チンギス・ハーン生前においては、信頼できる側近のひとりで、臨終の際には遺言を乞うことができる立場にあった。そして大ハーンを対象とした葬送儀礼のなかでも、出発時には祝詩を吟唱し、人びとが動揺に陥った時には挽歌を詠みあげて悲しみを和らげる詩人でもあった。そのため、遺品類を神聖化してまつるように至るまでのプロセスのなかでも積極的に関わった人物であろう。これら一連のことから、スニト部のギルーン・バートルは、当時のモンゴルの精神文化にも精通した人物であったと位置づけることができよう。

ギルーン・バートルについて述べている『黄金史』や『蒙古源流』などモンゴル語の年代記はいずれも後世の著作であり、その事跡も伝承的な色彩が強い。年代記の作者たちは執筆の際に文字資料も参照しただろうが、現在から見れば文字資料そのものの口伝的な要素が強い。『モンゴル秘史』をはじめ、そもそもモンゴル人は主として口伝的な方法で自分たちの歴史を語ってきたのである。したがって、年代記作者たちにとって、ギルーン・バートルは決して「伝承の人物」ではなくて、その当時まで連続的に実在しつづけ、なお未来へ語りつぐに値する人物であったにちがいない。

すでに何回も触れているように、『金書』は祭祀の指針書であり、八白宮祭祀の挙

行は『金書』に依拠している。『金書』は年代記が記述する「歴史」を編纂したのではなく、むしろ年代記の記述が『金書』の方針に合致しなければならないのであろう。そのため、『金書』が記すギルーン・バートルの功績、つまり八白宮祭祀において公認されているギルーン・バートルの事跡は、いわばチンギス・ハーンが側近のギルーン・バートルについて下した人物評価のような性質を持つ。当然、サガン・セチェンのような年代記作者はギルーン・バートルの事跡をさらに具体化しなければならない。

#### 4 八白宮の祭祀者とギルーン・バートル——訴訟事件が語る歴史観

以上、チンギス・ハーンの八白宮祭祀の創設に積極的に関わった人物ギルーン・バートルについて、現在おこなわれている八白宮祭祀の実態と『金書』や年代記の記述をもとに分析を試みた。チンギス・ハーンの有力な臣下たちの子孫と有名な部族出身者からなる祭祀者ダルハトには、当然、ギルーン・バートルの子孫が含まれていてもおかしくない。道光年間に至って、ギルーン・バートルの末裔を名乗る人物が、租税の納付をめぐるオルドス左翼中旗（郡王旗）の札薩克らと対立した。この事件はオルドスにとどまらず、シリングル盟のスニト左旗をも巻きこんだ。祭祀者ダルハトの出自認識について、モンゴルの王公たちの見方を改める結果をもたらした。

本章では事件の全容を当時の公文書档案に基づいて再現する。これらの文書はナラソン（Narasun）とワンチュク（Wangčuy）らが編集した『チンギス・ハーンの八白宮』（*Činggis Qayan-u Naiman Čayan Ordu*, 1998）に収録されている。道光7（1837）年7月11日の文書からはじまり、道光20（1840）年7月29日の文書を最後に、合計12通の文書が事件の全容を如実に語っている（付録参照）。文書の標題は以下のとおりである。

1. 副盟長より、チンギスの（ギルーン・）バートルの後裔ユムドルジが不服を申したてた件について、郡王旗の協理タイジ、グンチュクドルジに送った文書（道光17年7月11日）。
2. 盟長トゥドゥブスレンから、スニト部のギルーン・バートルの後裔ユムドルジらの不服を解決するために公布した文書（道光17年7月11日）。
3. 郡王旗の協理タイジであるグンチュクらから、チンギスのギルーン・バートルの

後裔ユムドルジらが不平を訴え上告した件について、副盟長に呈した文書（道光17年10月11日）。

4. 貝子チャクドウルスレンから、チンギスのギルーン・バートルの後裔ユムドルジが不平を訴えたことについて、郡王旗に送った文書（道光18年10月15日）。
5. シリングル盟盟長、スニト左（旗）<sup>ジャサク</sup>札薩克多羅郡王チェウエンジャブから（届いた）、元スニト部のギルーン・バートルの後裔ユムドルジらが不服を申したてた件についての問い合わせ文を、イケ・ジョー盟盟長から転送してきた文書（道光19年8月3日）。
6. 盟長から、スニト部のギルーン・バートルの後裔ユムドルジが不服を申したてた件について、郡王旗衙門に調査を依頼した文書（道光19年8月3日）。
7. ジノンより、チンギスのギルーン・バートルの後裔ユムドルジが不服を申したてた件について、郡王エルキムベレクラに送った文書（道光19年9月6日）。
8. 盟長トゥドゥブスレンから、チンギスのギルーン・バートルの後裔ユムドルジらが不服を申したてた件について、貝子チャクドウルスレン、協理タイジらに出した文書（道光19年10月2日）。
9. 盟長から、チンギスのギルーン・バートルの後裔ユムドルジらが不服を申したてた件を処理し報告するため、郡王の衙門に送った催促の文書（道光20年3月11日）。
10. 盟長から、チンギスのギルーン・バートルの後裔ユムドルジらの不服申したてを処理するため、郡王旗衙門に出した文書（道光20年7月25日）。
11. イケ・ジョー盟盟長から、チンギスのギルーン・バートルの後裔ユムドルジらの不服申したてを処理した結果をシリングル盟盟長スニト左旗の郡王チェウエンジャブに知らせた文書（道光20年7月29日）。
12. ダラト旗に送る（文書）（道光20年7月29日）。

上記文書をもとに、以下では事件発生の背景とトラブルの原因、また事件の推移とその善後処理という順序で述べていく。

#### 4.1 事件の主要登場人物

事件の全容を理解しやすくするため、ここでまず主要な登場人物たちについて解説する。事件における個々の人物の行動や態度については上記12の文書に依拠している。札薩克<sup>ジャサク</sup>たちの事跡については主として『欽定外藩蒙古回部王公表伝』と『清

史稿』に基づきながら、必要に応じて『オルドス文史資料(4)』(Odunčecceg 1987: 189-213)とヘッケン・ヴァンの記述(Hecken Van 1972: 132-155)を参考したことを断っておきたい。

ユムドルジ(Yümdorji)——この人物はダルハン・バートル(Darqan Bayatur)の爵号を持ち、「五百戸の黄色いダルハト」の「小部」すなわちチンギス・ハーンの軍神黒いスウルデをまつる祭祀者である。すでに紹介したように、軍神黒いスウルデの祭祀に携わるバートルは、「スニト部出身でシベクチンという父系親族集団(Sibegčün oboj)に属し、そのヤス<sup>10</sup>(骨)はロンハチン(Longqučin)である」という(Sayinjiryal and Šaraldai 1983: 322-323)。文書のなかでも、ユムドルジは常に「スニト部のギルーン・バートルの末裔で、代々軍神黒いスウルデをまつってきた」と自称している。また、付録文書3のなかで「札蘭ユムドルジ」とあることから、彼には郡王旗から札蘭<sup>ジャラン</sup>の称号が与えられている可能性が高い。同じくオルドスでまつられていたアラク・スウルデの祭祀者たちにも、旗から官職名を「名譽的な称号」として与えられていたことがある(楊 2001: 83)。

ユムドルジの弟は、ナヤンタイ(Nayantai)といいグシヨーチ・バートル(Qosiyučü Bayatur, 「先鋒たる勇士」)の爵号を持つ。文書のなかからユムドルジの息子2人の名前が確認できる。そのうちひとりエンケダライ(Engkedalai)といい、貴族タイジのトゥメンデレゲルの家に長期間滞在している。もうひとりエンケダライの弟、バルタイ(Bartai)である。バルタイは一時郡王旗衙門の写生字ビチューチをつとめていたが、家業が貧困に陥ったことを理由に、ビチューチの職から退き父母のもとで生計を立てていた。彼も札蘭<sup>ジャラン</sup>の称号を持っていたことが文書3のなかで記されている。

ラシバルジヨル(Rasibaljuur)——オルドス左翼中旗(郡王旗)の札薩克<sup>ジャサク</sup>である。『欽定外藩蒙古回部王公表伝』巻之六・鄂爾多斯部項によると、彼は康熙59(1720)年に札薩克多羅郡王を継承し、雍正6(1728)年に死去したという。『オルドス文史資料(4)』(Odunčecceg 1987: 195)とヘッケン・ヴァンも同じ情報を伝えている(Hecken Van 1972: 150)。

郡王ラシバルジヨルは在位中の雍正2(1724)年5月10日にユムドルジの曾祖父ノルブ(Norbu)にダルハン・バートルの爵号を授与し、代々租税の納付を免除する特権を与えていることが付録文書9から確認できる。彼はまた、八白宮祭祀を運営する最高責任者ジノンをつとめていた(Narasun and Wangčuy 1998: 1139)。

トゥドゥブスレン (Tödübsereng)——オルドス右翼後旗 (ハンギン旗) の札薩克である。『清史稿』藩部世表によると、彼は嘉慶 18 (1813) 年に札薩克固山貝子を継承し、道光 21 (1841) 年に死去している (趙 1976: 8441-8442)。ヘッケン・ヴァンは 1812 年に札薩克固山貝子になったという (Hecken Van 1972: 147)。ダルハン・バートルのユムドルジが訴訟を起こした時、トゥドゥブスレンはイケ・ジョー盟の盟長をつとめていた。

ソノムラブジャイゲンドゥン (Sodnomrabjayigendün)——オルドス右翼中旗 (オトク旗) の札薩克である。『清史稿』藩部世表によると、彼は嘉慶 3 (1798) 年に多羅貝勒を継承し、道光 18 (1838) 年に死去している (趙 1976: 8440-8441)。『オルドス文史資料 (4)』(Odunčecg 1987: 198) とヘッケン・ヴァンも同じ情報を伝えている (Hecken Van 1972: 140)。ユムドルジの訴訟事件が発生した当初、ソノムラブジャイゲンドゥンは八白宮の祭祀活動を運営する最高責任者ジノンをつとめていた。

チャクドゥルスレン (Čaydurseng)——オルドス左翼前旗 (ジュンガル旗) の札薩克である。『清史稿』藩部世表ではチャクドゥルスレンは道光元 (1821) 年に札薩克固山貝子を継承し、咸豊 2 (1852) 年に死去しているとしている (趙 1976: 8447)。ヘッケン・ヴァンも同様な情報を伝えている (Hecken Van 1972: 154)。

道光 18 (1838) 年 10 月 15 日に書かれた付録文書 4 から分かるように、ユムドルジが訴訟を起こした時、チャクドゥルスレンに一時副盟長への就任が予定していたらしいが、何らかの原因で延期となった。その後、ジノンでオトク旗の札薩克ソノムラブジャイゲンドゥンが 1838 年に死去したのを受けて、チャクドゥルスレンがジノンに任命されていることが、文書 7 と 8 から読みとることができる。また、『チンギス・ハーンの八白宮』に収録されている歴代ジノンの就任順序を見れば、こちらもソノムラブジャイゲンドゥンの次にはチャクドゥルスレンがつとめていたことが記されている (Narasun and Wangčuy 1998: 1140)。

チャクドゥルスレンは副盟長にこそ就任しなかったものの、ジノンに任命されているため、八白宮の祭祀活動を運営する立場から、事件を処理するプロセスのなかで重要な役割を演じた。

セレンデジド (Serengdejid)——オルドス右翼前末旗 (ジャサク旗) の札薩克である。『清史稿』藩部世表によると、セレンデジドは嘉慶 22 (1817) 年札薩克を継承し、道光 18 (1838) 年に死去したとしている (趙 1976: 8450-8451)。『オルドス文史資料 (4)』(Odunčecg 1987: 211) とヘッケン・ヴァンも同じ情報を伝えている (Hecken Van 1972: 148)。

ジャサク旗は郡王旗の西に隣接し、地理的に近いことから、盟長トゥドゥブスレンは最初ユムドルジの訴訟をこのセレンデジドに調査させたことがある。セレンデジドは折衷案を出したものの、途中 1838 年に死去したため、最終的には盟長自身が決断しなければならなかった。

トゥメンジラガル (Tümenjirgal) — オルドス左翼中旗 (郡王旗) の札薩克<sup>ジャサク</sup>である。『清史稿』藩部世表では、彼は道光 11 (1831) 年に一等タイジの身分で札薩克<sup>ジャサク</sup>を継承し、道光 15 (1835) 年に札薩克多羅郡王<sup>ジャサク</sup>に昇格したと記している (趙 1976: 8438-8439)。『清史稿』は彼の死去時期に触れていないが、ヘッケン・ヴァンらはトゥメンジラガルの死去年代を道光 17 (1837) 年としている (Odunčec̆eg 1987: 196; Hecken Van 1972: 150)。本論文でとりあげる道光 17 (1837) 年 7 月 11 日に書かれた文書 1 では、「故王トゥメンジラガル」としていることから、トゥメンジラガルは 1837 年 7 月以前に亡くなっていたことになる。

エルキムビリク (Erkimbilug) — オルドス左翼中旗 (郡王旗) の札薩克多羅郡王<sup>ジャサク</sup>で、トゥメンジラガルの息子である。『清史稿』藩部世表では、彼を額爾<sup>エル</sup>爾<sup>チム</sup>齋<sup>ム</sup>木<sup>ビリク</sup>畢<sup>リク</sup>里克 (Erčimblig) と表現し、道光 17 (1837) 年に札薩克多羅郡王<sup>ジャサク</sup>を継承し、光緒 27 (1901) 年に死去したとしている。『オルドス文史資料 (4)』もエルチムビリクと表現している (Odunčec̆eg 1987: 196)。

文書 1 (道光 17 年 7 月 11 日) と文書 3 (道光 17 年 10 月 11 日) では、「故トゥメンジラガルの印務を署理する協理タイジ……」とあるが、道光 18 年 10 月 15 日に書かれた文書 4 では「郡王エルキムビリク」と出ていることから、エルキムビリクが郡王になったのは道光 17 (1837) 年 10 月中旬以降のことと推察できよう。

ユムドルジが上告をはじめたころ、郡王旗の実権は 2 人の協理タイジに握られていたことが文書から読みとれる。ひとりにはグンチュク (Göngčuy) で、もうひとりにはグンチュクドルジ (Göngčüydorji) である。

ビルーングライ (Biligüdalai) — チンギス・ハーンの八白宮の祭祀活動に従事する「五百戸の黄色いダルハト」の最高責任者タイシ (太師) をつとめていた。タイシ (太師) とはタイボ (太保), ホンジン (官人), ザイサン (宰相) と並んでダルハトのなかの「尊き 4 つの爵号」のひとつである (Qurča 1990: 94-105)。文書 3 から分かるように、ユムドルジが郡王旗と対立した事件のなかで、タイシ・ビルーングライは一貫して税金納入の義務がないと主張し、ダルハトの本来の権利を守りとおした。

以上、さまざまな立場からユムドルジの上告事件に関わった主要な人物たちについて簡単に説明した。次に、実際に事件がどのように発生し、展開していったかについて

て、文書資料に基づいて再現することにした。

## 4.2 事件の背景——ダルハトの法的地位の問題

事件の背景には、清朝時代におけるダルハトの法的地位が明白ではなかったことが考えられる。つまりダルハトとはどんな集団で、誰に管轄されるべきかについての清朝政府側の認識がはっきりしていなかったのである。

清朝時代以前、祭祀者ダルハトおよび彼らが維持していた八白宮は、常にジノンに追随し（楊 2000: 44-45）、特定の部（ayimay）やオトクに属してはいなかった。ジノンは右翼三万戸の統率者とされ、普段はオルドス万戸と一緒に生活していた。そのため、ダルハトたちもオルドス万戸と行動を共にしていた。

北元時代において、ジノンは大ハーンにつぐ高位の者であった。ことに八白宮祭祀との関連でいえば、ジノンは祭祀の時に大ハーンを代表して率先して諸種の儀礼をおこなう者であった（Sayinjiryal and Šaraldai 1983: 429）。このことは『金書』のなかの諸種の法規を集めた「イケ・アルバ」からも確認できる。つまり、祭祀を運営する立場においてのみ、ダルハトのシャラルダイらはジノンを「ダルハトを管理する最高の官人」と認めている（Sayinjiryal and Šaraldai 1983: 425）。ただし、この記述はダルハト集団がジノン個人の属民であることをまったく意味しないものである。

清朝の成立にともない、ジノンは右翼三万戸を統轄する「副ハーン」同様の地位から転落した。そのため、八白宮の祭祀活動を運営する長たるジノンは、もっぱらオルドス七旗の札薩克<sup>ジャサク</sup>のひとりが担当することになった。このようなジノンは盟長によって任命されるが、盟長自身が兼任することもあった。

歴史学者の岡は、『理藩院則例』「道光朝・卷六・設官」にあるダルハトに関する条文を満洲語から次のように訳している（岡 2001: 3-4）。

イヘ・ゾーの境内に昔からチングス・ハンの陵寝がある。オルドスの七旗には、昔から陵寝を守護し祭祀する事務を担い処理するダルハト 500 戸が設けられ、毎年約 500 両の銀両を供出し、修理や祭祀に用いる。これらの民を、所轄の王等に管理させないようにせよ。所轄盟の中から有能なザガを一人選び、特に命じて弾圧管理させよ。（以下略）

上記条文について、岡は次のように分析している。「清朝のモンゴル法制におけるダルハドの地位はかなり曖昧なものである。……（中略）このような曖昧な関係から、オルドス側にはダルハドに対する管轄権限を既成事実とする認識が存在したようであり、両者の関係に何らかの問題が生じた場合、紛糾の原因にもなったものと思われる」という（岡 2001: 4）。

岡が分析に用いたのは道光朝の条文であるが、本論文所収の付録文書 10 には次のような文言がある。「盟長衙門にある比丁档冊を調べたところ、乾隆 16 年から道光 15 年まで 3 年に一度比丁を行い理藩院に報告していた档冊にも、ユムドルジらが代々章京ラブジャイのソムのタイジ、トゥメンデレゲルの属民アルバトであったことは明かである」とある。このことから見れば、遅くとも乾隆年間には、オルドスの郡王旗の札薩克側が勝手にダルハトを分割し、誰それ貴族タイジの属民アルバトに編入されていた可能性がある。札薩克側のこのような無断分割案はとうていダルハト側の同意が得られたとは考えにくい。単なる書類上の登録であったかもしれない。それでも報告を受けていたはずの理藩院が何ら反応を示さなかったのも、あらためて清朝政府の曖昧な態度を浮きぼりにしていることになろう。

清朝政府が明白な政策をうちださないなかで、道光 4 (1824) 年に至って、ダルハトをめぐる一大事件が起きた。いわゆる「道光年間の爵号廃止」事件である。この事件についてはナ・ホルチャ (Qurča 1990: 94-105) や岡 (2001) らによる研究がある。事件は本論文でとりあげるユムドルジの訴訟事件とも本質的に関連していることから、ここでは主として岡の研究から「爵号廃止」事件の概要を紹介しておきたい。

道光 4 (1824) 年、帰綏道と神木理藩院章京らがオルドスで起きたダルハトの民事事件の審理を契機に、「ダルハドが元来設置しているタイシ、タイボ、ザイサン、ホンジンという称号は、およそ例規に合わない」と称して理藩院に報告した。タイシ (太師) やタイボ (太保) などは清朝においても皇帝から大臣らに下賜される称号で、ダルハトがこれを用いるのは皇帝の専権事項を犯したことになるとの意見である。道光皇帝も理藩院からの上奏に沿って、称号の廃止を命じたのである (岡 2001: 4-5)。

道光皇帝の命令にオルドスの一部の王公も呼応したが、ダルハトの最たる責任者ビルンダライらは受け入れられないとの立場を鮮明にし、内外 10 盟の王公たちに理藩院からの命令の不合理を訴えたのである。それに応えるように、道光 8 (1828) 年に入って、ハルハのセチェン・ハン、ジャサクト・ハン、ハラチン王らをはじめとする 10 盟の王公たちが連名で、ダルハトの称号を回復するように理藩院に願い出たのである。清朝政府内でも激しい議論を経て、道光皇帝からついに次のような諭旨が下された。「チンギス・ハーンの墓廟を守護するモンゴル人は年久しい。この件のタイシ等の空号は、昔からこのように伝承されてきた。せいぜいモンゴル人の旧習にすぎず……(中略) 直ちに恩を施して、セツェン・ハン・アルタシド等が請うた通りに、これらの祭祀の事務を統轄するタイシ・タイボー・ザイサン・ホンジンの空号をすべて同様に回復させるように」と内外 10 盟に伝達された (岡 2001: 7-8)。

元朝時代から継承されてきたダルハトの「尊き4つの爵号」も、最終的には「モンゴル人の旧習を表した空号」にすぎないと位置づけられて解決した。これは、清朝政府が面子を保つためにうちだした解決策でしかない。岡の指摘通り、道光朝においては、八白宮祭祀の政治的な一面に清朝は鈍感になっていた。大ハーンを失っていたモンゴル側は、ダルハトの爵号事件で久々に、政治的な結束を演出できたのである（岡2001:2）。

ダルハト側が正当な位置づけを獲得したものの、彼らを自らの利権範囲内に組みこもうとする動きはその後もつづいた。爵号事件がおちついてまもなく、ユムドルジの事件が出てきたのである。

### 4.3 事件の経過

#### 4.3.1 事件当時の郡王旗

チンギス・ハーンの八白宮とその祭祀者ダルハトたちは、常にジノンにしたがって移動していたことはすでに述べた。清朝が成立する以前、八白宮はかなり長いあいだ黄河の南岸にある広慧寺（Wang-un yool-un juu）の近くに置かれていた。広慧寺はジノンの駐营地だった。その後、地理的にはほぼオルドスの中央に位置する郡王旗に移転されるが、これはオルドス・モンゴルが後金国の統治を受け入れ、旗制度が導入された時に、ジノンが郡王旗の初代札薩克<sup>ジャサク</sup>に任命されたためであろう。以降、ジノンは必ずしも郡王旗の札薩克<sup>ジャサク</sup>が担当するものではなく、オルドス七旗の札薩克<sup>ジャサク</sup>から選出されるようになる。しかし、郡王旗以外の札薩克<sup>ジャサク</sup>がジノンになったとしても、八白宮と祭祀者ダルハトはずっと他旗に移ることはなく郡王旗に駐営したままであった。ダルハトたちの居住地が郡王旗内に限定されたことから、郡王旗内の貴族タイジたちのなかには、彼らを自分の属民アルバトとみなしたり、無断で属民アルバトとして登録したりする者もいたであろう。

郡王ラシバルジョルは、八白宮祭祀の最高責任者ジノンでもあった。ジノン・ラシバルジョルは「尊事に携わる使者たちは、永遠に駟馬と糧食供出を免除せよ」との旨の印璽つきの信任状を雍正2（1724）年5月10日にノルブという人物に配布していた。ラシバルジョルと軍神黒いスウルデの祭祀者でダルハン・バートルの称号を持つノルブとのあいだで、一種の共通認識があっただろう。つまりダルハン・バートル・ノルブは往時において、チンギス・ハーンの霊前で挽歌を詠みあげ、八白宮の祭祀活動の創設に関わったスニト部のギルーン・バートルの子孫である、と認められていたの

ではないか。信任状の配布は新たに任命することを意味せず、あくまでもダルハン・バートル・ノルブの地位を再確認する行為であったにすぎない。

ラシバルジョルの長兄で郡王サグワ (Sayba) と父の郡王トンロブ (Tongrub) もジノンであった。ラシバルジョルの死後、郡王位は再びトンロブの長男サグワ家にもどり、サグワの長男ジャミヤン (Jamiyang) が郡王となる。ジャミヤン郡王もその息子チェリンドルジ (Čeringdorji) 郡王ともジノンであったことが、『チンギス・ハーンの八白宮』から確認できる (Narasun and Wangčuy 1998: 1139-1140)。このことはチンギス・ハーン祭祀の指針書たる『金書』の記述とも一致する (楊 1998: 120-122; Qurčabayatur and Čoytu 2001: 216-228)。清朝時代を通して全部で約 17 名のジノンが『チンギス・ハーンの八白宮』に列挙されているが (Narasun and Wangčuy 1998: 1139-1140), そのうち 11 名は郡王旗の札薩克が就任している。ジノンを特定の王公家が世襲してはならないというのは建前で、少なくとも乾隆年間のチェリンドルジ・ジノンまでは、郡王旗王家からジノンの称号を他所へ渡していないのが事実である。おそらくこのようなこともあって、郡王旗の貴族タイジたちは、自分たちとダルハトとのつながりは他所よりも強いと認識するようになったかもしれない。

貴族タイジとダルハトとの関係に変化が生じたことは、当時の郡王旗内の政治情勢とも無関係ではなからう。「ダルハトの爵号廃止事件」を知る立場にあったパウードルジ札薩克はすでに道光 11 (1831) 年に罪によって札薩クの位を剥奪されていた。同じ年にパウードルジの息子トゥメンジラガルは一等タイジの身分で札薩克を継承するが、やがて道光 17 (1837) 年に死去してしまう。その父親のパウードルジも翌年に亡くなる。後を継いだのはパウードルジの孫で、トゥメンジラガルの息子エルキムビリクである (趙 1976: 8438-8439)。相次ぐ札薩クの死去によって、当時の郡王旗には先の道光 4 年から道光 8 年にかけて一大事件となったダルハトの「爵号廃止事件」の重大さを認識していた有力な支配者がいなかったのかもしれない。つまり、ユムドルジが上告していたころ、郡王旗は札薩クトゥメンジラガルが死去したばかりで、その息子のエルキムビリクが幼少で、郡王位継承がいまだに実現していない時期だった。前任札薩クトゥメンジラガルの在位年数が短く、協理タイジ 2 人が護印し、旗務を補佐していたため、ダルハトの法的地位を十分理解していた人物もいなかったのであろう。さらにこの時点で、ジノンの称号が他旗に移り、郡王旗の政治的な没落とも無関係ではなからう。

### 4.3.2 事件の発端

郡王旗に住むダルハトのダルハン・バートル・ユムドルジー族は、スニト部のギルーン・バートルの後裔だと自己認識していた。ギルーン・バートルを輩出したスニト部が、清朝時代にシリングル盟に編入されていたこともユムドルジは把握していた。それは、ダルハトたちがチンギス・ハーンの肖像画や軍神黒いスウルデの分身を携えてモンゴル各地を巡回していた経験から（楊 1995: 48-49）、モンゴル各部の状況についても的確な情報を有していたのであろう。そのため、いざ王公札薩克<sup>ジャサク</sup>を巻きこんだ事件が発生すると、彼は早速自らの祖先の出身部族のところへ赴いて訴えたのである。付録文書5には、ユムドルジの訴えを受理したスニト左旗の札薩克多羅郡王<sup>ジャサク</sup>チュウエンジャブが、シリングル盟盟長の立場から、イケ・ジョー盟盟長あてに書いた書簡が転録されている。それによると、郡王旗内にはスニト部に出自を持つダルハトが全部で28戸あるという。これらのダルハトたちをいつのまにか章京ラブジャイ、バヤジホ、マシジラガルらのソム内に住む貴族タイジのタクスウルル、ラシニマ、ブケレー、ジクミドラの属民アルバトに編入されていたことに対して強い不満を顕わにしている。付録文書3から分かるように、ユムドルジはラブジャイのソムに、弟のナヤンタイはバヤジホのソムにそれぞれ属していた。ラブジャイのソムのなかでも、ユムドルジはタイジ・トゥメンデレゲルの「随丁たるアルバト」(qamjily-a-yin albatu)であったことが付録文書10に記されている。清朝時代の一般的な身分制度から見れば、タイジ・トゥメンデレゲルはユムドルジの直接の主人にあたる。ユムドルジは直属の主人個人に対し、租税の義務を負うことになる（田山 1954: 170）。

事件発生のおもてむきの原因は、租税の納付にあるように双方が主張している。付録文書3のなかで、タイジで札蘭<sup>ジャラン</sup>アディヤは租税徴収について詳しく証言している。それによると、ユムドルジから毎年銀10両を銅貨11,000枚に換算して、租税として徴収していたという。ただし、いつから徴収しはじめたかは不明である。雍正2(1724)年5月10日にユムドルジの曾祖父ノルブに配布された、馱馬や糧食の供出を免ずる旨の信任状がどこかの時点で効力を失っていたようである。これには先に述べた郡王旗における札薩克<sup>ジャサク</sup>の相次ぐ交替、貴族タイジたちのダルハトに対する見方の変化とも無関係ではなかろう。また、ユムドルジ自身も旗から札蘭<sup>ジャラン</sup>という名譽的な称号をもらったり、その息子バルタイは旗の写字生ピチューチを担当したりしていることを見れば、曾祖父ノルブの代からユムドルジに至るまで、この一族と郡王旗札薩克家<sup>ジャサク</sup>との関係は概して良好かつ親密であったと判断できよう。ユムドルジは本来ダルハト

の身分で、チンギス・ハーンの八白宮祭祀以外に一切の公務への関わりを禁じられているはずである。にもかかわらず、彼はまた郡王旗の軍用馬群やラクダも管理していたこと（付録文書9）も、旗衙門との親交ぶりを示していると理解できよう。ユムドルジが「旗とソムの定めたアルバや租税に対しても、できるだけ馬や牛を献上して努力してきた」（付録文書3）ことも、別の側面からユムドルジの旗衙門に対する熱心な態度を表していると読みとれよう。

そのようなユムドルジはなぜ、「いつしか疲弊したため、奴才は今後輝かしい（軍神）スウルデの御前で鮮血を飲んでつとめるか、さもなければ旗とソムのアルバを支払うために生きるか」（付録文書3）と主張するようになったのだろうか。また、その息子のバルタイも「家が貧しいことから再びビチューチの職にあたらず、父母のもとで生計維持にはげむ」（文書3）ようになったのだろうか。

### 4.3.3 事件の真相

私はユムドルジの家計は決して苦しくなかったと見ている。ダルハトは祭祀用の費用を求めてモンゴル各地を歩き、収集してきた家畜や銀両の一部を生活に充てる。ユムドルジはさらに旗の軍用馬群やラクダも放牧していたことから、一般のモンゴル人よりもはるかに豊かな生活を送っていた可能性が高い。さらに、当時衙門の写字生ビチューチなど中・下級の役人や使用人には何ら報酬はなかった。衙門での勤務期間中の食糧も自己負担であったことは、清朝時代からの慣習である。ある程度裕福な家計でないと、実際にはつとまらない職であった。

では、トラブルの本当の原因はどこにあるのだろうか。私はユムドルジと貴族のタイジ・トゥメンデレゲルとの人間関係に事件の直接の原因が隠されているのではないかと推定している。

ユムドルジに何人息子がいたかは不明である。旗衙門の写字生ビチューチをつとめていたバルタイとその兄のエンケダライの少なくとも2人いたのは間違いない。問題はこのエンケダライの存在である。エンケダライは何らかの理由で、貴族タイジのトゥメンデレゲルの家に長期間滞在していた。すでに触れたように、トゥメンデレゲルとその祖先は、一方的ではあるが、乾隆16（1751）年から代々ユムドルジ一族の主人とされてきた家系である（付録文書10）。

エンケダライについて、父親のユムドルジはジャサク旗<sup>ジャサク</sup>の札薩克一等タイジ・セレンデジドに次のように述べている（付録文書3）。

タイジ・トゥメンデレゲルの家にいる息子エンケダライに私が会いに行ったら、タイジ・ラシニマと出会ったのは事実である。私は（トゥメンデレゲルの家に）行って何ひとつ悪いことをしていない。

また、エンケダライの弟で、バルタイは以下のように説明している（付録文書3）。

私が兄のエンケダライに会おうとしてタイジ・トゥメンデレゲルの家に行った時も、悪いことは何ひとつしていない。

これに対し、タイジ・ラシニマと札蘭<sup>ジャラン</sup>バトムンケらは別のことを主張している（付録文書3）。

札蘭<sup>ジャラン</sup>ユムドルジがタイジ・トゥメンデレゲルの家に近くまで行っていたのは、何かを企んでいたかもしれない。

以上、三者からの証言を集めたうえで、オルドス右翼前末旗の札薩克<sup>ジャサク</sup>セレンデジドは次のような処理案を出している（付録文書3）。その後の展開のなかでも、セレンデジドの処理案が基本的に踏襲されたと推定される。

タイジ・トゥメンデレゲルはユムドルジの息子エンケダライを（自分の）家にとどめておき、その両親に孝行できなくなった。そのため、父のユムドルジと弟のバルタイはエンケダライが懐かしくなって行ってみたら、かえってエンケダライを会わせなかった。そこで、ユムドルジは悲しくなり、どうしても会いたいといつづけただけで、何ひとつ悪いことはしていない。それなのにタイジ・ラシニマがあいだに入って扇動し、ユムドルジが何かを企んで居座っている、と報告した。それを見れば、タイジ・ラシニマは悪意からタイジ・トゥメンデレゲルと庶民ユムドルジの仲を離間させ、騒ぎを起こしたことははっきりしている。

以上、三者の主張と札薩克<sup>ジャサク</sup>からの裁断から読みとれるのは、ダルハトのユムドルジとタイジ・トゥメンデレゲルが、ユムドルジの息子エンケダライをめぐる激しく対立していたということである。考えられるのは、タイジ・トゥメンデレゲルに男子がなく、ユムドルジの息子エンケダライを養子か婿養子にしようとして長期間にわたって自分の家にとどめていたということであろう。ユムドルジが誇り高きダルハトの身分であったこと、家業が決して貧困ではなかったことから、ユムドルジの息子エンケダライを貴族トゥメンデレゲルが単なる使用人、下僕として家にとどめていたとは考えられない。ユムドルジに息子が2人いる以上、最低ひとりをダルハトに任命すれば法的には問題ない。もうひとりを養子に出すことも可能である。

さらに想像するならば、おそらくエンケダライが小さかったころから、タイジ・トゥメンデレゲルの家で生活していたのではないか。エンケダライを貴族タイジとして育てあげるためには、ダルハトの父ユムドルジへの思いを絶たせる必要がある、とタイジ・トゥメンデレゲルが工夫していたのかもしれない。

以上のような推測を前提に考えると、おそらくタイジ・トゥメンデレゲルの思惑が、ユムドルジにとっては次第に受け入れられないことになっていった可能性が出てくる。ユムドルジも多分最初のころは、息子エンケダライがタイジ・トゥメンデレゲルの家に滞在することを反対しなかったのではないか。会いに行っても会わせなかったことから、悲しくなっていくづけたにちがいない。それをタイジ・ラシニマは、ユムドルジが息子エンケダライを連れて帰ろうとしている、と拡大解釈をしたものと見られる。タイジ・ラシニマとタイジ・トゥメンデレゲルの関係は不明であるが、同じく貴族タイジの身分で自分たちの立場を守ろうとしていたことだけははっきりしている。

いろんな思惑からエンケダライを本当の父親ユムドルジに合わせようとしなかった際、タイジ・トゥメンデレゲルは多分、ユムドルジを単なる「随丁たる庶民」と見下し、その態度が逆にユムドルジの系統意識を喚起させたのではないか。スニト部のギルーン・バートルの子孫であるという名誉ある出自、郡王旗の札薩克<sup>ジャサク</sup>でジノンでもあったラシバルジョル王から曾祖父ノルブに配布された信任状の存在、そして自らもダルハン・バートルを継承しているダルハトであるという誇りから、貴族タイジたちへの不満が一気に頂点に達したのであろう。それでも、息子をめぐるとの対立は決して上告の理由にならないことをユムドルジは十分承知していた。彼は旗政に熱心で札蘭<sup>ジャラン</sup>の称号をもらい、馬や牛を税金として献上していた姿勢を転換し、雍正2年に配布された信任状を持ち出して抵抗をはじめたのである。

ユムドルジが租税納付を拒否できたのは、ひとりの強力な支持者が背後にいたからであろう。それはダルハトの責任者で、タイシ（太師）・ビルーンダライの存在である。前に述べたように、タイシ（太師）・ビルーンダライは道光4年から道光8年にかけて発生した「ダルハトの爵号廃止事件」の際、先頭に立って抵抗していた人物である。「ダルハトは如何なる札薩克<sup>ジャサク</sup>の管理も受けず、一切の租税を納付しないで、ただチングス・ハーン祭祀に専念することを義務とする」法的な位置づけを再確認した有力者である。そのタイシ（太師）がユムドルジの苦悩を無視するわけにはいかなかった。札薩克<sup>ジャサク</sup>一等タイジ・セレンデジドが提示した「(ユムドルジは) 状況を見て毎年（銀）3両の租税を旗のアルバ類に充てる」との折衷案も一蹴した。「ユムドルジ

はただひとつ、スウルデの御前にてバートル（勇士）としての義務を果たす以外、旗とソムに（銀）3両のアルバも支払わない」と旗衙門等に伝えていたのである。ユムドルジがシリングル盟に訴えていたこと、つまりより多くの王公たちに事件の真相を知らせようとする手法も、タイシ（太師）ビルーンダライから暗示されたものであろう。

このように、一連の事件はダルハトのユムドルジとタイジ・トゥメンデレゲルとの個人的な対立から、租税納付の拒否という公的な問題へと発展していったのである。タイジとの対立の原因は、ダルハトを「随丁たる庶民」とみなしたことにも原因があるろう。そして、ダルハトの最たる責任者ビルーンダライは再びダルハトの合法的な地位を守るために、ユムドルジを強く支持していたのである。

#### 4.3.4 ダルハトの地位をめぐる双方の主張

人間関係をめぐるタイジとの対立から租税納付の拒否へと転じたダルハトのユムドルジは、自らの正統な出自を確認するために上告をはじめた。彼は上告文のなかでチンギス・ハーン祭祀の指針書『金書』のなかの一節を用いて自らを位置づけている（付録文書1, 3, 4）。具体的には「チンギス・ハーンの黄金恩賜」（*Činggisü Qayan-u yeke altan tügel*）あるいは「幸ある大宴の恩賜」（*Qutuγtu yeke qurim-un tügel*）のなかに見られるチンギス・ハーンの4人のバートルの功績を褒め称えたくだりを援用している（楊 1998: 95, 107）。恩賜（*tügel*）は、八白宮の夏季大祭の際に、チンギス・ハーンやモンゴルの歴代ハーンに仕えた英雄功臣たちの子孫に分配される（*Sayinjiryal and Šaraldai* 1983: 103-104; 楊 1998: 32-33）。これらの英雄功臣たちのなかには、かのチンギス・ハーンの「4人のバートル」たちも含まれる。ダルハトのユムドルジが引用したのはまさにその「4人のバートル」を称賛した部分である。

『金書』はチンギス・ハーン祭祀に関するあらゆる法規と義務、それに祈祷文類を収録した権威ある指針書である（楊 1998: 75）。そのなかの「チンギス・ハーンの黄金恩賜」は、英雄功臣たちの功績を述べる時に必然的にチンギス・ハーン個人とのつながりを強調している。ダルハトのユムドルジは当然『金書』の性質についても熟知していたことから、自らの祖先ギルーン・バートルとチンギス・ハーンとの結びつきを持ち出したのであろう。

これに対し、郡王旗のタイジたちはユムドルジを見下している。その態度は、チンギス・ハーンの軍神黒いスウルデ祭祀の性質や祭祀の時に使用される『金書』の性質についても無知であったことの表れでもある。このような無理解は当時のオルドスの

楊 儀礼が維持する集団の歴史的記憶

ほかの札薩克たちにも共通していたかもしれない。彼らはダルハトの本来の出自について無知だけでなく、八白宮祭祀についても、儀礼の現象にのみ注目していたようである。ここでいま一度文書のなかの表現を見てみよう。

まず、郡王旗の協理タイジらは「彼ら（ユムドルジ）には13年に一度チンギス・ハーンの黒いスウルデの御前にて、祭祀用の羊と山羊の血を飲むアルバ（義務）があった」（付録文書10）と表現している。

また、事件を処理するための案である付録文書9には次のような表現が見られる。

（ユムドルジらが軍神）黒いスウルデの御前にて血を飲むことは、先王ラシバルジョルが出した信任状どおりにしたがるように。……アルバ等を徴収せずに、もっぱら黒いスウルデの御前にて羊や山羊の血を飲む役に徹するように。……

このように、郡王旗のタイジや札薩克たちはユムドルジの「ダルハン・バートル」、ナヤンタイの「グショーチ・バートル」という爵号にはまったく触れずに、血を飲む儀礼についても「一種のアルバ（義務）」だと解釈している。彼らがこのような見方を示すようになったのも、ダルハトの本来の出自を知らずに、オルドスの貴族タイジたちの属民アルバトであると認識していたからであろう。

#### 4.4 玉虫色の決着

事件はダルハトのユムドルジの租税納付拒否から、ダルハトという祭祀者集団の出自に関わる問題へと拡大し、政治化していった。それは、ユムドルジがシリングル盟盟長衙門にも訴え出たためである。他の盟旗の王公に訴えることによって、内外モンゴルのより多くの人びとに知らせようとする手法は、先の道光4～8年の「ダルハトの爵号廃止事件」の際、太師ビルンダライがとった戦略と同じである。つまり、ユムドルジの行動は、太師ビルンダライをはじめとするダルハトたちの支持によって実現されていた可能性が高い。

オルドスの札薩克たちに比べて、乾清門行走でシリングル盟長、スニト左旗の札薩克チェウエンジャブはきわめて大局的な見地から問題を意識していたようである。チェウエンジャブはまずユムドルジを「わがシリングル盟のスニト旗から以前に主君チンギスの輝かしい御顔をまつる祭祀に派遣した、グリーン・バートルの後裔」である、と明確に認めたくえて、さらに次のように指摘している（付録文書5）。

思うに、主君チンギスは内外諸盟のすべての王公タイジらの祖先であり、その輝かしい出自を守りまつる500戸（のダルハト）は、10盟の多くの旗から派遣された人びとである。

昔から現在に至るまで一切のアルバを免じられ、ただひとつ聖主チンギスの輝かしい事跡を継承し、つつしみ深くまつってきた人びとである。また、このほどタイシ（太師）、タイボ（太保）、ホンジン（官人）、ジャイサン（宰相）などの称号を中止させようとの事件の際、ハルハのセチェン・ハンなど大勢のモンゴルの王公たちが（チンギス・ハーン祭祀の）本来の由来を持ち出して（理由とし）、皇恩をいただいて空号をひきつづき下賜され、主君チンギスの輝かしい事跡を継承しまつることを許可するよう嘆願し上奏したところ、諭旨に遵い許可された。このいきさつを多くの盟の盟長に知らせており、それぞれの档冊にも明記されているはずである。ギルーン・バートル以降、その後裔のバートル・ユムドルジの代に至るまで所管ジノンからの文書があるにもかかわらず、オルドスの札薩克<sup>ジャサク</sup>や協理タイジらがのさばり、勝手にアルバを課して、主君の祭祀を中断におこむなど、甚だ道理に合わないため、本件を送った。

チェウエンジャブ盟長のこのような指摘を受けて、イケ・ジョー盟盟長トゥドゥブスレンは慌てて「バートル・ユムドルジらはもともとスニト左旗から出自を持つダルハトかどうか」、丁冊を調べるように、ジノン・チャクドラスレン（付録文書5）と旗衙門（付録文書6）にそれぞれ依頼文書を出している。

すかさずジノンも動かざるを得なかった。ダルハトのヤムタト<sup>11)</sup>を呼んできて調べたところ、かえってきたのは明晰な回答だった。「われわれダルハトの500戸の人びとは、主君チンギスの八白宮を維持する者である。バートル・ユムドルジは間違いなくスニト部のギルーン・バートルの子孫である」との返事であった（付録文書7）。それを受けてジノンも盟長に以下のように報告する以外に方法はなかった（付録文書8）。

思うに、主君チンギスは内外諸盟の王、貝勒、貝子、公、タイジらの祖先である。500戸の（ダルハト）は元来10盟の諸旗から派遣された、輝かしい祖先をまつるための人びとである。どれぞれの旗の所属である、とわれわれが識別するのは困難である。そのため、請うらくは盟長殿のところから明察し、旗の属民であると主張している郡王旗の衙門にも調査を依頼し、彼ら（ダルハト）の本当の出自を確認しよう。

しかし、ジノンの意見は決してそのまますべて解決案に反映されることはなかった。盟長から郡王旗に出された催促の文書（付録文書9、10）と、シリングル盟盟長チェウエンジャブへの返事（付録文書11）にも、ユムドルジの出自やダルハトは内外モンゴル10盟から派遣された集団であることについて、まったく触れていない。むしろ、「乾隆16年から道光15年まで3年に一度比丁を行い理藩院に報告していた档冊にも、ユムドルジらが代々章京ラブジャイのソムのタイジ、トゥメンデレゲルの属民アルバトであったことは明らかである」（付録文書10）、と再度主張していることが目立つ。

それでも、租税徴収はあきらめるほかなかった。シリングル盟盟長が理藩院への上告を用意していること（付録文書9）、理藩院からもしイケ・ジョーとシリングル二盟による合同審理を命じられた時に、その費用を郡王旗が負担しなければならないこと（付録文書9）などを総合的に考慮して、「黄金スウルデの祭祀に専念させるほか、一切のアルバを徴収しない」解決策を導きだしたのである。ユムドルジが求めていた、スニト部のギルーン・バートルの子孫であるという承認は得られずじまいになったのである。そして、おそらくは事件の本当の原因だったと思われる貴族トゥメンデレゲル家に長期間滞在していた息子エンケダライの処遇も当然、不明確のまま幕を降ろすしかなかったのであろう。

## 5 おわりに——人類学的歴史研究の有効性

以上、本論文は現代における八白宮祭祀に関する民族誌と17世紀以降のモンゴル語年代記や祭祀関係の古文書資料を用いて、ギルーン・バートルというモンゴル・ハーン国時代に活躍したとされる人物に焦点をあてて祭祀者ダルハトの歴史認識について述べてきた。つづいて最後に、人類学的手法で歴史的な儀礼を研究題材とした場合の有効性について議論を進めたい。

### 5.1 儀礼が維持する歴史的認識

冒頭でも述べたように、私は本稿でモンゴルの歴史的儀礼をとりあげた際に、エリアーデの「祖型と反復」説を援用した。ここで再び、エリアーデ説の再検討をも射程に入れながら、私自身の調査研究の見地から、モンゴルの歴史的儀礼について若干の討論を行いたい。

エリアーデは、「伝承社会にとって、すべての生活上の重要な行為は、神々とか英雄によってはじめにおいて啓示されたものであった」とし、「人はただこれらの模範的典型的なしぐさを永遠にくりかえすのみである」と強調している（エリアーデ1970: 46）。きわめて明快なこの説には、いくつかの大きな問題点が隠匿されているように見える。まず、人類社会——たとえそれが古代社会、あるいは古代に限定したとしても——を単純に「古代文明群」と「伝承社会群」に二分することが、どこまで有効かという問題である。かりにそのような設定が成立するとした場合、モンゴルははたしてどちらの「群」に属するかについても、簡単に結論を下すわけにはいかないのではなからうか。そもそもこの問題は人類学という学問体系の成立した背景とも関

係し、すでに人類学者たち自身による反省過程を経つつあるため、ここでは深入りしないこととしておきたい。

私はここでエリアード説の比較的小さな問題点をとりあげたい。それは、人びとの社会的行為を短絡的に「神々とか英雄」たちの啓示と結びつける発想である。ある時点における人びとの社会的な行為を、原初の神々や英雄たちの単なる忠実な模倣とする説は、その社会の歴史的連続性を否定する結果になりかねない。どの文化も祖型をただ単に反復しているならば、その祖型は「伝統」として万世不変のものとして理解されることもありうる。こうなると、エスノセントリズムや本質主義に接近する可能性すらある。実際、すべての「伝統」というものは、たえず創られてきたものであることは、人類学者の共通の認識となってきた現在の、祖型を強調する意義は低下しているといわざるを得ない。

モンゴルの場合、本論文で示したように、たとえばチンギス・ハーンの軍神黒いスウルデをまつる時、祭祀者たちの編陣にはモンゴル・ハーン国時代の軍隊の布陣が反映されている。このことは、何も祭祀者ダルハトたちがモンゴル・ハーン国時代に一時先鋒をつとめていたギルーン・バートルなどの行為を模倣していることを意味しない。モンゴル・ハーン国も含め、その軍事組織に貫いているのは、北・中央アジア固有の軍事思想である。八白宮祭祀にもその歴史的な軍事思想が伝わっているにすぎない。いわば、儀礼の場での歴史的な思想の再演である、と見た方が適当であろう。

本論文の主要な登場人物のひとり、道光年間のユムドルジの出自意識は決して個別的な系統観ではない。ユムドルジの出自意識にはモンゴル人の歴史観が含蓄されている。軍神黒いスウルデの血祭が最高潮に達した時に、血を飲む儀礼がある。この際、血を飲む祭祀者ダルハン・バートルを祭祀の進行係が呼び出す時に、そのダルハン・バートルがスニト部の出身であることを明確にしている（3.1 参照）。このことは、血を飲む儀礼は特定の父系親族集団、すなわちスニト部の出身者のみによって担われてきたことを示している。祭祀者ダルハトの内部において、個々の儀礼は各々特定の父系親族集団と結びついていた可能性が高い。これらの父系親族集団の名称はほとんどモンゴル・ハーン国時代にも見られる。『モンゴル秘史』をはじめ、年代記はさまざまな部族集団、父系親族集団の栄枯盛衰の歴史について書いてきた。年代記の記述はさらに八白宮祭祀の指針書たる『金書』のなかで高度に要約されたかたちで反映されている（Qurčabayatur and Čoytu 2001: 4-5）。ダルハトたちはその「高度に要約された」年代記の内容については熟知していた。必要があれば、彼らはその内容を訴状に盛りこむことも辞さなかったのである。

スニト部出身の祭祀者が代々軍神黒いスウルデのダルハン・バートルをつとめてきた。ダルハトたちの儀礼の時の布陣にもダルハン・バートルは参列する。布陣はモンゴル・ハーン国時代における軍隊の編陣を儀礼の場で再現したものである。儀礼の場でのダルハン・バートルの位置（図1参照）と年代記が伝える13世紀のモンゴル軍内におけるギルーン・バートルの位置がみごとに一致したことになる。このように、特定の部族や氏族の出身者が特定の儀礼と結合していることも、その部族や氏族の歴史は常に儀礼の場で再演されていることになる。換言すれば、個々の儀礼はそれぞれの集団の歴史を演出していることになる。個々の儀礼が総合されたかたちで成り立つ八白宮祭祀には、モンゴルのさまざまな集団の歴史が凝集されている、と理解できよう。

## 5.2 「個人」と歴史の関係

エリアーデは「神話と歴史」について説明した際に、個人の存在をとりあげている。個人の「神話時代」への投影は、儀礼など「本質的な時」においてだけ起こる、という（エリアーデ 1970: 50）。ある個人が儀礼の場において、ただ単に神々や英雄たちのしぐさを模倣しているにすぎぬ、との論点には賛成できないとの立場を、すでに前文で示したとおりである。ただし、「本質的な時」に個人は「神話の時代」に送りこまれるとの説には首肯できる部分がある。

エリアーデ的な発想から、彼のいう「神話の時代」をかりに13世紀という「歴史の時代」に設定しておこう。その際、個人はどのように「歴史の時代」へ投影されるのであろうか。本論文であつかった史料からいえば、清朝時代の八白宮の祭祀者のひとり、ダルハン・バートル・ユムドルジは軍神黒いスウルデの血祭の時に、鮮血を飲む儀礼をくりかえしてきたのも、八白宮の歴史的連続性を一祭祀者として担うべき義務を果たしただけのことであろう。祭祀者ユムドルジが貴族タイジたちと対立するようなことがなかったとしても、彼の歴史的な役割を否定する必要もまったくないのではないか。もちろん、彼が13世紀のスニト部のギルーン・バートルの末裔だと自称しだしたという記録も、彼が貴族タイジたちと対立するようになってから現れるようになる。それによって彼がモンゴル・ハーン国時代に送りこまれたことになる、とも解釈できよう。清朝時代の一時的な対立とは別に、現在の軍神黒いスウルデの祭祀においても、ダルハン・バートル爵の祭祀者ダルハトはスニト部の出身であることが一般的に認知されている（Sayinjiryal and Šaraldai 1983: 322）。この事実から、個人とある特定の歴史的な時代とのつながりは強固なものである、と理解できよう。

祭祀者ダルハン・バートルのユムドルジが貴族タイジと対立して道光年間に訴訟を起こした。彼は上告文のなかで、祭祀の指針書『金書』の文言を用いて自らの華々しい出自を全面に出している。『金書』のなかの表現は、チンギス・ハーンの功臣で、モンゴル軍の先鋒をつとめていた人物、ギルーン・バートルらを褒め称えたものである。ギルーン・バートルの功績については、民間に伝わる各種年代記を通して、スニト部の後継者たちのあいだに一種の共通の歴史的認識があったにちがいない。ユムドルジはギルーン・バートルの功績を掲げて、自らがその直系子孫であると称したことで、シリングル盟スニト左旗の王公たちを味方につけることができたのであろう。かりに彼がギルーン・バートルの直系子孫を名乗らずに、あるいはギルーン・バートルの功績を語らずに、ただスニト部の出身だと主張していただけなら、スニト左旗の王公たちの支持は得られなかったかもしれない。個人は、歴史を媒介とした場合、特定の集団との連帯意識は一段と強まるのではなからうか。

歴史学者の岡田英弘は「歴史」について次のように定義している。「歴史とは、人間の住む世界を、時間と空間の両方の軸に沿って、それも一個人が直接体験できる範囲を超えた尺度で、把握し、解釈し、理解し、説明し、叙述する営みである」という(岡田 1993: 20)。その後、岡田はさらに「一個人が直接体験できる範囲を超え」ることが大事で、さもなければ、歴史を語る意味がなくなるとしたうえで、「歴史」の本質は、認識で、それも個人の範囲を超えた認識である、との見解を示している(岡田 2002: 10)。岡田の見解にしたがえば、道光年間におけるダルハン・バートル・ユムドルジの「個人的」な行動こそはまさに時空間を超えて集団としての歴史を認識していたことの証しになろう。八白宮祭祀において、ユムドルジがモンゴル・ハーン国時代のギルーン・バートルを語るという行為は決して「個人の系譜を語る」に止まらず、集団の歴史認識を反映したものであるということが、本研究で明かになったといえよう。

モンゴル語年代記はいずれもギルーン・バートルの同時代資料ではなく、伝承的なものである。しかし、伝承的な資料であるとはいえ、それらの事跡がただ単に口頭で語るだけで終わっているわけではない。伝承されている事跡が八白宮の儀礼の場において、毎年のように定期的に再現されつづけている。祭祀にはスニト部を含むモンゴル各部が参加してきた。年代記が伝える歴史を儀礼の場で再現することによって、人びとは過去を擬似的に追体験し、いわば「歴史」を復習してきた。復習によって、歴史は決して過去のものではなく、今を生きる「現在の事実」、「同時代的な事実」として認識されていく。いざトラブルが発生したりして新しい歴史が創造されるような

時に、「現在の歴史」が瞬時的に機能したのである。岡田の主張するように、「歴史」の本質は集団的な認識だからこそ、決して「過去」のものではなく、「現在」の「個人」を支配するものである。

### 5.3 「個人」と歴史の現在性

本論文は文書資料のなかの出来事を現在の視点で再現したものである。レヴィ＝ストロースの説を借りれば次のように位置づけができよう。「文書に関係ある出来事については、別に証明する方法はたくさんある。出来事はわれわれの現在のなか、本のなかに生きている。出来事それ自体には意味はない。意味は全面的に、出来事の歴史的的反響と、その出来事を他の出来事に結びつけて説明する注解とから生ずる」（レヴィ＝ストロース 2000: 291）。端的にいえば、「古文書は出来事の化身である」ということになる（レヴィ＝ストロース 2000: 290）。レヴィ＝ストロース流に考えれば、清朝時代の祭祀者ユムドルジが貴族タイジたちと対立し、訴訟を起こすにまで発展した事件の本当の原因は、ユムドルジの息子をめぐるトラブルにある、と私が示した解釈も、あくまでも「現在」からのひとつのアプローチにすぎない。人類学者の現在からの解釈が正しいか否かは別として、歴史的連続性の延長線上にある現代社会での参与的な調査経験のなかで、「古文書の化身」たる出来事に日々出くわしているから、かような解釈と理解が可能性として浮かびあがってきただけである。

レヴィ＝ストロースはさらにいう。史実の構成は、そのまま史実の選択にもあてはまる。歴史が意味を求める限り、地域や集団、そして集団内の個人を選ばなければならないし、それを不連続の図柄として連続体のうえに描きださなければならない（レヴィ＝ストロース 2000: 310）。たとえ個人に注目して歴史を描くとしても、それは人類学者の個人的な経験に基づいた、個人を対象とした研究ではない。連続性のある、集団のための歴史研究でなければならないのである。

13世紀のスニト部のギルーン・バートルにしても、清朝時代のユムドルジにしても、このような個人に注目して往事の一端を再構成しようとした歴史は、どうしても伝記的な側面を持つことになる。このことに関しても、レヴィ＝ストロースの指摘は人類学的思考を代弁している。つまり、伝記的挿話的な歴史は、個人とその個別性において考察し、その一人ひとりについて、性格のニュアンス、動機の曲折、思慮の諸相を細かく調べあげるから、情報量がもっとも豊かである（レヴィ＝ストロース 2000: 315）。本論文が前半においてはモンゴル・ハーン国時代に活躍したとされる人物、ギルーン・バートルに焦点をあてたことにより、彼が八白宮祭祀の創設に積極的

に関わったと思われる経緯を後世の年代記の記述や八白宮の儀礼から掘りおこすことができた。また、後半においては、ギルーン・バートルの末裔を名乗るユムドルジをとりあげたことで、清朝時代における祭祀者たちの歴史認識だけでなく、チンギス・ハーンの直系子孫たちの歴史観の一端を抽出することにも成功した。そうした意味で、個人の持つ伝記的挿話的な情報量は、集団の歴史的連続性を再構成するうえで、きわめて有効な手段である、といえよう。

## 付録——訴訟事件に関する主要文書

道光年間における訴訟事件に関する主要文書を転写する際には、以下2つの原則にしたがう。

第1、本論文で使用する12通の文書はすべて道光年間のオルドス・モンゴル人の手によるものである。文語体文書には時折オルドス方言口語体の言葉が入っている。転写の際、口語と思われる言葉はなるべくオルドス方言を忠実に反映できるように音優先の原則を取る。例えば、オルドス方言の場合、語頭の母音OをUと発音する傾向が強く、一般的にOrdusと表記する言葉でも、現地ではUrduと発音する<sup>12)</sup>。

第2、個々の文字については、例えば、与位格を表す格語尾のtur (tür) とdur (dür)等はすべて綴りを優先する原則を取る。以上の原則は本研究の論文部分におけるモンゴル語の転写にも適応させていることを断っておきたい。なお、( )内は訳者による補記である。

1. Čiyulyan-u ded terigün-eče Činggis-ün (Gilügen) Bayatur-un qoyiči-yin ür-e ači Yümdorji-yin yumudaysan kereg-i sidken Jiyün Wang-un Qosiyun-u tusalayči tayiji Göngčuydorji-du tusiyan yabuyluysan bičig.

Čiyulyan-u ded terigün jasaγ qosiyun-u beyise Čaydursereng ten-ü bičig:

jasaγ törü-yin jiyün wang-du aγsan Tümenjirγal-un qosiyun-u tamay-a-yi qamiyaruyisan tusalayči tayiji Göngčuydorji tan-du ilegebe:

tasulun yabuyluqu-yin učir.

mönüken Bayatur Yümdorji. Qosiyuči Nayantai nar-un ergügsen bičig-tü

jinung ded da noyan-a ergün bariba:

öčüken bida uy učir-iyen γaryan ami sirγun yumudan medegülkü-yin učir.

Činggis ejen-ü emün-e qar-a čilayun metü yasutu. qar-a usun metü čisutu. qaril ügei sanayatu. qaltural ügei joriγtu qari tan yeke dayisun-du qatayujin yabuju küčün-iyen öggügsen Sönid-ün Gölügen Bayatur-un ači üy-e-eče inerü üy-e ularin tasural ügei yabuysayar Bayaturčud man-u beyes-tü kürtel-e iregsen-i sülde-yin gegegen emün-e ulayan čisu aγuju (uuγuju) jidkügsen Bayatur bidan-i mönüken ene on-du tayiji jalan janggi Adiy-a qorin lang alba

abun-a kemen čingyata alba ese ögbesü bey-e-i čini bariju abuyad ger mal-i ebdejü kitad-tu öggün-e: daray-a anu minu degüü Nayantai-ača janggi Bayajiqu arban tabun lang alba abun-a ese ögbesü bey-e-yi čini bariju abačın-a kemen šayardaγulqu-du boγul man-u beyes ami jabsarlaju jinung da noyan-a altan yamun-a sirγuju boγul man-u γumudal-i toličan ayiladqaqu ajiyamu: egün-ü tula ergün bariba kemejüki:

eyimü-yin tula basaču tedeger-ün nemen ergügsen jiyuqu bičig-tu bayičayabasu wang aγsan Rasibaljuur. čiyulyan-u terigün beyile aγsan Sodnamrabjayigendün. čiyulyan-u terigün jasay nigen jerge nemegsen beyise Tödübsereng ten-ü tasulan jakiγsan dotur-a. Darqan Bayatur Norbu-yin üy-e-eče edüge ki Bayatur Yümdorji. Nayantai nar-tu kürtel-e alba abqu. ulay-a. unuy-a. sigüsü idekü-yi tasulun olγuyuluγsan jiyuqu bičig bui-yin tulada. erkim qosiyun-u uqaburi ügei tayiji jalan Adiy-a. janggi Bayajiqu nar-un beyes uridu tusiyal-un aγsan noyad ba edügeki čiyulyan daruy-a-yin jakiγsan jirum-du kereg-yi bötegeyiregülün alba nekekü-yi üjikül-e oγuyata neyilelčekü ügei-yin tulada uçir-i γarγan yabuγulba: kürügsen-ü darui erkim qosiyun-u tusalayči tayiji tan-u γajar bayičayan üjejü Bayatur Yümdorji. Nayantai nar-ača alba abqu-yi bayilyaju ulamjilan dongγudqu yabudal-yi medetügei kemekü-eče γadan-a. kerber Yümdorji nar-ača dakin alba-yi nekegülün basa ču medegden iregülkü-dü kürgebesü erkebesi tasuluγsan kereg-i uduridju yabuqu tüsimel-ün beyes lüge kelelčekü yabudal-yi urida-ača medetügei kemen egün-ü tula tusiyan ilegebe:

Törü Gereltü-yin arban doluduyar on-u namur-un terigün sar-a-yin arban nigen-e:

〔訳〕副盟長より、チンギスの（ギルーン・）バトルの後裔ユムドルジが不服を申したてた件について、郡王旗の協理タイジ、グンチュクドルジに送った文書。

副盟長<sup>ジャサク</sup>札薩克固山貝子チャクドウルスレンらの文書。

札薩克<sup>ジャサク</sup>多羅郡王、故トゥメンジラガルの旗の印務を署理する協理タイジ、グンチュクドルジ殿に送る。

決定して伝達する件。

このほど勇士（<sup>バトル</sup>爵の）ユムドルジ、先鋒（<sup>グショーチ</sup>爵の）ナヤンタイらが上呈してきた文書に

ジノン、副盟長殿に呈して申しあげる。あわれなわれわれは真相を報告し、命を乞うために、悲しんで申しあげる。主君チンギスの御前にて、「磐石のような硬骨を持ち、海水の如き熱血を有し、衰えぬ意志を持ち、動揺せぬ決意を保ち、悪敵どもに対し、破竹の

勢いで突進し、尽力してきた」スニト部のギルーン・パートルの子孫から、今日まで代々絶えることなくわれわれの代までパートルをつとめてきた。スウルデの御前にて鮮血を飲むパートルのわれわれをこのほど本年においてタイジで、札蘭章京アディヤが20両のアルバを徴収するといってきた。アルバを納付しない場合はあなたを逮捕し、財産を没収し漢人にやる、とおどかしてきた。その後、弟のナヤンタイから章京バヤジホが15両のアルバを徴収するといってきた。もし納付しなかったら逮捕すると催促してきたため、奴才らは機会をうかがってジノン、(副)盟長殿の黄金の衙門にくぐり入り、われわれの不服をご明察になるように。これゆえに呈する。

と書いてあった。このことから、また彼らの添付してきた信任状によれば、故王ラシバルジョル、前盟長貝勒、ソノムラブジャイゲンドウン、盟長札薩克<sup>ジャサク</sup>一次加級貝子トゥドゥブスレンらが決定したなか、ダルハン・パートル・ノルブの代から現在のパートル・ユムドルジ、(先鋒)<sup>グシヨーチ</sup>ナヤンタイに至るまでアルバの徴収、駅馬の使用と丸煮シユースの徴用を免除した信任状がある。そのため、貴旗の無知なタイジ、札蘭章京アディヤ、章京バヤジホらが、先代故王らと現在の盟長が定めた合法的な決定をあいまいにしてアルバを徴収しようとしたことは道理に合わないことをまず知らしめて送る。届き次第、貴旗の協理タイジらが調べてみて、パートル・ユムドルジ、(先鋒)ナヤンタイからアルバを徴収することを中止させ、今後ともそれを守るようにと叱責するほか、もしも今後また再びユムドルジらからアルバを徴収しようとするのがこちらに知られたら、決定した事項を執行する立場にある(貴殿ら)役人たちの責任を問うことになることを事前に知っておくべきであろう。このために命じて送る。

道光17年7月11日 (Činggis Qayan-u Naiman Čayan Ordu 1998: 100)。

## 2. Čiyulyan-u terigün Tödübsereng-eče Sönid-ün Gilügen Bayatur-un qoyiči-yin ür-e ači Yümdorji-yin yumudal-i tayilun jiyuqu bičig oluyusan bičig.

Čiyulyan-u terigün jasay qosiyun-u beyise nigen jerge nemegsen Tödübsereng-ün bičig:

Bayatur Yümdorji Barintai<sup>13)</sup>. Qosiyuči bida nar. sogsiui<sup>14)</sup> Nayantai nar-a tusiyaqu-yin učir edüge tan-u medegülül-dü. boyul bidan-u uy ebüge Sönid-ün Gölügen Bayatur-ača inayši odu man-u beyes-tü kürtel-e boyda Činggis ejen sülde-yin gegegen-ü tayilya-yin jüil-dü čing kečiyel-iyer jirumlan jidkügseger iregsen yabiy-a-yi urida wang Rasibaljuur-un üy-e-dü ilerkeyilejü minu ebüge Norbu-yi Darqan Bayatur čola kürtegejü jiči jirum-iyar üy-e-yin üy-e alba tataly-a ügei tei Darqan bolyan tamayatu bičig-iyer tusiyajuqui: yuyqu anu oldaqul-a boyul bidan-u jirumlan iregsen yabiy-a ijayur-i dangsan-du temdeglejü keb-iyer örüsüen

batudqaju yabuylqu-yi yuyumui kemejuküi:

eyimü-yin tula bayiçayabasu Nayiraltu Töb-ün qoyaduñar on-du wang Rasibaljuur-un olquysan tamayatu biçig-tü Norbu-yi Darqan Bayatur çola kürtegeju ijayur-un yabiy-a-yi iledkeju. Darqad-tu yabuyluysan anu todurqai tula. edüge tan-u beyes-i mön kü qayučin jirum-iyar egüride ködülbüri ügei bolyan yaççakü sülde-yin gegen-ü tayily-a-yin kereg-eçe busu öger-e jüil-ün aliba alban tataburi ba ulay-a sigüsü jerge-yin jobal yaçıydal-du kürgel ügei keb-ün yosuñar Darqad-tu yabuylqu-yi dabqurlan toytayaju tamay-a daruysan jiyuqu biçig tusiyaba:

Törü Gereltü-yin arban doluduñar on-u qabur-un dumdadu sar-a-yin qorin qoyar-a.

kemegsen-yi üjebesü çuqum qariyatu jinung ded da beyise bi jiyuqu biçig-i nemen öggüged alba tataly-a-yin ündüsü-yi tasulbasu jokiqu tula. basa çu tamay-a daruysan nigen jüil biçig tusiyan olqulba:

Törü Gereltü-yin arban doluduñar on-u namur-un terigün sar-a-yin arban nigen-e:

〔訳〕 盟長トゥドゥブスレンから、スニト部のギルーン・バートルの後裔ユムドルジらの不服を解決するために公布した文書。

盟長<sup>ジャサク</sup>札薩克固山貝子一次加級トゥドゥブスレンの文書。

バートル・ユムドルジ、バルタイ、グシヨーチたるナヤンタイが報告する件。この度貴殿の報告によると、奴才われわれは、先祖たるスニト部のギルーン・バートル（の代）から現在の私どもの代に至るまで、聖なる主君チンギスの輝かしいスウルデの祭祀に誠心誠意携わってきた。その功績を表彰するため、先王ラシバルジョルの時に、曾祖父ノルブにダルハン・バートルの称号を授けた。法令にしたがい代々アルバを免除しダルハンに任命された印璽付きの文書を配布された。請うらくは、（先王の文書が）みつかれば、奴才らがつみかさねてきた功績を档冊に記録し、従来どおりに御恩をこうむらせることをおねがいます、とあった。

そのため、調べたところ、雍正2年に、王ラシバルジョルの配布した印璽付き文書に、ノルブにダルハン・バートルの爵位を授けて先代からの功績を表彰し、ダルハト（の一員）に任命したことは明白である。そのためこの度、あなたの身分を従来どおりに動かさぬものとし、ただひとつスウルデの祭祀以外に如何なるアルバや租税、馱馬と丸煮シューズ類の徴収で苦しむことがないように、ダルハトとしての仕事に専念

するよう、あわせて決定し、印璽つきの信任状を送る。

道光 17 年 2 月 22 日。

以上のような文書があることから、ジノンで副盟長貝子たる私がさらに信任状を加え、アルバや租税の徴収を停止させるのが適当だと判断し、印璽つきの文書を追加して送る。

道光 17 年 7 月 11 日 (Činggis Qayan-u Naiman Čayan Ordu 1998: 101)。

3. Jiyün Wang-un qosiyun-u tusalayči tayiji Göngčuy nar-ača Činggis-ün Gilügen Bayatur-un qoyiči-yin ür-e ači Yümdorji nar-un yumudal jayaldulay-a-yin tuqai čiyulyan-u ded terigün-dü ergün bariysan bičig.

Kiyen Čing Men-dü yabuqu jasaγ törü-yin jiyün wang-du aγsan Tümenjirγal-un qosiyun-u kereg-i tusalan ilayayči tusalayči tayiji Göngčuy. Göngčuydorji nar-un bičig:

čiyulyan-u ded terigün jasaγ qosiyun-u beyise noyan tan-a bariba:

todorqayilan medegüljü sidkegülkü-yi yuyuqu-yin uçir:

mönüken ded da noyan-u yajar-ača kürjü iregsen bičig-tü tasulan yabuγulqu-yin uçir. Činggis ejen-ü emün-e qar-a čilayun metü yasutu. qar-a usun metü čisutu. qaril ügei sanayatu. qalturil ügei joriγtu qari tan yeke dayisun-du qatayujin yabuju küčün-iyen öggügsen Sönid-ün Gölügen Bayatur-un ači ür-e-eče inertü üy-e ularin tasural ügei yabuγsaγar Bayatur-ud man-u beyes-tü kürtel-e iregsen-i sülde-yin gegegen emün-e ulayan čisu uuγuju jidkügsen nökdü bidan-i mönüken ene on-du tayiji jalan janggi Adiy-a qorin lang alba abun-a kemen čingyata alba ese ögbesü bey-e-i činü bariju abuyad ger mal-yi ebdejü kitad-tu öggün-e: daray-a anu minu degüü Nayantai-ača janggi Bayajiqu arban tabun lang alba abun-a.ese ögbesü bey-e-yi činü bariju abačin-a kemen šayardaγulqu-du boγul man-u beyes ami jabsarlaju jinung da noyan-a altan yamun-a sirγuju. boγul man-u yumudal-yi toličan ayiladqaqu ajiyamu: kemen egün-ü tula ergün bariba kemejüki:

eyimü-yin tula basa ču tedeger-ün nemen ergügsen jiyuqu bičig-tu bayičayabasu wang aγsan Rasibaljuur čiyulyan-u terigün beyile aγsan Sodnamrabjayigendün. čiyulyan-u terigün jasaγ nigen jerge nemegsen beyise Tödübsereγ ten tasulan jakiγsan dotur-a. Darqan Bayatur Norbu-yin üy-e-eče edügeki Bayatur Yümdorji. Nayantai nar-tu kürtel-e alba abqu. ulay-a

unuqu. sigüsü idekü-yi tasulun olıyusın jıyüqu biçig bayıqu-yin tulada erkımqosıyın-u uqaburı ügei tayiji jalan Adiy-a. janggi Bayijıqu nar-un beyes uridu tusiyal-un wang noyad ba edügeki çiyulıyan-u daruy-a-yin jakiysın jirum-du kereg-yi büdüregülün alba nekekü-yi üjikül-e oyuğata neyilelçekü ügei-yin tulada uçir-yi çarıyan yabuğuluy-a: kürügsen-ü darui erkım qosıyın-u tusalayçi tayiji tan-u çajar bayıçayan üjeju Bayatur Yümdorji. Nayantai nar-aça alba nekekü-yi bayılyaju ulamjilan dongyudqu yabudal-i medetügei kemekü-eçe yadan-a. kerber Yümdorji nar-aça dakin alba-yi nekegülün basaçu medegdel iregülkü-dü kürgebesü erkebesi tasuluysın kereg-i todorqayılan çarıyaju medegülkü-yin uçir.

urida jasay terigün jerge tayiji nigen jerge nemegsen Serengdejid nigen jerge nemegsen tusalayçi tayiji nar-un çajar-aça Törü Gereltü-yin arban jiryuduçar on-u jun-u segül sar-a-yin qorin nigen-e kürju iregsen biçig-tü

medegülkü-yin uçir mönügen da noyan-u çajar-aça tusiyın kürju iregsen biçig-tü

tusiyın yabuğulqu-yin uçir. Wang-un Qosıyın-u Yümdorji Bartai nar qoriyatu qosıyın-aça kıqaju jobayaba kemen öçig ergün jayalduysın nigen kerg-yi üjüki-tü oyır-a-yi üjeju jasay tan-a tusiyaju. sigülür-e yabuğuluysın-i dangsan-du temdeglejüki: daray-a-bar jasay tan-u çajar-aça bayıçayan el-e kereg-ün arad-i büridken bayıçayabası.

Yümdorji-yin öçikü ni:

sülde-yin gegegen-ü emün-e ulayan çisu uuyuju jidkün yabuysın bayatur-ud-un dotur-a-aça boğul minı elünçe Norbu Darqan Bayatur-i Nayıraltu Töb-ün qayaduçar on-du tusiyaysın jıyüqu biçig bui-aça yadan-a. minı bey-e-dü kürtel-e sülde-yin gegegen-ü emün-e ulayan çisu uuyuju jidkügseger amui: jabsar-tu qosıyın sumun-du aliba alba teskebürı-yin jüil-dü çinegen-ü dotur-a mori. üker jerge-yin jüil-yi çirmayın jidkütü öggügseger jüderegsen-ü tula. egün-eçe uruysi boğul bi sülde-yin gegegen-ü emün-e ulayan çisu uuyuju yabuqu ba esebesü qosıyı sumun-a alba öğju yabuqu ali nigen jüil-yi dayaju yabuju bolqu bolbau? jiči tayiji Tümenelger-ün ger-tü büküi minı köbegün Engkedalai-dü bi jolçay-a kemen yabuqu-du tayiji Rasinim-a tai uçarayısın ünın. bi tende eçiged kıgsen gem uçir ügei-eçe yadan-a. jalan Batumöngke-yin kituy-a-aça ayuju yabuysayar da noyan-u çajar çumudan medegülügsen bile: kerkin ayuçılaju qayırılqu-yi küsemü:

Bartai-aça asayubası öçikü ni:

minı bey-e uridu yamun-u biçigeçi-dü egeljiy-e-ber sayuju bayıyad jalan-u janggi-yin tusiyal kürteju çarıyusın-u qoyın-a alban-u kereg-ün uçir tusiyal-aça qoçuruysın böged öçüken bi ger yadamay-un tula dakin biçigeçi-yin egeljiy-e-ber oruju sayuysın ügei. eçige eke-yin emün-e

aju törüjü bayital-a genedte tayiji Rasinim-a tan dayudaju ečigsen-dü jakiy-a-yi dayaju teden lüge qamtu yabutal-a. keger-e namayi bariju jalan Kesigtü-dü tusiyaysan-yi bi čilüge-yi üjeju dutayan yarju ami siruju medegülügen bile: tere tuqai tayiji Rasinim-a. jalan Batumöngke -yin daling-ača kituy-a abuysan ügei. jiči minu bey-e aq-a Enkedalai-du jolay-a. tayiji Tümedelger-ün ger-tü ečigsen bolbaču kigsen gem uçir ügei kememü:

meyiren-ü janggi Bardaqu. tayiji jalan Adiy-a. sumun-u janggi Bayarša. kündü Sanjai nar-un qamtu medegülkü ni:

bida Yümdorji-ača daray-a uday-a mori. üker jerge-yin yağum-a abuysan bolbaču kelejetei abulčaju. tegün-ü alban-du boduju čöm-yi qosıyü sumun-u teskebüri jüil-dü jaruju keregleksen-eče bisi yerü bida öber öber-ün qobi-dü abču jabsıysan uçir ügei kememü:

tayiji Rasinim-a. jalan Batumöngke nar-un medegülkü ni:

bida jakiy-a-bar jalan Yümdorji jalan Bartai nar-i dayudaju ečibesü teden-ü beyes čöm ger tegen bayin-a: Yümdorji anu ebedčitei kekten-e. jakiy-a-yi kürgeju dayudaysan-du jalan Bartai-yin bey-e jakiy-a-yi dayaju ečiy-e kemen bidan lüge qamtu yabuju bayiğad dutayaqu-du bida bariju jalan Kesigtü-dü tusiyaysan bile: Yümdorji-yin çadan-a man-u daling-du bayiysan kituy-a jiligsen-eče bisi jalan Batumöngke kituy-a yarçaju jabdubai kemekü-yi medekü ügei: jiči jalan Yümdorji. tayiji Tümedelger-ün ger oyir-a ečijü bayiysan anu yamar kereg egüdkü-yi küliyeju sayuysan ajai kememü:

eyimü-yin tula egün-i kinan sanabasu jüi inü nigen nigen-iyer niytalan bayiçayabasu uçir jüil-yi čöm todorqayılayad sidkegölbesü jokiqu bila: yaççakü ene kereg-ün dotur-a asağubasu jokiqu kümün olan. edüge qarqan tömüsü quriyaqu çay tokiyalduysan-u tula olan-u tusa-yi boduju naribčılan bayiçayaqu-yi joysuğad jokis-yi üjeju qayuluysan anu. altan sülden-ü emün-e ulayan čisu uuyuday olan kümün bolbaču. uridu tusil-un wang aysan Rasibaljuur. Norbu Darqan Bayatur-i qayirlaju. erkim-ün kereg-ün elči-dü ulay-a sigüsü öggül ügei yabuğultuyai kemen Nayiraltu Töb-ün qoyaduğar on-du toğtayaju tamay-a daruysan jıyqu biçig tusiyaysan qoyin-a tegün-ü ür-e Yümdorji nar tus qosıyün-u alba tesgebüri-yin jüil-dü olan-u keb-iyer öggügseger jil udaysan büged edüge Yümdorji-yin bey-e jüderbei kemen jıyqu biçig-i yarçaju yumudan medegülügen tula. Yümdorji-yi qosıyü sumun-u alban-du oytu qamiyarul ügei yabuğuluy-a: gebeču busud Bayatur-ud basa kü dayuriyan teskebüri jüil-yi ögkü ügei kemen kögeldükü tula. Yümdorji kedüi jüderbei kemekü bolbaču jokis-i üjeju jil büri çurban lang-un tesgebüri yarçayulju. qosıyün-u alban-du demjigülüy-e: Bartai bolbasu qariyatu tayiji Tümedelger-ün ger-tü ečijü öber-ün

aq-a Engkedalai-du jolyaγsan-ača öger-e gem uçir γaryaγsan ügei-eçe yadan-a. tegün-e ger yadamaγ tula yamun-u biçiğeci-yin egeļjiy-e-dü amjilduju saγuγsan ügei öber-ün eçiğe eke-ben tejigejü saγuγsan tula kelelčekü yabudal ügei bolγay-a: meyiren-ü janggin Bardaqu. tayiji jalan Adiy-a. sumun-u janggin Bayarša. kündü Sanjai nar Yümdorji-eçe mori üker jerge-yin jüil abuγsan bolbaçu čöm qosiyu sumun-u öri-dü öggügsen-eçe bisi öber öber-ün bey-e-dü singgegegsen jüil ügei tula kelelčekü ügei bolγasuyai: tayiji Rasinim-a jalan Batumöngke. Yümdorji nar bolbasu kituy-a qulγuju abub-a. γaryaγu yabubai kemen qarilčan medgölčekü bolbaçu kituy-a-bar gem qoor boluγsan uçir ügei tula bayiçayan kelelčekü-yi keltürigülüy-e: jiçi tayiji Tümenelger. Yümdorji-yin köbegün Engkedalai-yi ger tegen aγulju saγulγayad. eçiğe eke-dü inü elberil ügei bolγaγsan böged eçiğe Yümdorji. degüü Bartai nar Engkedalai-yi elgesejü jolyay-a eçigsen-dü qarin buruγulju uçaraγsan ügei-dü Yümdorji yumudan. erkebesi jolyaju üjekü-yi sanayad saγuγsan-ača bisi. uçir γaryaγsan yabudal oγtu ügei atal-a jabsar-tu tayiji Rasinim-a qudyuju. Yümdorji nar-i yamar kereg edükü-yi küliyejü saγuγsan ajai kemen medegülügen-yi üjikül-e çuqum tayiji Rasinim-a mayu sanay-a egüsgeljü. tayiji Tümenelger. albatu Yümdorji nar-i anggijiraγulqu-du kürgejü kereg degdegegsen inü ilede tula. tayiji Rasinim-a-i qasirtal-a dongyudju qoyiçi edür ene metü kereg tüibegen ürbisgejü. bolγumji ügei yabuqu-yi tasulqu ba jiçi Yümdorji Bartai nar bolbasu jerge tusiyal tai qayir-a-du kürtejü yabuju bayiçad baγ-a saγ-a alba teskebüri jüil-dü yumudan demei čü uqaburi ügei yabuγsan-i dongyudun jakiju qoyiçi edür ene metü yabuçid-tu qasiral bolγasuyai kemen el-e uçir-ud-i eyin kü dayuγqabasu bolqu ülü bolqu-yi da noyan-u gegen toličan toγtayan qoyisi jiγan iregsen-ü qoyin-a dayaju yabuγulsuyai. egün-ü tula medegülün bariba kemejüki:

darui Tayisi Biligündalai nar Bayatur Yümdorji-yin bey-e γayçakü sülde-yin gegegen-ü emün-e Bayatur-un alban kikü-eçe öger-e qariyatu qosiyun-du γurban lang-un alba üjekü ügei kemen ülü küliyekü uçir γarγan medegülbe kemegsen bolbaçu. Yümdorji bolbasu çuqum Jiyün Wang-un Qosiyun-u kümün mön böged. qosiyu darqad-un jabsar-tu jisürçilen yabuju oγtu alban-u demjigüri ügei yabuqu-du kürbesü busud Bayatur-ud basa kü dayuriyaju qosiyu sumun-du alba ögkü ügei kemen jarγu buduliyun-du ündüsü ülü tasuraqu-du kürümüi: edüğe çiyulγan-u daruy-a man-u γajar-ača mön kü jasay tan-u γajar bayiçayan sidkejü medegülügen-ü yosuγar tasulan sidkejü yabuγulba: kürkül-e eyin kü tasulun sidkegsen uçir jüil-i Jiyün Wang-un γajar seyiregülün yabuγulju Yümdorji. Bartai nar-yi qariyatu qosiyun-du tusiyaju egün-eçe qoyisi ene metü jarγu buduliyun-ü ündüsü-yi nigemüsün tasulju

dayusyaqu-yi medetügei kemen egün-ü tula ilegebe kemen toytayan sidkejü iregsen bičig-i yosuñar seyiregülün Yümdorji. Bartai nar-i tusiyan yabuylba: kürügsen-ü qonin-a erkim yamun-a eyin kü tasulan sidkegsen yosuñar qoyiči edür čirügdel buduliyān yarıyayulul ügei dayaju yabuqu-yi medetügei kemen egün-ü tula tusiyan ilegebe kemen kürjü iregsen-yi dayaju bayital-a. mönüken ded da beyise noyan-u yajar-ača tusiyan iregsen-i dayaju tayiji jalan Adiy-a-ača asayubasu medegülkü ni

man-u jakiraqu janggi Rabjai sumun-u Yümdorji-du jil büri abqu teskebüri arban lang-tu arban nigen mingyan joşus abday bile: arban yurbaduñar on-du yayčakü jiryuyan mingyan-i abuyad üledkü čöm dutayu tegün-eče inerü čirügdel yarju yabuyad arban jiryuduñar on-du da beyile noyan-u yajar-ača Yümdorji-yi jil-ün yurban lang-iyar toytayaysan jakiysan-i dayaju arban dörbedüger on-ača arban doluduñar on kürtel-e dörben jil-ün arban qoyar lang-yi nekegsen böged basa ču nidunun jil-dü tusayar-a qobiyaysan. wang-un Begejing-ün mordalay-a-yin qoyar lang mönggü. nige mori eden-i nekebesü yerü öggügsen jüil ügei bile kememü:

janggi Bayajiqu-ača asayubasu medegülkü ni:

minü jakirqu sumun-u Nayantai-du jil-ün arban lang tesgebüri abday bile: arban jiryuduñar on kürtel-e. toyan-u yosuñar güiçedken ögbe: arban doluduñar on-du abqu tesgebüri-yi nekebesü urida sab čilüge olju öggüy-e kemegeđ. qojim-du čay-un jüderekü-yi jiyaju öggügsen ügei bolbaču bida nekegeşeger bile: öger-e uçir ügei kememü:

el-e uçir-i yarıyan medegülkü-eče yadan-a Yümdorji bolqul-a teskebüri alba-yi öčerken ögkü ügei uçir čirügdel yarju uridu tusiyal-un da beyile noyan-u yajar-ača yurban lang-iyar toytuyan iregsen čay-tu jil büri arban lang-un teskebüri abday bolbaču nigente jakiysan-i dayaju küliyegsen bile: Nayantai-yin alba-du oytu uçir yaruşsan jüil ba. egün-i jakiysan yabudal uçir ügei bügüdel Nayantai bolqul-a quyay arad kümün. qariyatu janggi Bayajaqu-du urida sab čilüge-yi jiyaju gedergeleget qojim-du čay-un jüdegüri-dü tülkişü sayadayuluşad. teyin kü sumun-u janggi. jalan-u janggi. qariyatu yamun-du kürtel-e yumudaqu yajar bui bügüdel-e öber-ün joriş-iyar qariyatu yamun-a yumudaqu uçir ügei. dub dayun ügei bayiyad genedten aluslaju jayalduqu anu. Nayantai-yin sanay-a ba esebesü Yümdorji-yin getürkei sanay-a bolbaču. ene metü todurqayilan jakiju dayusuşsan tamayatu bičig bui bügüdel-e Yümdorji sişud jisürlen Nayantai dayuriyan kögegeldüjü qosişu sumu-yi aluslaju yabuqu bolqul-a. tüsimed bida küliyejü čidasi ügei uçir-yi yarıyan medegülbe: yuyyqu anu oldaqul-a ded da beyise noyan-u yajar-ača toličan üjeşü tasulun sidkejü dayusyaqu aşiyamu: egün-u tula

bariba:

Törü Gereltü-yin arban doloduγar on-u ebül-ün terigün sar-a yin arban nigen-e:

〔訳〕郡王旗の協理タイジであるグンチュクらから、チンギスのグルーン・バートルの後裔ユムドルジらが不平を訴え上告した件について、副盟長に呈した文書。

乾清門行走札薩克多羅郡王、故トゥメンジラガルの旗の諸事を補佐する協理タイジのグンチュク、グンチュクドルジらの文書。

副盟長札薩克固山貝子殿に呈する。

詳査して報告し、処理を乞う件。このほど副盟長殿のところから届いた文書のなかに、決定して伝達する件。

「主君チンギスの御前にて、『磐石のような硬骨を持ち、海水の如き熱血を有し、衰えぬ意志を持ち、動揺せぬ決意を保ち、悪敵どもに対し、破竹の勢いで突進し、尽力してきた』スニト部のグルーン・バートルの子孫から、今日まで代々絶えることなくわれわれの代までバートルをつとめてきた。スウルデの御前にて鮮血を飲むバートルのわれわれをこのほど本年においてタイジで、札蘭章京アディヤが20両のアルバを徴収するといってきた。アルバを納付しない場合はあなたを逮捕し、財産を没収し漢人にやる、とおどかしてきた。その後、弟のナヤンタイから章京バヤジホが15両のアルバを徴収するといってきた。もし納付しなかったら逮捕すると催促してきたため、奴才らは機会をうかがってジノン、(副)盟長殿の黄金の衙門にくぐり入り、われわれの不服をご明察になるように。このゆえに不服を呈する」といってきた。このことから、また彼らの添付してきた信任状によれば、故王ラシバルジョル、盟長貝勒、故ソノムラブジャイゲドゥン、盟長札薩克一次加級貝子トゥドゥブスレンらが決定したなか、ダルハン・バートル・ノルブの代から現在のバートル・ユムドルジ、(先鋒)ナヤンタイらに至るまでアルバの徴収、馱馬類や丸煮シユースの徴用を免除した信任状がある。そのため、貴旗の無知なタイジ、札蘭章京アディヤ、章京バヤジホらが、先代故王らと現在の盟長が定めた合法的な決定をあいまいにしてアルバを徴収しようとしたことは道理に合わないことをまず知らしめて送る。届き次第、貴旗の協理タイジらが調べてみて、バートル・ユムドルジ、(先鋒)ナヤンタイらからアルバを徴収することを中止させ、今後ともそれを守るようにと叱責するほか、もしも今後また再びユムドルジらからアルバを徴収しようとするのがこちらに知られたら。……。

以上のように決定された用件を調べて報告する件。

以前に札薩克一等タイジ、一次加級セレンデジド、一次加級協理タイジらのところから、道光16年6月21日に届いた文書に報告する件。

このほど盟長殿のところから送ってきた文書に、命じて送る件。

郡王旗のユムドルジ、バルタイらが所轄の旗から圧迫され苦しめられているとして訴状

を書き上告した一件を処理するため、近くにあることを考えて（本件を）札薩克貴殿に渡して審議させたことが档冊に記録されている。それを受けて札薩克殿の方から本件にかかわる各人を集めて調べたところ、（以下のような証言がえられた）。

ユムドルジの証言：

スウルデの御前にて鮮血を飲んで奮闘してきたバートルたちのなかから、奴才の曾祖父ノルブ・ダルハン・バートルには、雍正2年に与えられた信任状がある。それだけでなく、奴才の代に至るまでスウルデの御前にて鮮血を飲んでつとめてきたのである。それと同時に、旗とソムの定めたアルバや雑税に対しても、できるだけ馬や牛を献上して努力してきたのである。いつしか疲弊したため、奴才は今後輝かしいスウルデの御前で鮮血を飲んでつとめるか、さもなければ旗とソムのアルバを払うために生きるかになるだろう。また、タイジ・トゥメンデレゲルの家にいる息子エンケダライに私が会いに行ったら、タイジ・ラシニマと出あったのは事実である。私は（トゥメンデレゲルの家に）行って何ひとつ悪いことをしていない。また、札蘭バトムンケの刀から逃れるため、盟長殿のところを不平を訴えたのである。ご判断をおおぐ次第である。

バルタイに聞いたところ、次のように証言した。

私は以前衙門のピチエーチとして当直にあたっていたが、札蘭章京の任を終えてからは一切の公務から退いていた。小生は家が貧しいことから再びピチエーチの職にあたらず、父母のもとで生計維持にはげんでいた。そうしたなか突然タイジ・ラシニマから呼ばれた。彼らの通知を受けとって一緒に歩いていたら、野外で急に私をつかまえて札蘭ゲシクトに渡された。（その後）私はすきを見て逃げだし救命を求めたのである。その際、タイジ・ラシニマ、札蘭バトムンケの袋から刀を盗んだことはない。また、私が兄のエンケダライに会おうとしてタイジ・トゥメンデレゲルの家に行った時も、悪いことは何ひとつしていない。

梅倫章京バルダホ、タイジで札蘭アディヤ、ソムの章京バイルシャー、驍騎校サンジャイらが共同で次のように証言した。

私たちがユムドルジから今まで何度か馬や牛などを徴収したことはすべて双方で協議の上おこなわれたものである。徴収したものは全部ユムドルジのアルバに換算し、旗とソムの雑税の一部として納入し、使用したが、われわれがそれを個人のために使いこんだことはない。

タイジ・ラシニマ、札蘭バトムンケらは次のように報告した。

われわれが通知を携えて札欄ユムドルジと札蘭バルタイらと呼びに行ったら、彼らは全員家にいた。ユムドルジは病気で寝ていたが、通知を受けとってバルタイがわれわれと一緒に歩いていたら、突然逃げだしたので、われわれは彼をつかまえて札蘭ゲシクトに渡したのである。ユムドルジ家の外に（置いてあった）袋からわれわれの刀がなくなった以外に、札蘭バトムンケが刀を抜いて威嚇したとかは知らない。また、札蘭ユムドルジがタイジ・トゥメンデレゲルの家の近くまで行っていたのは、何かを企んでいたのかもしれない、という。

このように、これらの証言を分析し、ひとつひとつ検討して本件を処理したら適当であろう。ただし、本件について聞くべき人物が多く、また現在作物の取り入れも重なったため、大勢の利益を考慮し、これ以上詳しく調べることを中止しよう。現状から見て以下のように決定した。

黄金スウルデの御前にて鮮血を飲む人はたくさんいても、先王ラシバルジョルはノルブ・ダルハン・パートルを寵愛し、「尊事にかかわる使者たちは、永遠に馭馬と糧食を免除せよ」との旨について、雍正2年に印璽つきの信任状を配布している。(しかし)その後ノルブの子孫ユムドルジらは本旗のアルバや租税を他の旗民と同じように納付してきて、すでに長くたっている。この度ユムドルジが家業の貧困から信任状を持ちだして不平を申したてたため、ユムドルジを今後旗とソムのアルバと無関係にしよう。ただし、他のパートルたちもまた(ユムドルジの)まねをして、租税類を払わないと騒ぎだすかもしれないので、ユムドルジがいくら貧困に陥ったと主張しても、状況を見て毎年(銀)3両の租税を旗のアルバ類に充てるよう決定したい。

バルタイは、所轄のタイジ・トゥメンデレゲルの家に行ったとしても、自分の兄エンケダライに会った以外何も悪いことはしていない。彼は家計が苦しいため、衙門のピチエーチの輪班に参加せずに自分の両親を養うために働いているため、追求することはない。

梅倫章京バルダホ、タイジで札蘭<sup>ジャラン</sup>アディヤ、ソムの章京バヤルシャー、驍騎校サンジャイらは、ユムドルジから馬や牛などを徴収したとしても、(それらを)すべて旗とソムの借金に充てただけで、決して自分たちで使いこんだことはないため、追求しないことにしよう。

タイジ・ラシニマ、札蘭<sup>ジャラン</sup>バトムンケとユムドルジらは、刀を盗んだとか、刀を抜いたとかいいあらそっているが、刀で負傷したりしたことはないため、これ以上調べることもしないでおこう。

また、タイジ・トゥメンデレゲルはユムドルジの息子エンケダライを(自分の)家にとどめておき、その両親に孝行できなくなった。そのため、父のユムドルジと弟のバルタイはエンケダライが懐かしくなって会いに行ってみたら、かえってエンケダライを会わせなかった。そこでユムドルジは悲しくなり、どうしても会いたいといつづけただけで、何ひとつ悪いことはしていない。それなのにタイジ・ラシニマがあいだに入って扇動し、ユムドルジが何かを企んで居座っている、と報告した。それを見れば、タイジ・ラシニマは悪意からタイジ・トゥメンデレゲルと庶民ユムドルジの仲を離間させ、騒ぎをおこしたことははっきりしている。そのため、タイジ・ラシニマを厳しく叱咤し、今後このような騒ぎをおこさせないように、軽率なことをしないように注意した。

ユムドルジとバルタイらは、爵位を持ち寵愛されながら、ささいなアルバや租税ぐらいのことで不平不満をもらし、非常識に行動したことを叱咤し、今後の反省材料とするようにした。このように決定した諸事項について、盟長殿が適切かどうかを英断してから知らせてくだされば、私どもはそれにしたがうようにしよう。これゆえに呈して申しあげる、という。

その後、(ダルハトの最高責任者たる)太師ビルンダライらが、パートル・ユムドルジはただひとつスウルデの御前にてパートルとしての義務を果たす以外、旗とソムに(銀)3両のアルバも払わない、との(決定に)したがわない旨を伝えてきた。ユムドルジは本当に郡王旗の人間であり、旗とダルハトのあいだで不正を働き、一切アルバを払わずにふるまうようになれば、他のパートルたちもまた真似をして、旗とソムにアルバを払わないと訴訟をおこしてやまないだろう。この度、盟長たるわれわれは、貴旗が調べて決定し、報告してきたとおりに判定したことを伝達する。届き次第、このとおりに決定したことを郡王のところに写して届け、ユムドルジとバルタイらを所轄の旗に渡し、今後一切この種の

訴訟沙汰をおこさないように禍根を断つように知るべきである。このために送る。

以上のように決定され、届いた文書をそのとおりに写し、ユムドルジとバルタイらを（所轄の）旗に渡すように。届き次第、貴衙門は上記決定を守り、今後紛糾や騒動が出ないようにしたがうように。このために送る。

このように届いた文書にしたがっていたところ、このほど副盟長殿のところから送られてきた文書にもしたがって、タイジで札蘭<sup>ジャラン</sup>アディヤから証言を求めた。（アディヤが）報告するところによると、私が所轄の章京ラブジャイの佐領に属するユムドルジからは毎年租税（銀）10両を銅貨11,000枚に換算して徴収していた。（道光）13年にはたった6000枚を払い、のこりは未納であった。それ以降はトラブルが発生し、（道光）16年には盟長貝勒殿のところからの、ユムドルジは毎年3両納税するように、との決定にしたがい、（道光）14年から同17年までの4年間合計12両を払うよう求めた。また、昨年に徴収が決定された、王の京師行きの費用として銀2両と馬1頭をあわせて求めたが、（ユムドルジは）何ひとつ払わなかった、という。

章京バヤジホから聞いたところ、私の所管するソムのナヤンタイからは毎年10両の税を徴収していた。（道光）16年まで規定どおりに納めていた。同17年に納税を求めたところ、そのうちに払うといていた。その後、貧困になったことを理由に一向に納めなかったので、私どももまだ催促している。ほかにとくに問題はない、という。

これらの諸事を考えると、ユムドルジは租税やアルバを一切払わず、騒動をおこした。前任の盟長貝勒殿が3両の納税を決定した際、われわれは年10両を徴収していたにもかかわらず、その決定にしたがったのである。ナヤンタイについては、税の徴収をめぐる一度も紛糾したことはなかった。ナヤンタイはもともと箭丁で、所管の章京バヤジホに対し、そのうちに払うといたり、その後貧困になった際には納税を拒否したりして（公務を）妨げた。彼はソムの章京、<sup>ジャラン</sup>札蘭章京および衙門に対し不平不満をいっているとしても、それは彼自身の意志によるものではないだろう。いままで静かだった人物が突然越訴し上告するとは、ナヤンタイ自身の考えなのか、ユムドルジの計略なのか。上記のように詳査し処理し終えた旨の印璽つきの令状があっても、ユムドルジが直接姦計を企てナヤンタイがそれに追隨して旗とソムを無視して越訴する行為を、臣らはとうてい受けいられないことを申しあげる。

請うらくは、（報告が）届けば副盟長貝子殿のところでご照覧になり、英明なご判断が下されるよう、これゆえに呈する。

道光17年10月11日（*Činggis Qayan-u Naiman Čayan Ordu* 1998:102-106）。

4. Beyise Čaydursereng-eče Činggis-un Gilügen Bayatur-un qoyiçi üy-e-yin ür-e ači Yümdorji-yin yumudal jaǵaldulay-a-yin tuqai Jiyün Wang-un Qosiyun-du yabuyluysan bičig.

Jasay qosiyun-u beyise Čaydursereng ten-ü bičig.

Jasay törü-yin Jiyüng Wang Erkimbilig-ün tamay-a-yi qamiyaruysan tusalayči tayiji Göngčuy tan-a ilegebe:

egegülün yabuylqu-yin učir.

dangsan-a bayičayabasu Törü Gereltü-yin arban doluduyar on-u ebül-ün terigün sar-a-yin arban nigen-e erkim-ün ǵajar-ača kürjü iregsen bičig-tü todurqayilan medegüljü sidkegülkü-yi yuyuqu-yin učir:

mönüken ded da noyan-u ǵajar-ača iregsen bičig-tü tasulan yabuylqu-yin učir. mönüken Bayatur Yümdorji. Qosiyüçi Nayantai nar-un ergün bariysan bičig-tü. jinung ded da noyan-a ergün bariba: öčüken bida uy učir-iyen ǵaryaju ami siryun yumudan medegülkü-yin učir. Činggis ejen-ü emün-e qar-a čilayun metü yasutu. qar-a usun metü čisutu. qaril ügei sanaǵatu. qaltural ügei joriǵtu qari tan yeke dayisun-du qatayujin yabuju küčün-iyen öggügsen Sönid-ün Gölügen Bayatur-un ači ür-e-eče inerü üy-e ularin tasural ügei yabuysayar Bayatur man-u beyes-tü kürtel-e iregsen-i sülde-yin gegegen emün-e ulayan čisu uuquju jidkügsen Bayatur-ud bidan-i mön ene on-du tayiji jalan-u janggi Adiy-a. qorin lang alba abun-a kemen čingyata alba ese öggübesü. bey-e-yi činü bariju abuyad ger mal-yi ebdejü kitad-tu öggün-e: daray-a minu degüü Nayantai-ača janggi Bayajiqu arban tabun lang alba abun-a ese öggübesü bey-e-yi činü bariju abačın-a kemen šayardaǵulqu-du boǵul man-u beyes ami jabsarlaju jinung da noyan-u altan yamun-a sirjuju boǵul man-u yumudal-yi toličan ayiladqaqu ajiyamu kemen egün-ü tula ergün bariba kemejüküi:

eyimü-yin tula basaču tedeger-ün nemen ergügsen jiyuqu bičig-tu bayičayabasu wang aysan Rasibaljuur. čiyulyan-u terigün beyile aysan Sodnamrabjayigendün čiyulyan-u terigün jasay beyise nigen jerge nemegsen Tödübsereng ten tasulan jakiysan dotur-a. Darqan Bayatur Norbu-yin üy-e-eče edügeki Bayatur Yümdorji Nayantai nar-tu kürtel-e alba abqu. ulay-a. unuqu. sigüsü idekü-yi tasulun olquysan jiyuqu bičig bayiqu-yin tula. erkim qosiyun-u uqaburi ügei tayiji jalan Adiy-a. janggi Bayajiqu nar-un beyes uridu tusiyal-un wang noyad ba edügeki čiyulyan daruy-a-yin jakiysan jirum-du kereg-i бүдүгүрегүлүн alba nekekü-yi üjjikül-e. oquyata neyilelčekü ügei-yin tulada učir-yi ǵaryan yabuuly-a. kürügsen-ü darui

erkim qosiyun-u tusalayçı tayiji tan-u yajar bayiçayan üjeju Bayatur Yümdorji Nayantai nar-aça alba nekekü-yi bayilyaju ulamjilan dongyudqu yabudal-yi medetügei kemekü-eçe yadan-a. kerber Yümdorji nar-aça dakin alba nekegülün basaçu medegdel iregülkü-dü kürgebesü erkebesi tasuluysan kereg-yi uduridju yabuqu tüsümed-ün beyes lüge kelelčekü yabudal-yi erteken medetügei kemen egün-ü tula tusiyan ilegebe kemen kürjü irejüki: egün-ü uy uçir-yi todurqayilan yaryaju medegülkü-yin uçir. urida jasay terigün jerge tayiji nigen jerge nemegsen Serengdejid. nigen jerge nemegsen tusalayçı tayiji nar-un yajar-aça Törü Gereltü-yin arban jiryuduyar on-u jun-u segül sar-a-yin qorin nigen-e kürjü iregsen biçig-tü medegülkü-yin uçir mönüken da noyan-u yajar-aça kürjü iregsen biçig-tü tusiyan yabuylqu-yin uçir Wang-un Qosiyun-u Yümdorji Bartai nar qoriyatu qosiyun-aça kiquju jobayaba kemen öçig ergün jayalduyusan nigen kereg-i üjüki-tü oyir-a-yi üjeju jasay tan-a tusiyaju sigülür-e yabuyluyusan-yi dangsan-a temdeglejüki: daray-a-bar jasay tan-u yajar-aça bayiçayan todurqayilaju medegülür-e iregsen biçig-tü tusiyaysan-i dayaju ene on-u ilegüü jun-u segül sar-a-yin qorin tabun-a Čayan Čilayutu Süm-e jerge-yin yajar kereg-ün el-e arad-i büridken bayiçayabasu

Yümdorji-yin öçikü ni.

sülde-yin gegegen-ü emün-e ulayan čisu uuyaju jidkün yabuysan Bayatur-ud-un dotur-a-aça boyl minü elünče Norbu Darqan Bayatur-i uridu tusiyal-un wang aysan Rasibaljuur-un örüsüen qayirlaju erkim kereg-ün elči ner-tü egüride ulay-a sigüsü öggül ügei yabutuayı kemen Nayiraltu Töb-ün qoyaduyar on-du tusiyaysan jiyuqu biçig bayiqu-aça yadan-a minü bey-e-dü kürtel-e sülde-yin gegegen-ü emün-e ulayan čisu uuyaju jidkügseger amui: jabsar-tu qosiyu sumun-du aliba alba teskeburi-yin jüil-dü činegen-ü dotur-a mori üker jerge-yin jüil-i čirmayin öggügseger jüderegsen tulada egün-eçe uruysi boyl bi sülde-yin gegegen-ü emün-e ulayan čisu uuyaju yabuqu ba ese bögesü qosiyu sumun-a alba üjeju yabuqu ali nigen jüil-yi dayaju yabuju bolqu bolbau: jiči tayiji Tümenelger-ün ger-tü büküi minü köbegün Engkedalai-dü bi jolçay-a kemen yabuqu-du tayiji Rasinim-a tai uçaraysan ünen. bi tende eçiged kigsen gem uçir ügei-eçe yadan-a. jalan Batumöngke-yin kituy-a-aça ayuju yabuysayar da noyan-u yajar yumudan medegülügsen bile: kerkin ayučilaju qayirlaqu-yi küsemüi:

Bartai-aça asaýubasu öçikü ni:

minü bey-e uridu yamun-u biçigeçi-dü egeljiy-e-ber sayuju bayiýad jalan-u janggi-yin tusiyal kürteju yaruysan-u qoyin-a alban-u kereg-ün uçir tusiyal-aça qoçuruysan büged öçüken bi ger

yadamay-un tula dakin biçigeçi-yin egeljiy-e-ber oruju sayuysan ügei. eçiçe eke-yin emün-e aju törüjü bayital-a. genedte tayiji Rasinim-a tan dayudaju eçigsen-dü jakiy-a-yi dayaju teden lüçe qamtu yabutal-a keger-e namayi bariju jalan Kesigtü-dü tusiyaysan-yi bi çilüçe-yi üjeju dutayan yarju ami sirjuju medegülügen bile: tere tuqai tayiji Rasinim-a. jalan Batumöngke nar-un daling-aça kituı-a abuysan ügei. jiçi minu bey-e aq-a Enkedalai-du jolıay-a tayiji Tümenelger-ün ger-tü eçigsen bolbaçu kigsen gem uçir ügei kememü:

meyiren-ü janggi-yin Badaraq. tayiji. jalan Adiy-a. sumun-u janggi-yin Bayarša. kündü Sanjai nar-un qamtu medegülkü ni:

bida Yümdorji-aça daray-a uday-a mori. üker jerge-yin yayum-a abuysan bolbaçu kelejgetei abulçaju tegün-yi alban-du boduju çöm-yi qosıyü sumun-u teskebüri jüil-dü jaruju kereglegsen-eçe bisi yerü bida öber öber-ün qobi-dü abçu jabsıysan uçir ügei kememü:

tayiji Rasinim-a. jalan Batumöngke nar-un medegülkü ni

bida jakiy-a-bar jalan Yümdorji jalan Bartai nar-i dayudaju eçibesü teden-ü beyes çöm ger tegen bayın-a: Yümdorji anu ebedçitei kebtene. jakiy-a-yi kürgeju dayudaysan-du jalan Bartai-yin bey-e jakiy-a-yi dayaju eçiy-e kemen bidan lüçe qamtu yabuju bayıyad dutayaqu-du bida bariju jalan Kesigtü-dü tusiyaysan bila: Yümdorji-yin yadan-a man-u daling-du bayıysan kituı-a jiligsen-eçe bisi. jalan Batumöngke kituı-a yarıyaju jabdubai kemekü-yi medekü ügei. jiçi jalan Yümdorji. Tümenelger-ün ger-ün oyir-a eçijü bayıysan anu yamar kereg egüdkü-yi küliyeju sayuysan aji kememü:

eyimü-yin tula egün-i kinan sanabasu jüi inü niytalan bayıçayabasu uçir jüil-yi çöm todorqayıyad sidkegülbessü jokiqu bila: yayçakü ene kereg-ün dotur-a asaıyubasu jokiqu kümün olan edüçe qarqan tömüssü quriyaqu çay tokiyalduysan tula olan-u tusa-yi boduju naribçılan bayıçayaqu-yi joıysuyayad jokis-yi üjeju qayuluysan anu. süld-e-yin emün-e ulayan çisu uuıyuday olan kümün bolbaçu uridu tusiyal-un wang aıysan Rasibaljuur. Norbu Darqan Bayatur-i qayırlaju. erkim-ün kereg-ün elçi-dü ulay-a sigüssü öggül ügei yabuıultuyai kemen Nayiraltu Töb-ün qoyaduıar on-du toıytayaju tamay-a daruıysan jııyqu biçig tusiyaysan-u qoyın-a tegün-ü ür-e Yümdorji nar tus qosıyün-u alba teskebüri-yin jüil-dü olan-u keb-ıyer öggügseger iregsen jil udayısan büged edüçe Yümdorji-yin bey-e jüderbei kemen jııyqu biçig-i yarıyaju yumudan medegülügen-ü tula Yümdorji-yi qosıyü sumun-u alban-du oıyü qamıyarul ügei yabuıuluy-a. gebeçü busud Bayatur-ud basa kü dayuriyan teskebüri jüil-yi ögkü ügei kemen kögeldükü bolıusı ügei tula Yümdorji kedüi jüderbei kemekü bolbaçu jokis-yi üjeju jil büri yurban lang-un teskebüri yarıyayulıju

qosiγun-u alban-du demjigülüy-e: Bartai bolbasu qariyatu tayiji Tümedelger-ün ger-tü eçijü öber-ün aq-a Engkedalai-du jolyaγsan-aça öger-e gem uçir γarγaysan ügei-eçe γadan-a. tegün-ü ger yadamay tula yamun-u biçiğeci-yin egeljiy-e-dü amjilduju sayuγsan ügei öber-ün eçiğe eke-ben tejigejü sayuγsan kelelčekü yabudal ügei bolγay-a: meyiren-ü janggi Badaraq. tayiji jalan Adiy-a. sumun-u janggi Bayarša. kündü Sanjai nar Yümdorji-eçe mori. üker jerge-yin jüil abuγsan bolbaçu čöm qosiγu sumun-u öri-dü öggügsen-eçe bisi öber öber-ün bey-e-dü singgegegsen jüil ügei tula kelelčekü ügei bolγasuγai: tayiji Rasinim-a. jalan Batumöngke. Yümdorji nar bolbasu kituy-a qulyuju abub-a. γarγaju jabdubai kemen qarılčan medgülčekü bolbaçu kituy-a-bar gem qoor boluγsan uçir ügei tula bayiçayan kelelčekü-yi keltürigülüy-e: jiçi tayiji Tümedelger. Yümdorji-yin köbegün Engkedalai-yi ger tegen aquyulju sayulyaγad eçiğe eke-dü inü elberil ügei bolγaysan büged eçiğe Yümdorji. degüü Bartai nar Engkedalai-yi eligesejü jolyar-a eçiğsen-dü qarın buruyulju uçaraysan ügei-dü Yümdorji γumudan erkebesi jolyaju üjekü-yi sanayad sayuγsan-aça bisi. uçir γarγaysan yabudal oγtu ügei atal-a jabsar-tu tayiji Rasinim-a quduγu Yümdorji nar-i yamar kereg edükü-yi küliyejü sayuγsan aji kemen medegülügsen-i üjikül-e čuqum Rasinim-a mayu sanay-a egüsejü tayiji Tümedelger albatu Yümdorji nar-i anggijrayulqu-du küregejü kereg degdegegsen inü ilede tula tayiji Rasinim-a-yi qasirtal-a dongγudju qoyisi edür ene metü kereg tüibegen ürbisgejü. bolγumji ügei yabuqu-yi tasulqu ba jiçi Yümdorji Bartai nar bolbasu jerge tusiyal tai qayır-a-du kürtejü yabuju bayiγad bay-a say-a alba teskebüri jüil-dü γumudan demei čü uqaburi ügei yabuγsan-i dongγudun jakiju qoyiçi edür-ün ene metü yabuçid-tu qasiral bolγasuγai kemen el-e uçir-ud-i eyin kü dayuqbasu bolqu-yi da noyan-u gegegen tolıčan toγtaγan qoyisi jiγayan iregsen qoyin-a dayaju yabuγulsuγai: egün-ü tula medegülün bariba kemejüki:

darui Tayisi Biligündalai nar Bayatur Yümdorji-yin bey-e γayçakü sülde-yin gegegen-ü emün-e Bayatur-un alban kikü-eçe öger-e qariyatu qosiγun-u γurban lang-un alba üjekü ügei kemen ülü küliyekü uçir-yi γarγan medegülbe kemeγsen bolbaçu Yümdorji bolbasu čuqum Jiyün Wang-un Qosiγun-u kümün mön büged qosiγu. darqad-un jabsar-tu jisurçılan yabuju oγtu alban-u demjigür ügei yabuqu-du kürbesü busud Bayatur-ud basa kü dayuriyaju qosiγu sumun-du alba ögkü ügei kemen jaryu buduliyın-u ündüsü ülü tasuraqu-du kürümüi: edüğe çiyulγan-u daruy-a man-u γajar-aça mön jasaγ tan-u γajar bayiçayan sidkejü medegülügsen-ü yosuγar tasulan sidkejü yabuγulba: kürkül-e eyin kü tasulun sidkegsen uçir jüil-i Jiyün Wang-un γajar seyiregülün yabuγulju Yümdorji Bartai nar-i qoriyatu

qosiyun-du tusiyaju egün-eçe qoyisi ene metü jarju buduliyun-u ündüsü-yi nigemüsün tasulju dayuşıyaqu-yi medetügei kemen egün-ü tula ilegebe kemen toytayan sidkejü iregsen biçig-i yosuvar seyiregülün Yümdorji Bartai nar-i qariyatu qosiyun-du tusiyan yabuylba: kürügsen-ü qoyin-a erkim yamun-a eyin kü tasulan sidkegsen yosuvar qoyiçi edür çirügdal buduliyun yarıyaşulul ügei dayaju yabuqu-yi medetügei kemen egün-ü tula tusiyan ilegebe kemen kürjü iregsen-i dayaju bayital-a mönügen ded da beyise noyan-u yajar-aça tusiyan iregsen-i dayaju tayiji jalan Adiy-a-aça asayubasu medegülkü ni man-u jakiraqu janggi Rabjai sumun-u Yümdorji-du jil büri abqu teskebüri arban lang-du arban nigen mingyan joyus abday bila: arban yurbaduyar on-du yayçakü jiryuyan mingyan-yi abuyad üledükü çöm dutayu. tegün-eçe inerü çirügdal yarju abuyad arban jiryuduyar on-du da beyile noyan-u yajar-aça Yümdorji-yi jil büri yurban lang-iyar toytayaysan jakiysan-yi dayaju. arban dörbedüger on-aça arban doluduyar on kürtel-e dörben jil-ün arban qoyar lang-yi nekegsen büged basa çu nidunun jil-dü tusayar qobiyaysan wang-un Begejing-ün mordalay-a-yin qoyar lang mönggü nige mori eden-i nekebesü yerü öggügsen jüil ügei bile kememü:

janggi Bayajiqu-aça asayubasu medegülkü ni:

minü jakiraqu sumun-u Nayantai-du jil-ün arban lang teskebüri abday bila: arban jiryuduyar on kürtel-e toyan-u yosuvar güiçedken ögbe: arban doluduyar on-du abqu teskebüri-yi nekebesü urida sab çilüge-ber olju öggüy-e kemegeqojim-du çay-un jüderükü-yi jiyaju. qojim-du çay-un jöderekü-yi jiyaju öggügsen ügei bolbaçu bida nekegseger bile: öger-e uçir ügei kememü:

ele uçir-i yaryan medegülkü-eçe yadan-a. Yümdorji bolqul-a teskebüri alba-yi möçegerken ögkü ügei uçir çirügdal yarju uridu tusiyal-un da beyile noyan-u yajar-aça yurban lang-iyar toytayan iregsen çay-tu jil büri arban lang-un teskebüri abday bolbaçu nigente jakiysan-yi dayaju küliyegsen bile: Nayantai-yin alba-du oytu uçir yaruysan jüil ba egün-yi jakiysan yabudal uçir ügei bügüdel. Nayantai bolqul-a quyay arad kümün. qariyatu janggi Bayajiqu-du urida sab çilüge-yi jiyaju gederkileged qojim-du çay-un jüdegüri-dü tülkiçü sayatayuluyad teyin kü sumun-u janggi. jalan-u janggi qariyatu yamun-du kürtel-e yumudaqu yajar bui bügetel-e öber-ün joriy-iyar qariyatu yamun-a yumudaqu uçir ügei. dub dayun ügei bayiyad geneden aluslaju jayalduqu anu Nayantai-yin sanay-a ba esebesü Yümdorji-yin ketürkei sanay-a bolbaçu. ene metü todurqayilan jakiju dayusuysan tamayatu biçig bui bügetel-e Yümdorji siyud jisurlan Nayantai dayuriyan kögeldüçü qosiyu sumu-yi aluslaju yabuqu

楊 儀礼が維持する集団の歴史的記憶

bolqul-a tūsimed bida čidasi ügei uçir-yi yarıyan medegülbe: yuyuqu anu oldaqul-a ded da beyise noyan-u yajar-ača toličan üjeju tasulun dayusyaqu ajiyamu egün-ü tula bariba kemen kürju irejüki: eyimü-yin tula bayiçayabasu ene jüil-ün kereg-i uy medegülün irekü tuqai beyise minu bey-e çiyulıyan-u ded daruı-a-yin tusiyal küliyeju büküi bolbaçu edüge nigente qoyisılaysan büged sidkekü ey-e ügei boluısan metü-yin tula qoyisi egegülün yabuyuluy-a: kürkül-e erkim yajar-ača bayiçayan üjeju öger-e medegülbesü jokıqu yajar medegülju jiıyalıyaqu-yi medetügei kemen egün-ü tula ilegebe:

Törü Gereltü-yin arban nayımaduıyar on-u ebül-ün terigün sar-a-yin arban tabun-a:

〔訳〕 貝子チャクドゥルスレンから、チンギスのグルーン・バートルの後裔ユムドルジが不平を訴えたことについて、郡王旗に送った文書。

札薩克固山貝子チャクドゥルスレンらの文書。

札薩克多羅郡王エルキムビリクの印務を署理する協理タイジ・ゲンチュクに送る。

さしもどして送る件。

档冊を調べたところ、道光 17 年 10 月 11 日に貴旗から届いた文書のなかに、

詳細を報告し、処理を乞う件。このほど副盟長殿のところから届いた文書に、決定し伝達する件（があった）。

このほど<sup>バートル</sup>勇士（爵の）ユムドルジ、<sup>グシヨーチ</sup>先鋒（爵の）ナヤンタイらが上呈してきた文書に「ジノン、副盟長殿に呈して申しあげる。あわれなわれわれは真相を報告し、命を乞うために、悲しんで申しあげること。主君チンギスの御前にて、『磐石のような硬骨を持ち、海水の如き熱血を有し、衰えぬ意志を持ち、動揺せぬ決意を保ち、悪敵どもに対し、破竹の勢いで突進し、尽力してきた』スニト部のグルーン・バートルの子孫から、今日まで代々絶えることなくわれわれの代までバートルをつとめてきた。スウルデの御前にて鮮血を飲むバートルのわれわれをこのほど本年においてタイジで、<sup>ジャラン</sup>札蘭章京アディヤが 20 両のアルバを徴収するといってきた。アルバを納付しない場合はあなたを逮捕し、財産を没収し漢人にやる、とおどかしてきた。その後、弟のナヤンタイから章京バヤジホが 15 両のアルバを徴収するといってきた。もし納付しなかったら逮捕すると催促してきたため、奴才らは機会をうかがってジノン、（副）盟長殿の黄金の衙門にくぐり入り、われわれの不服をご明察になるように。これゆえに呈する」といってきた。このことから、また彼らの添付してきた信任状によれば、故王ラシバルジョル、盟長貝勒、故ソノムラブジャイグンドウン、盟長<sup>ジャサク</sup>札薩克一次加級貝子トゥドゥブスレンらが決定したなか、ダルハン・バートル・ノルブの代から現在のバートル・ユムドルジ、（先鋒）ナヤンタイらに至るまでアルバの徴収、駅馬の徴用と丸煮シューズの徴収を免除した文書がある。そのため、貴旗の無知なタイジ、<sup>ジャラン</sup>札蘭章京アディヤ、章京バヤジホらが、先代故王らと現在の盟長たちが定めた合法的な決

定をあいまいにしてアルバを徴収しようとしたことは道理に合わないことをまず知らしめて送る。届き次第、貴旗の協理タイジらが調べてみて、パートル・ユムドルジ、(先鋒) ナヤンタイらからアルバを徴収することを中止させ、今後ともそれを守るようにと叱責するほか、もしも今後また再びユムドルジらからアルバを徴収しようとするのがこちらに知られたら、決定した事項を執行する立場にある(貴殿ら)役人たちの責任を問うことになることを事前に知っておくべきであろう。このために命じて送る。

と届いた。このことの真相を詳査して報告する。

以前に札薩克<sup>ジャサク</sup>一等タイジ一次加級セレンデジド、一次加級協理タイジらのところから道光16年6月21日に届いた文書に、「報告する件。このほど盟長殿のところから送ってきた文書に、命じて送る件。郡王旗のユムドルジ、バルタイらが所轄の旗から圧迫され苦しめられているとして訴状を書き上告した一件を処理する際、近くにいることを考えて札薩克<sup>ジャサク</sup>殿に引き渡して裁かせよう。送ったことが档冊に記録されている」とあった。その後、札薩克<sup>ジャサク</sup>殿のところから詳査して報告してきた文書に(次のようにある)。

命じられたことにしたが、今年の閏6月25日にチャガン・チロト寺などのところで事件の当事者を集めて調べたところ、(以下のような証言がえられた)。

ユムドルジの証言：

スウルデの御前にて鮮血を飲んで奮闘してきたパートルたちのなかから、奴才の曾祖父ノルブ・ダルハン・パートルには、先王ラシバルジョルから授けられた「尊事に携わる使者たちは、永遠に駅馬と糧食を免除せよ」との旨の、雍正2年の信任状がある。それだけでなく、奴才の代に至るまでスウルデの御前にて鮮血を飲んでつとめてきたのである。それと同時に、旗とソムの定めたアルバや雑税に対しても、できるだけ馬や牛を献上して努力してきたのである。いつしか疲弊したため、奴才は今後輝かしいスウルデの御前で鮮血を飲んでつとめるか、さもなければ旗とソムのアルバを払うために生きるかになるだろう。また、タイジ・トゥメンデレゲルの家にいる息子エンケダライに私が会いに行ったら、タイジ・ラシニマと出あったのは事実である。私は(トゥメンデレゲルの家)で何ひとつ悪いことをしていない。また、札蘭<sup>ジャラン</sup>バトムンケの刀から逃れるため、盟長殿のところを不平を訴えたのである。ご判断をおおぐ次第である。

バルタイに聞いたところ、次のように証言した。

私は以前衙門のピチューチとして当直にあっていたが、札蘭<sup>ジャラン</sup>章京の任を終えてからは一切の公務から退いていた。小生は家が貧しいことから再びピチューチの職にあらず、父母のもとで生計維持にはげんでいた。そうしたなか突然タイジ・ラシニマらから呼ばれた。彼らの通知を受けとって一緒に歩いていたら、野外で急に私をつかまえて札蘭<sup>ジャラン</sup>ゲシクトに渡された。(その後)私はすきを見て逃げだし救命を求めたのである。その際、タイジ・ラシニマ、札蘭<sup>ジャラン</sup>バトムンケ<sup>ターリン</sup>の袋から刀を盗んだことはない。また、私が兄のエンケダライに会おうとしてタイジ・トゥメンデレゲルの家に行った時も、悪いことは何ひとつしていない。

梅倫章京バダラホ、タイジで札蘭<sup>ジャラン</sup>アディヤ、ソムの章京バイルシャー、驍騎校サンジャイらが共同で次のように証言した。

私たちがユムドルジから今まで何度も馬や牛などを徴収したことは、すべて双方で協議

の上おこなわれたものである。徴収したものは全部ユムドルジのアルバに換算し、旗とソムの雑税の一部として納入し、使用したが、われわれがそれを個人のために使いこんだことはない。

タイジ・ラシニマ、<sup>ジャラン</sup>札蘭バトムンケらは次のように報告した。

われわれが通知を携えて<sup>ジャラン</sup>札蘭ユムドルジと<sup>ジャラン</sup>札蘭バルタイらを呼びに行ったら、彼らは全員家にいた。ユムドルジは病気で寝ていた。通知を届けて召喚すると、<sup>ジャラン</sup>札蘭バルタイは通知にしたがって赴こうと行ってわれわれと一緒に（旗衙門）に向かっていたら、突然逃げだしたので、われわれは彼をつかまえて<sup>ジャラン</sup>札蘭ゲシクトに渡したのである。ユムドルジ家の外に（置いてあった）袋からわれわれの刀がなくなった以外に、<sup>ジャラン</sup>札蘭バトムンケが刀を抜いて威嚇したかは知らない。また、<sup>ジャラン</sup>札蘭ユムドルジがタイジ・トゥメンデレゲルの家の近くまで行っていたのは、何かを企んでいたのかもしれない、という。

このように、これらの証言を分析し、ひとつひとつ検討して本件を処理したら適当であろう。ただし、本件について聞くべき人物が多く、また現在作物の取り入れも重なったため、大勢の利益を考慮し、これ以上詳しく調べることを中止しよう。現状から見て以下のように決定した。

黄金スウルデの御前にて鮮血を飲む人はたくさんいても、先王ラシバルジョルはノルブ・ダルハン・パートルを寵愛し、「尊事に携わる使者たちは、永遠に駅馬と糧食を免除せよ」との旨について、雍正2年に印璽つきの信任状を配布している。（しかし）その後ノルブの子孫ユムドルジらは本旗のアルバや租税を他の旗民と同じように納付してきて、すでに長くなっている。この度ユムドルジが家業の貧困から信任状を持ちだして不平を申したため、ユムドルジを今後旗とソムのアルバと無関係にしよう。ただし、他のパートルたちもまた（ユムドルジの）真似をして、租税類を払わないと騒ぎだすかもしれないので、ユムドルジがいくら貧困に陥ったと主張しても、状況を見て毎年（銀）3両の租税を旗のアルバ類に充てるよう決定したい。

バルタイは、所轄のタイジ・トゥメンデレゲルの家に行ったとしても、自分の兄エンケダライに会った以外何も悪いことはしていない。彼は家計が苦しいため、衙門のピチューチの輪班に参加せずに自分の両親を養うために働いているため、追求することはない。

梅倫章京バダラホ、タイジで<sup>ジャラン</sup>札蘭アディヤ、ソムの章京バヤルシャー、驍騎校サンジャイらは、ユムドルジから馬や牛などを徴収したとしても、（それらを）すべて旗とソムの借金に充てただけで、決して自分たちで使いこんだことはないため、追求しないことにしよう。

タイジ・ラシニマ、<sup>ジャラン</sup>札蘭バトムンケとユムドルジらは、刀を盗んだとか、刀を抜いたとかいいあらそっているが、刀で負傷したりしたことはないため、これ以上調べることはしないでおこう。

また、タイジ・トゥメンデレゲルはユムドルジの息子エンケダライを（自分の）家にとどめておき、その両親に孝行できなくなったため、父のユムドルジと弟のバルタイはエンケダライが懐かしくなって会いに行ったら、かえってエンケダライを会わせなかったため、ユムドルジは悲しくなり、どうしても会いたいといつづけただけで、何ひとつ悪いことはしていない。それなのにタイジ・ラシニマがあいだに入って扇動し、ユムドルジが何かを企んで居座っている、と報告した。それを見れば、タイジ・ラシニマは悪意からタイジ・トゥメンデレゲルと庶民ユムドルジの仲を離間させ、騒ぎをおこしたことははっきりして

いる。そのため、タイジ・ラシニマを厳しく叱咤し、今後このような騒ぎをおこさせないように求め、軽率なことをしないように注意した。

ユムドルジとバルタイらは、爵位を持ち寵愛されながら、ささいなアルバや租税ぐらいのことで不平不満をもらし、非常識に行動したことを叱咤し、後々このような行いをなす者に見せしめとしよう。このように決定した諸事項について、盟長殿が適切かどうかをご照覧になってから知らせてくだされば、私どもはそれにしたがうようにしよう。これゆえに呈して申しあげる、という。

その後、(ダルハトの最高責任者の)太師ビルーングライらが、パートル・ユムドルジはただひとつスウルデの御前にてパートルとしての義務を果たす以外、旗とソムに(銀)3両のアルバも払わない、との(決定)にしたがわない旨を伝えてきた。ユムドルジは本当に郡王旗の人間であり、旗とダルハトのあいだで不正を働き、一切アルバを払わずにふるまうようになれば、他のパートルたちもまた真似をして、旗とソムにアルバを払わないと訴訟をおこしてやまないだろう。この度、盟長たるわれわれは、札薩克<sup>ジャサク</sup>殿が調査し決定したとおりに判定したことを伝達する。届き次第、このとおりに決定したことを郡王のところに写して届け、ユムドルジとバルタイらを所轄の旗に渡し、今後一切この種の訴訟沙汰をおこさないように禍根を断つように知るべきである。このために送る。

以上のように決定され、届いた文書をそのとおりに写し、ユムドルジとバルタイらを(所轄の旗)に渡した。届き次第、貴衙門は上記決定を守り、今後紛糾や騒動が出ないようにしたがうように。このために送る。

このように届いた文書にしたがっていたところ、このほど副盟長殿のところから送られてきた文書にもしたがって、タイジで札蘭<sup>ジャラン</sup>アディヤから証言を求めた。(アディヤが)報告するところによると、当(参領)所管の章京、ラブジャイのソムに属するユムドルジからは毎年租税(銀)10両を銅貨11,000枚に換算して徴収していた。(道光)13年にはたった6000枚を払い、のこりは未納であった。それ以降はトラブルが発生し、(道光)16年には盟長貝勒殿のところからの、ユムドルジは毎年3両納税するように、との決定にしたがい、(道光)14年から同17年までの4年間合計12両を払うよう求めた。また、昨年に徴収が決定された、王の京師行きの費用として(銀)2両と馬1頭をあわせて求めたが、(ユムドルジは)何ひとつ払わなかった、という。

章京バヤジホから聞いたところ、私の所管するソムのナヤンタイからは毎年10両の税を徴収していた。(道光)16年まで規定どおりに納めていた。同17年に納税を求めたところ、そのうちに払うといっていた。その後、家業貧困を理由に一向に納めなかったので、私どももまだ催促している。ほかにとくに問題はない、という。

これらの諸事を考えると、ユムドルジは租税やアルバを一切払わず、騒動をおこした。前任の盟長貝勒殿が3両の納税を決定した際、われわれは年10両を徴収していたにもかかわらず、その決定にしたがったのである。ナヤンタイについては、税の徴収をめぐる一度も紛糾したことはなかった。ナヤンタイはもともと箭丁で、所管の章京バヤジホに対し、そのうちに払うといったり、その後家業疲弊の際には納税を拒否したりして(公務を)妨げた。彼はソムの章京、札蘭<sup>ジャラン</sup>章京および衙門に対し不平不満をいっているとしても、それは彼自身の意志によるものではないだろう。いままで静かだった人物が突然越訴するとは、ナヤンタイ自身の考えなのか、ユムドルジの計略なのか。上記のように明察し終えた印璽<sup>インシ</sup>つきの文書があるにもかかわらず、ユムドルジが直接姦計を企てナヤンタイがそれに追隨

楊 儀礼が維持する集団の歴史的記憶

して旗とソムを（無視して）越訴する行為は、臣らはとうてい受けいられないことを申しあげる。

請うらくは、（報告が）届けば副盟長貝子殿のところでご照覧になり、英明なご判断が下されるよう、これゆえに呈する。

と以上のように届いてきた。そのため、調べたところ、この件を報告してきた当初、貝子の私に副盟長の任が予定されていたとしても、現在その話が延期となった以上、事件を処理するには不相当だということで、（本件を）さしもどして送る。届き次第、貴旗のところではかの適切と思われるところへ報告し、上告することを知るように、これゆえに送る。

道光 18 年 10 月 15 日（*Činggis Qayan-u Naiman Čayan Ordu* 1998: 107-111）。

5. Silin Ƣool-un Čiyulγan terigün. Sönid-ün Jegün jasay törü-yin jiyün wang Čewengjab-ača uγ-un Sönid-ün Gilügen Bayatur-un qoyiči üy-e-yin ür-e ači Yümdorji jerge kümün-ü yumudal-un tuqai iregülügsen bičig-i Yeke Juu-yin Čiyulγan terigün-eče ulamjilayγan bičig.

čiyulγan-u terigün jasay qosiyun-u beyise Tödübsereng-ün bičig:

jasay qosiyun-u beyise Čaydursereᅅ-dü ilegebe:

lablan bayičayar-a yabuγulqu-yin učir.

ene on-u namur-un terigün sar-a-yin sin-e-yin qoyar-a. Kiyen Čing Men-dü yabuqu Silin Ƣool-un Čiyulγan-u daruγ-a Sönid-ün Jegün jasay törü-yin jiyün wang qoyar jerge nemegsen Čewengjab tan-u γajar-ača kürčü iregsen bičig-tü

yabuγulqu-yin učir. man-u Silin Ƣool-un Čiyulγan-u Sönid qosiyun-ača urida Činggis ejen-ü gegegen niγur-i takiqu tayilγ-a-du saγulγaysan Gölügen Bayatur-un ači ür-e Bayatur Yümdorji nar-ud irejü medegülkü inü

bida nar uγ tayan Sönid-ün Gölügen Bayatur kemegči-yin ür-e-eče salju Činggis ejen-ü sülden-ü emün-e qar-a čisun uuγuju qaril ügei-ber küčün jidküjü yabuγsan-u učir bida nar Darqad-un tayilyan-du oruγulju Bayatur čola olγuγsan-du qariyatu Yeke Juu-yin Čiyulγan-u daruγ-a nar ba jasay jinung-ud-un γajar-ača alban ulay-a-yi egüride ügei bolγaju uday-a daray-a-bar darqalaqu tamayatu bičig olγuju. mön kü alban ulay-a ügei yabuγsayar iretel-e. Ordus-un jasay wang-un γajar-ača tayiji nar-un albatu-yin dotur-a oruγulun jakiryulju odu jasay-un tamay-a-yi qamiyaruγsan tusalayči Göngčüγ. Göngčüg

ner tere kü Darqan bičig-i keregsel ügei siyud sanayan-u joriy-iyar janggi Rabjai. Bayajiqu. Masijiryal nar-un sumun-u tayiji Taysurul. Rasinim-a. Büger-e. Jigmid jiči qariyatu wang nar-un albatu-yin dotur-a bügüde qorin naiman erüke-yin ulus-yi oruyulju uy boyda Činggis sülden-ü tayilyan-u erkim čiqula alban-i qoyusulaju tasulqu-du kürgebe: oldabasu. qayučin keb-iyer ejen gegegen-ü emün-e küčün jidkügsen uy Darqad luğ-a neyilegüljü tayilyan-u yabudal-yi güiçedkekü ajiyamu kemen medegülümü:

kinabasu Činggis ejen bolbasu dotuyadu yadayadu olan čiyulyan-u olan wang güng tayiji nar-un uy ečiğe büküi-yin učir gegegen ijayur-yi sakiyulun tayiqu tabun jayun erüke-yin arad-i arban čiyulyan-u qariyatu qosıyü neyigem-ün dotur-a-ača yaryaju sayulyaysan-ača inaysi edüge kürtel-e čöm öger-e alba jüil-dü qabiyaraqü ügei yagça kü Činggis ejen-ü gegegen ijayur-yi sakiju kečiyenggüilen tayıysayar iregsen eyin kü učir mönüken Tayisi. Tayibuu. Qonjin. Jayisang-un jerge qoyusun čola-yi bayilyay-a kemegsen učir-tu Qalq-a-yin Sečen Qan-u jerge olan Mongyol wang. güng-üd uul iruğar-i ayudalun yaryaju keb-iyer kesig kürtegüljü qoyusun čola şangnayulun Činggis ejen-u gegegen ijayur-yi sakiyulun takiyulqu-yi yuyun ergügsen yabudal-i ulamlan ayiladqaysan-i jarlıy yosuyar bolıyaju kesig kürtegegsen jerge yabudal-i olan čiyulyan-u daruğ-a nar tusiyaysan anu alin eteged-ün dangsan-a todurqai-yin deger-e. enekü Gölügen Bayatur-ača darayalan egün-ü ači ür-e-yi mön kü ene Bayatur Yümdorji nar-un beyes-yi kürjü iretel-e qariyatu jinung čiyulyan-u daruğ-a-yin bičig todurqai atal-a Ordus-un jasay tusalayçı nar ejirkeju eldeb alban yabuylulun ejen-ü tayily-a-yi tasuldayulqu-du kürgebe kemegsen inü yekel-e neyilelčekü busu-yin tula učir-yi yaryaju yabuyluluğ-a: kürümeğçe erkim čiyulyan-u daruğ-a nar-un yajar-ača bičig-ün dotur-a kereg-i bayiçağan üjeju qariyatu čiyulyan-u Ordus-un jasay tusalayçı nar-tu čingyadqan tusiyaju enekü Sönid-ün Gölügen Bayatur-un ür-e Bayatur Yümdorji nar-i uul sayulyaysan yosuyar qariya-tu Darqad luğ-a neyilegülün sayulyayad basa kü Ordus-un jasay tusalayçı nar-un ejirkeju yosun busu alba yabuyluluğsan učir-i yayakin todurqayilan sidkeged kergin sidkeju neyilegülün sayulyaysan yabudal-yi qoyisi bičig kürgen iregülüy-e kerbe ülü neyilelčekü yajar bui abasu mön kü učir-yi yaryaju bičig kürgeju iregülüy-e kemen erkim čiyulyan-u daruğ-a nar-un yajar darui bičig qarılčan ese yabuyluluğsan-u tula ergümjilegsen čola kergim jerge bitegülüg-iyer bičijü yabuyluluğsan-i qamtu-bar yaryaju yabuylusuğai: egün-ü tula ilegebe

kemen kürjü irejüki: eyimü-yin tula egün-i inü yayarabčılan bayiçağan yabuyluluğ mayadlan

楊 儀礼が維持する集団の歴史的記憶

uçir-yi yarıyaju ulamjilan medegülbestü jokiqu-yin tula biçig kürümeğçe jasay beyise tan-u yajar biçig-ün doturaki kereg uçir-yi bayiçayan üjeju darui Bayatur Yümdorji nar uy tağan Jegün Sönid-eçe yarıyaysan Darqad kümün mön busu. Darqad mön bolqul-a qariyatu jakiraqu jinung tan-u yajar бүкүи Darqad-un er-e çege dangsan-du todurqai bui ügei basa Yümdorji nar nigen nam-iyar kedün erüke-yin arad. jiçi eden-ü beyes çuqum Darqad bolqu ba esebesü Wang-un qosiyun-u kümün bolqu uu. egün-i ali nigen mayad ünén uçir-i jüil darayalan todurqayilan yarıyaju yaçarabçilan çiyulyan-u daruy-a beyise man-u yajar medegülür-e iregtün. kinaju sidkeged ulamjilan medegülkü-yi tür küliyegsen-ü tula alıyurlan sayadayulju ülü bolumui: egün-ü tula ilegebe:

Törü Gereltü-yin arban yisüdüger on-u namur-un dumdadu sar-a-yin sin-e-yin yurban-a:

[訳] シリングル盟盟長，スニト左（旗）札薩克多羅郡王チェウエンジャブから（届いた），元スニト部のギルーン・バートルの後裔ユムドルジらが不服を申したてた件についての問い合わせ文を，イケ・ジョー盟盟長から転送してきた文書。

盟長札薩克固山貝子トゥドゥブスレンの文書。

札薩克固山貝子チャクドウルスレンに送る。

確認して調査させる件。

今年秋の最初の月（7月）の2日に，乾清門行走シリングル盟盟長スニト左（旗）札薩克多羅郡王二次加級チェウエンジャブらの衙門から届いた文書のなかに

送る件。我がシリングル盟のスニト旗から以前に主君チンギスの輝かしい御顔をまつる祭祀に派遣した，ギルーン・バートルの後裔ユムドルジらがやってきて報告した。「われわれはもともとスニト部のギルーン・バートルという人物の子孫から生まれた（者で），主君チンギスのスウルデの御前にて鮮血を飲み，たゆまず力を捧げてきた。そのため，われわれをダルハトが主催する祭祀に参加させ，バートルの称号を与えられ，所管のイケ・ジョー盟盟長ならびに歴代札薩克ジノらのところからアルバや馱馬を免除するという特権付与を明示した印璽付きの文書を渡された。このようにアルバや馱馬なしできたところ，オールドスの札薩克王の衙門から（いつのまにか）タイジの属民アルバトのなかに編入させられ，管理されていたことになった。現在札薩克の印務を署理する協理タイジ・グンチュク，グンチョクラが（以前の）特権付与の文書を無視し，勝手に（われわれを）章京ラブジャイ，バヤジホ，マシジラガルのソムのタイジであるタクスウルル，ラシニマ，ブケレー，ジゲミドラ所管の王らのアルバト（に編入した）。当旗内（に住む）全28戸の（ダルハトの）人びとを（旗のアルバト）に編入した。そのため，本業としての聖チンギスのスウルデ祭祀というもっとも重要な公務を妨害する結果になった。われわれの訴えを聞き，どうか以前のように，聖主の御前に尽力するという他のダルハトたちと合流させ，祭祀に

専念できるよう、お願い申しあげる」といってきた。

思うに、主君チンギスは内外諸盟のすべての王公タイジらの祖先であり、その輝かしい出自を守りまつる500戸（のダルハト）は、10盟の多くの旗から派遣された人びとである。昔から現在に至るまで一切のアルバを免じられ、ただひとつ聖主チンギスの輝かしい事跡を継承し、つつしみ深くまつってきた人びとである。また、このほどタイシ（太師）、タイボ（太保）、ホンジン（官人）、ジャイサン（宰相）などの称号を中止させようとの事件の際、ハルハのセチェン・ハンなど大勢のモンゴルの王公たちが（チンギス・ハーン祭祀の）本来の由来を持ちだして（理由とし）、皇恩をいただいて空号をひきつづき下賜され、主君チンギスの輝かしい事跡を継承しまつることを許可するよう嘆願し上奏したところ、諭旨に遵い許可された。このいきさつを多くの盟の盟長に知らせており、それぞれの档冊にも明記されているはずである。ギルーン・バートル以降、その後裔のバートル・ユムドルジの代に至るまで所管ジノンからの文書があるにもかかわらず、オルドスの札薩克協理タイジらがのさばり、勝手にアルバを課して、主君の祭祀を中断におこむなど、甚だ道理に合わないため、本件を送った。

届き次第、盟長らの衙門の方から档冊文書を調べ、所管のオルドスの札薩克協理タイジらに厳命するように。スニト部のギルーン・バートルの後裔、バートル・ユムドルジらをもとどおりに所管のダルハトたちと合流させるように。また、オルドスの札薩克協理タイジらがのさばり、違法にアルバを徴収した件をいかに処理したか、（ダルハトたちをどのように）合流させたかをわれらのところに知らせるように。もし、不当な点があれば、それを明記した文書を届けるように。貴盟の盟長らの衙門から連絡の文書がないため、授与された爵号なども不正確であるかもしれないことをあわせて断っておこう。これゆえに送る。

と書いてあった。したがって、本件をただちに調べて真相を究明して報告した方が適切であろう。文書が届き次第、札薩克貝子貴殿のところから文書のなかで書いてあることを調査するように。バートル・ユムドルジらはもともと東スニト旗から出自をもつダルハトかどうか。ダルハトである場合、彼らを所轄するジノンたる貴殿のところにあるダルハトの丁冊にはっきりした記録があるかどうか。ユムドルジ一党は何戸からなるのか、彼らは本当にダルハトなのかそれとも郡王旗の属民なのか。これらのことを逐一調査し、速やかに盟長たる貝子われわれのところに報告するように。結果を見てまたさらに報告することになっているため、遅延してはならない。これゆえに送る。

道光19年秋の仲月（8月）の3日（*Činggis Qayan-u Naiman Čayan Ordu* 1998: 111-113）。

6. Čiyūlyan-u terigün-eče Sönid-ün Gilügen Baɣatur-un qoyiči üy-e-yin ür-e ači Yümdorji-yin yumudal-un tuqai Jiyün Wang-un yamun-a bayičayār-a yabuyluysan bičig.

Wang-un yamun-a ilegebe:

lablan bayičayār-a yabuylqu-yin učir

ene on-u namur-un terigün sar-a-yin sin-e-yin qoyar-a. Kiyen Čing Men-dü yabuqu čiyulyan-u daruy-a Sönid-ün Jegün jasay törü-yin jiyün wang. qoyar yeke (jerge) nemegsen Čewengjab tan-u yajar-ača kürjü iregsen bičig-tü yabuylqu-yin učir eyimü teyimü ilegebe kemen kürjü irejüki: eyimü-yin tula bayičayabasu Bayatur Yümdorji nar-tu tegün-ü uy jirum-yi dayayulju nigente uridu tusiyal-un čiyulyan-u ded daruy-a jinung jasay-ud-un yajar-ača ulay-a sigüsü-yin jüil-iyer jobayaqu-yi tasulun jakiju yaččakü boyda ejen-ü gegegen-ü emün-e küčün jidkügüljü yabuylqu tamayatu bičig uday-a daray-a toytuyan tusiyaju dayaju yabuylqušan jüil büi amui: tere čü bayituyai basa bayičayabasu Darqad tabun jayun erüke-yin arad-yi demei alban jaruly-a tomilaqu ba. jiči joriy-iyar ulay-a bariqu jerge-yin kereg-i tulyayulju bolqu ügei yabudal-i čayajalaysan anu qauli-du bui kereg: egün-i jüi inü yayarabčılan bayičayan yabuylju mayadlan učir-i bayičayan üjejü ulamjilan medegülbesü jokiqu-yin tula bičig kürümegeče tusalayči tayiji nar tan-u yajar bičig-ün doturaki kereg učir-i bayičayan üjejü darui Bayatur Yümdorji nar čuqum uy tayan Jegün Sönid-eče yarğaysan Darqad mön busu: mön bolqul-a tan-u qosiyun-ača yamar učir-iyar joriyuda albadaqu ba qariyatu qosiyun-u er-e-yin čege dangsan-du bui ügei. jiči üneger tan-u qosiyun-u aqu bolbasu yayun-a Jegün Sönid qosiyun-du jayalduju demei nigen eteged-ün üge-yi barimtalan lablaju bayičayar-a irekü jiči basa ču Yümdorji nar-i tan-u qosiyun-ača eldeb alban-i yabuylju boyda ejen-ü tayily-a-yin kereg-i osuldaqu anu yamar sanay-a. jerge jüil-ün mayad ünün učir-ud-i nigen nigen-iyer todurqayilan yarğaju yayarabčılan čiyulyan-u daruy-a beyise man-u yajar medegülün iregtün. sidkeged ulamjilan medegülkü-yi tür küliyegsen-ü tula alğurlan sayadayulju ülü bolumui: egün-ü tula ilegebe:

Törü Gereltü-yin arba yisüdüger on-u namur-un dumdadu sar-a-yin sin-e-yin yurban-a.

〔訳〕 盟長から、スニト部のギルーン・バートルの後裔ユムドルジが不服を申し立てた件について、郡王旗衙門に調査を依頼した文書。

王の衙門に送る。

確認し調査させる件。

今年秋の最初の月（7月）の2月に、乾清門行走、（シリングル盟）盟長、スニト左旗の札薩克多羅郡王、二次加級チェウエンジャブラのところから届いた文書のなかに、「送る件かれそれ、云々」と送ってきた。そのため、調べたところ、バートル・ユムドルジらには、彼の本来の役に沿うように、すでに先代のジノン、札薩克副盟長

のところから駄馬と丸煮シューズの徴収を免除されている。ただひとつ、輝かしい聖主の御前にて力を捧げるよう、いく度も印璽つきの文書を配布していたことがある。それだけではなく、さらに調べたところ、500戸のダルハトの人びとを公務に任命したり、勝手に駄馬を徴収するなどのことを強要してはならない、と法によって禁止した前例がある。

この件を速やかに調査し、調べたことを検討してさらに報告すべきである。文書が届き次第、協理タイジら貴殿が文中にて言及していることを調べるように。バートル・ユムドルジらが本当に東スニト旗から出たダルハトかどうか。もしそうであるならば、何ゆえに貴旗が彼らからアルバを徴収しようとしたのか。旗の（箭丁の）戸口档冊に載っているかどうか。また、もし貴旗の人間であるならば、なぜ東スニト旗に上告したのか。一方の主張のみを根拠にして報告してきたり、また旗からさまざまなアルバをユムドルジらから徴収したりして聖主の祭祀を妨げたげたのは、どういう意図なのか。

以上の事件の真相をひとつひとつ究明し、速やかに盟長、貝子われらのところに報告するように。（シリングル盟へ）報告することを待たせているため、遅延してはならない。これゆえに送る。

道光19年秋の仲月（8月）の3日（*Činggis Qayan-u Naiman Čayan Ordu* 1998:113）。

7. Jinung-ača Činggis-ün Gölügen Bayatur-un qoyiči üy-e-yin ür-e ači Yümdorji-yin yumudal-un tuqai jiyün wang Erkimbilig ner-tü yabuyluysan bičig.

teyimü kemen<sup>15)</sup> kürjü irejüktü: eyimü-yin tula tusiyaşsan-yi dayaju dangsan-a bayiçayabasu Törü Gereltü-yin arban doluduyar on-u terigün sar-a-yin arban nigen-e man-u yajar-ača jasay törü-yin jiyün wang Erkimbilig-ün tamaş-a-yi qamiyaruşsan tusalayči tayiji Göngčuy Göngčuydorji nar-un yajar yabuyluysan bičig-tü tasulan sidkekü-yin učir.

mönügen Bayatur Yümdorji. Qosiyučü Nayantai nar-un ergün medegülügen bičig-tü

öčüken bida uy učir-iyen yarıyan ami sirşun medegülkü-yin učir.

Činggis ejen-ü emün-e qar-a čilayun metü yasutu. qar-a usun metü čisutu. qaril ügei sanayatu. qaltural ügei joriştu qari tan yeke dayisun-du qatayujin yabuju küčün-iyen öggügsen Sönid-ün Gölügen Bayatur-un ači ür-e-eče inerü üy-e ularin tasural ügei yabuysayar Bayatur-ud man-u beyes-tü kürtel-e iregsen-i sülde-yin gegegen emün-e ulayan čisu uuşuju jidkügsen

Bayatur-ud bidan-i mönügen ene on-du tayiji jalan-u janggin Adiy-a qorin lang alba abun-a kemen čingyata alba ese ögbesü bey-e-i činü bariju abuyad ger mal-i ebdejü kitad-tu öggün-e: daray-a anu minu degüü Nayantai-ača janggi Bayajiqu arban tabun lang alba abun-a ese ögbesü bey-e-yi činü bariju abačın-a kemen šayardaγulqu-du boγul man-u beyes ami jabsarlaju jinung beyise noyan-a sirγuju boγul man-u γumudal-i toličan ayiladqaqu ajiyamu: kemen medegülün irejüki:

eyimü-yin tula tedeger-ün nemen ergügsen jiyuqu bičig-tu bayičayabasu wang aγsan Rasibaljuur. čiyulγan-u terigün beyise aγsan Sodnamrabjayigendün. čiyulγan-u terigün jasay nigen jerge nemegsen beyise Tödübsereng ten-ü tasulan jakiγsan dotur-a. Darqan Bayatur Norbu-yin üy-e-eče edügeki Bayatur Yümdorji. Nayantai nar-tu kürtel-e alba abqu. ulay-a unuqu. sigüsü idekü-yi tasulun olγuγsan jiyuqu bičig bayıqu-yin tulada erkim qosıγun-u uqaburi ügei tayiji jalan Adiy-a. janggi Bayajiqu nar-un beyes uridu tusiyal-un aγsan noyad ba edügeki čiyulγan-u daruy-a-yin jakiγsan jirum-tu kereg-yi betegiregülün alba nekekü-yi üjkül-e oγuyata ülü neyilelčekü-yin tulada uçir-i γaryan yabuγulba: kürügsen-ü darui erkim qosıγun-u tusalaγči tayiji tan-u γajar bayičayan üjeju Bayatur Yümdorji. Nayantai nar-ača alba abqu-yi bayılγaju ulamjilan dongγudqu yabudal-yi medetügei kemen yabuγulqu-ača γadan-a. kerbe Yümdorji nar-ača dakin alba-yi nekegülün basa ču medegdel iregülkü-dü kürbesü erkebesi tasuluγsan kereg-yi uduridju yabuqu tüsimed-ün beyes lüge kelelčekü yabudal-yi urida medetügei kemen egün-ü tula ilegebe:

kemen yabuγuluγsan-i dangsan-du temdeglejüki: eyimü-yin tula Darqad-un yamutad-i jarlan abčiraju bayičayan asaγubasu medegülkü inü

Bayatur Yümdorji nar uy taγan Sönid-ün Gölügen Bayatur-un ür-e-eče salju sülde-yin gegegen-ü emün-e qar-a čisu uuγuju. qarıl ügei küčün-iyer jidküju yabuγsayar iregsen büged basa ču wang aγsan Rasibaljuur. čiyulγan-u terigün beyise aγsan Sodnamrabjayigendün. čiyulγan terigün jasay qosıγun-u beyise Tödübsereng ten-ü tasulan jakiγsan jiyuqu bičig čöm büi amui: basa ču Bayatur Yümdorji nar ijaγur-ača Sönid-ün Gölügen Bayatur-un ači ür-e-eče salju iregsen-eče inerü γayča kü sülde-yin gegegen-ü emün-e qar-a čisu uuγuqu-ača öger-e tayily-a takily-a-yin kereg-tü qamiyaraqı ügei iregsen inü on udayarajuqi: man-u Darqad-un tabun jaγun erüke kümün bolbasu čuqum. Činggis ejen-ü Naiman Čayan Ordun-i sakiγsan kümün. Bayatur Yümdorji bolbasu čuqum Sönid-ün Gölügen Bayatur-un ači ür-e mön büged basa ču arban γurban jil boluyad boγda sülde-yin gegegen-i Ordus nigen

čiyulɣan-iyar bürirdjü jiyɣayan takiqu-du ene Bayatur Yümdorji nar sayiy-a alban qaɣaqu yabudal uçir-i mön kü man-u nigen čiyulɣan-u noyad tūsimed čöm üjeju medemüi kemen medegülümüi: mön kü Darqad-un er-e-yin dangsan-i bayiçayabasu Naiman Čayan Ordun-i sakiysan nigen kesig-ün er-e-yin dangsan čöm büi yerü Sönid-ün Gölügen Bayatur Yümdorji nar kemekü dangsan todurqai ügei: eyimü-yin tula kinabasu Činggis ejen bolbasu dotuɣadu ɣadaɣadu olan čiyulɣan-u wang. beyile. beyise. güng. tayiji nar-un uɣ büktü-yin uçir tabun ɣaɣun erüke arad-i arban čiyulɣan-u qariyatu qosıyü neyigem-ün dotur-a-aça ɣarɣaju saɣulɣaju gegegen ijaɣur-i sakiyu tayily-a-du saɣulɣaysan tulada yerü ali qosıyü kemen man-u ɣajar maɣadlaqu anu berke-yin tula ɣuyaqu anu  
 čiyulɣan-u terigün noyan-u ɣajar-aça toličan üjeju qosıyün-u kemen buliyaldudaɣ Jiyün Wang-un qosıyün-u tamaɣ-a-yin ɣajar-aça bayiçayan maɣadlaju čuqum teden-ü beyes-eče ünen-i olqu ajiyamu: kemen egün-ü tula ergün bariba:  
 Törü Gereltü-yin arban yisüdüger on-u namur-un segül sar-a-yin sin-e-yin jirɣuyan-a:

〔訳〕 ジノンより、チングスのギルーン・パートルの後裔ユムドルジが不服を申し立てた件について、郡王エルキムベレクらに送った文書。

……云々と届いた。そのため、明示られたことについて档冊を調べたところ、道光17年（秋の一筆者補足）の最初の月の11日に我が衙門から郡王エルキムベレク<sup>16)</sup>の印務を署理する協理タイジのグンチュク、グンチョクドルジらに送った文書に、

決定して処理する件。このほど、パートル・ユムドルジ、先鋒ナヤンタイらが上呈してきた文書に「あわれなわれわれは真相を報告し、命を乞うために、不平を申しあげる。主君チングスの御前にて、『磐石のような硬骨を持ち、海水のごとき熱血を有し、衰えぬ意志を持ち、動揺せぬ決意を保ち、悪敵どもに対し、破竹の勢いで突進し、尽力してきた』スニト部のギルーン・パートルの子孫から、今日まで代々絶えることなくわれわれの代までパートルをつとめてきた。スウルデの御前にて鮮血を飲むパートルのわれわれをこのほど本年においてタイジで、札蘭章京アディヤが20両のアルバを徴収するといってきた。アルバを納付しない場合はあなたを逮捕し、財産を没収し漢人にやる。とおどかしてきた。その後、弟のナヤンタイから章京バヤジホが15両のアルバを徴収するといってきた。もし納付しなかったら逮捕すると催促してきたため、奴才らは機会をうかがってジノン、貝子<sup>17)</sup>殿の（黄金の衙門）にくぐり入り、われわれの不服をご明察になるように。これゆえに不服を呈する」といってきた。このことから、また彼らの添付してきた信任状によれば、故王ラシバルジョル、盟長で貝子<sup>18)</sup>の故ソノムラブジャイゲドゥン、盟長札薩克<sup>ジヤサク</sup>一次加級貝子トゥドゥブスレンらが決定したなか、ダルハン・パートル・ノルブの代から現在まで

のバートル・ユムドルジ、(先鋒) ナヤンタイに至るまでアルバの徴収、馱馬の徴収や丸煮シユースの徴収を免除した信任状がある。そのため、貴旗の無知なタイジ、<sup>ジャラン</sup>札蘭章京アディヤ、章京バヤジホらが、先代故王らと現在の盟長たちが定めた合法的な決定をあいまいにしてアルバを徴収しようとしたことは道理に合わないことをまず知らしめて送る。届き次第、貴旗の協理タイジらが調べてみて、バートル・ユムドルジ、(先鋒) ナヤンタイからアルバを徴収することを中止させ、今後ともそれを守るようにと叱責するほか、もしも今後また再びユムドルジらからアルバを徴収しようとするのがこちらに知られたら、決定した事項を執行する立場にある(貴殿ら) 役人たちの責任を問うことになることを事前に知っておくべきであろう。このために送る。

と送ったことが档冊に記されていた。そのため、ダルハトのヤムタトラを呼んできて取り調べたところ、次のような証言がえられた。

バートル・ユムドルジらはもともとスニト部のギルーン・バートルの子孫から枝分かれした者で、スウルデの御前にて鮮血を飲み、惜しみなく力を捧げてきた人(人物)である。また、故王ラシバルジュール、盟長で貝子、故ソノムラブジャイゲンドウン、盟長で<sup>ジャサク</sup>札薩克固山貝子トゥドゥブスレンらが審議し決定した信任状も存在する。そのうえ、バートル・ユムドルジらがスニト部のギルーン・バートルの子孫から枝分かれし、長年ずっとスウルデの御前にて鮮血を飲む以外に、(普段は)他の祭祀にかかわらないできた。われわれダルハトの500戸の人びとは、主君チンギスの八白宮を維持する者である。バートル・ユムドルジは本当にスニト部のギルーン・バートルの子孫である。13年に一度聖スウルデをオールドスー盟全体で集まってまつる時に、このバートル・ユムドルジらが(祭祀の)アルバにとりかかると、我が盟すべての王公と臣下たちが見て知っているはずである、と述べた。

また、ダルハトの丁冊を調べたところ、八白宮を維持してきた一ゲシクの男子の档冊は全部ある。ただし、そのなかに「スニト部のギルーン・バートル(の子孫)ユムドルジら」との文言はない。

以上のような状況から見て、主君チンギスは内外諸盟の王、貝勒、貝子、公、タイジらの祖先である。500戸のダルハトは10盟の諸旗から派遣された、輝かしい祖先をまつるための人びとである。どれその旗の所属である、とわれわれが識別するのは困難である。したがって、請うらくは盟長殿のところから明察し、旗の属民であると主張している郡王旗衙門にも調査させ、彼ら(ダルハト)の本当の出自を確認しよう。これゆえに送る。

道光19年秋の最後の月(9月)の6日  
(*Činggis Qaγan-u Naiman Čaγan Ordu* 1998: 113-115)。

8. Čiyulıyan-u terigün Tödübsereng-eče Činggis-un Gilügen Bayatur-un qoyiçi-yin üy-e-yin ür-e ači Yümdorji nar-un yumudal-un tuqai beyise Čaydursereng nar-tu ilegegsen bičig.

Čiyulıyan-u terigün jasay qosıyın-u beyise Tödübsereng-ün bičig:

jasay qosıyın-u beyise Čaydursereng tusalayči tayiji nar-tu ilegebe: qoyisi tusiyaju dangsan-yi abuyulur-a yabuyulqu-yin učir.

ene on-u namur-un segül sar-a-yin qorin-a jasay beyise tan-u yajar-ača medegülür-e iregsen bičig-ün tobčiy-a-du

kinabasu Činggis ejen bolbasu dotuyadu yadayadu olan čiyulıyan-u wang beyile. beyise. güng. tayiji nar-un uy büküi-yin učir tabun jayun erüke arad-i arban čiyulıyan-u qariyatu qosıyü neyigem-ün dotur-a-ača yarıyaju sayulıyaju gegegegen ijayur-i sakiju tayılıy-a-du sayulıyaysan tulada yerü ali qosıyü kemen man-u yajar mayadlaqu anu berke-yin tula. yuyaqu anu

čiyulıyan-u terigün noyantın-u yajar-ača toličan üjeju. qosıyın ni kemen buliyalduday Jiyün Wang-un qosıyın-u tamay-a-yin yajar-ača bayiçayan mayadlaju. čuqum tedun-ü beyes-eče ünen-i olqu ajiyamu kemejüki:

egün-dü bayiçayabasu Činggis ejen-ü ijayur-yi takıqu-yin učir tabun jayun arad-i arban čiyulıyan-u qariyatu qosıyud-un dotur-a-ača yarıyaju sayulıyaysan yabudal-i todurqayilaju iregsen inü čuqum erkim beyise tan-u yamun-du arban čiyulıyan-u jasay-ud-un yajar-ača tabun jayun erüke arad-i dangsalan yarıyaju sayulıyaysan-i mayadlaqu dangsan bui amui: egün-i čiyulıyan-u daruy-a man-u yamun-du bayiçayaqu dangsan ügei. basa kü tan-u yajar Darqad-un Yumutad-un medegülügsen-ü dotur-a kinabasu man-u Darqad-un tabun jayun erüke kümün bolbasu Činggis Qayan-u Naiman Čayan Ordun-yi takiysan kümün Bayatur Yümdorji bolbasu čuqum Sönid-ün Gölügen Bayatur-un ači ür-e mön kemen medegüljüki: ene kereg-ün učir-i erkim beyise tan-u yajar Činggis-un Naiman Čayan Ordun-i sakiysan Yamutad-un dotur-a-ača ken neretü Yamutad todurqayılan yarıyaju medegülügsen-i jüi inü tede Yamutad-un neres ba mön kü arban čiyulıyan-u qosıyü neyigem-ün dotur-a-ača yarıyaju sayulıyaysan dangsan-yi tusburi seyiregülju nisge-ber medegülür-e iregülbesü jokimui: yerü edür sayatayulbasu oytu ülü bolumui: egün-ü tula ilegebe:

Törü Gereltü-yin arban yisüdüger on-u ebül-ün terigün sar-a-yin sin-e-yin qoyar.

楊 儀礼が維持する集団の歴史的記憶

〔訳〕 盟長トゥドゥブスレンから、チンギスのギルーン・バートルの後裔ユムドルジらが不服を申し立てた件について、貝子チャクドゥルスレン、協理タイジらに出した文書。

盟長<sup>ジャサク</sup>札薩克固山貝子トゥドゥブスレンの文書。

札薩克<sup>ジャサク</sup>固山貝子チャクドゥルスレン、協理タイジらに送る。

档冊をとりよせる件。今年の秋の最後の月（9月）の20日に、<sup>ジャサク</sup>札薩克貝子殿のところから報告してきた文書の要綱に、

思うに、主君チンギスは内外諸盟の王、貝勒、貝子、公、タイジらの祖先である。500戸の（ダルハト）は元来10盟の諸旗から派遣された、輝かしい祖先をまつるための人びとである。どれぞれの旗の所属である、とわれわれが識別するのは困難である。そのため、請うらくは盟長殿のところから明察し、旗の属民であると主張している郡王旗の衙門にも調査を依頼し、彼ら（ダルハト）の本当の出自を確認しよう。

とあった。本件に関して調べたところ、主君チンギスの事跡をまつる五百戸の人びとは10盟の諸旗から派遣された経緯を明確にしてきたのは貴旗である。（そのため）貝子貴殿の衙門には10盟の<sup>ジャサク</sup>札薩克たちのところから500戸のダルハトを派遣したという档冊があるはずである。この件については、盟長たるわれわれの衙門に調べられる档冊がない。また、貴殿のところには、ダルハトのヤムタトが報告してきた文書もある。それには、「思うには、われわれダルハトの500戸の人びとは、チンギス・ハーンの八白宮をまつる者である。バートル・ユムドルジは、本当にスニト部のギルーン・バートルの子孫である」と書いてあった。この件について、チンギスの八白宮を維持するヤムタトのなかで、誰が貝子貴殿のところから報告したのか。これらの人物の名前、ならびに10盟諸旗から（人員を）派遣したという档冊をそれぞれ写して飛速にて届けてくるように。日々を遅延させてはならない。

これゆえに送る。

道光19年冬の最初の月（10月）の2日

(Činggis Qayan-u Naiman Čayan Ordu 1998: 115-116)。

9. Čiyülyan-u terigün-eče Činggis-un Gilügen Bayatur-un qoyiči üy-e-yin ür-e ači Yümdorji nar-un yumudal-i sidbürilen sidkejü medegülkü tuqai Jiyün Wang-un yamun-du šayardaŷulun yabuŷuluysan bičig.

wang-du ilegebe:

tusiyan yabuylju qurdubčilan qariyu bičig iregülkü-yin učir.

dangsan-a bayiçayabasu Törü Gereltü-yin arba yisüdüger on-u namur-un terigün sar-a-yin sin-e-yin qoyar. Kiyen Čing Men-dü yabuqu Silin Fool-un Čiyulyan-u Sönid Jegün jasay törü-yin jiyün wang qoyar jerge nemegsen Čewengjab-un yajar-ača kürjü iregsen Činggis Qayan Qar-a Sülde-yin emün-e čisun uuyuqu Sönid-ün Gilügen Bayatur-un ači ür-e Bayatur Yümdorji nar-un jaýalduysan nigen kereg-i kergin sidkejü neyilegülün saýulyaysan yabudal-yi qoyisi bičig küngen iregülü-e kemen kürjü iregsen üjügür-tü učir-i yarıyan yabuylju Bayatur Yümdorji nar-ača öčig abju bayiçayaqu-du beldkegsen-dü temdeglejüki: daray-a-bar čiyulyan-u daruy-a jasay beyise minu bey-e sinelekü-yin jisiy-a-bar neyislel qotan-a odqu çay-tu mönügen Silin Fool-un Čiyulyan-u daruy-a Sönid-ün jiyün wang Čewengjab-un yajar-ača ene kereg-yi şayardaýulun ulamjilan medegülkü-yi beledkejü kelekü inü

Bayatur Yümdorji nar-i man-u yajar oytu taniqu ču ügei. yaçčakü Nayiraltu Töb-ün qoyaduýar on-u jun-u dumdadu sar-a-yin arban-a Ordus jiyün wang Rasibaljuur nar čöm Sönid-ün Gölügen Bayatur-un ači ür-e Norbu Darqan Bayatur-tu kürtel-e boyda altan niýur-tu sülde-yin emün-e küčün-iyen jidküjü yabuysan erkim kereg-ün elči ner ulay-a sigüsü öggül ügei yabutuýai kemen bayiýuluysan tamayatu bičig büküi-yin tula teyin kü učir-i yarıyan yabuyluysan bölüge:

ene inü üneger Ordus Wang-un Qosiyun-u kümün bolbal Nayiraltu Töb-ün qoyaduýar on-du qariyatu wang Rasibaljuur yayun-u učir-tu Sönid Gölügen Bayatur-un ür-e mön kemen bičig bariýuluysan ači qariyu bičig-i şayardaýulqu-yin učir. tan-u qosiyun-u tayiji jakiruyçi janggin Batumöngke-yi iregüljü asaýubasu ene kereg-i čiyulyan-u daruy-a-yin yajar-ača ulamjilan yeke juryan-a medegülbesü čiyulyan neyilejü sidkekü boluyad öčüken qosiyun-i erükedegülün (ürügdegülün) jobayaqu-yi ügei bolýan čidaqu ügei: oldaqul-a ey-e nayir-un dotur-a sidkejü yeke juryan-a medegülkü-yi joýsuyaqu ajiyamu kemegsen ba basa batulaqu bičig bariýsan-u dotur-a uridu tusiyal-un da nar jinung-ud tusiyaysan tamayatu bičig-ün yosuyar altan sülde-yin tayily-a-yin kereg-tü jidkün yabuylqu-ača busu öger-e alban tataly-a tesgekü yabudal ügei kemen batulan medegüljüki: eyimü-yin tula čiyulyan-u daruy-a minu bey-e jakiýsan anu

qariyatu Wang-un Qosiyun-ača Yümdorji nar-tu qadaýalayuluysan čerig-ün morin temegen-

i tatan abču Qar-a Sülde-yin emün-e čisun uuqu kereg-i uul wang Rasibaljuur-un bariyuluysan bičig-ün yosuɣar daɣaju yabutuɣai: Yümdorji nar-ača Jiyün Wang-un Qosiyun-u tusalayči nar teskekü alban öčüken čü abuyšan ügei-yin tula kelečkekü yabudal ügei bolɣasuɣai: eyin kü sidkejü daɣusqayšan yabudal-yi sinelekü-yin jisiy-a-bar dökügerjü qoyisi nutuy-tu kürügsen čay-tu alban-u tamayatu bičig-iyer medegülkü yabudal-i qamutuda yaryan Sönid wang-un yamun-a yabuyluysan-i dangsan-du temdeglejüki: eyimü-yin tula bičig kürümegeče tusalayči tayiji nar tan-u yajar bayičayan üjeju Yümdorji nar-tu büküi čerig alban-u beledkel morin temege-yi tatan abju öger-e qadaɣalayulqu ba basa Nayiraltu Töb-ün qoyaduɣar on-du tan-u qariyatu jasaɣ wang Rasibaljuur-un tusiyaɣsan bičig-ün yosuɣar alban jüil-i tusqal ügei ɣayčakü Qar-a Sülde-yin emün-e qoni imay-a-yin čisun uuqu kereg-i sidkegültügei: ɣurban jil nigen uday-a er-e tögelkü čay-tu mön kü uy yosuɣar bičigeljü yabuqu-yi medetügei kemen yabuylu-ača öger-e qariyatu tusalayči tayiji nar daɣaju sidkekü tamayatu küsen batulaqu bičig ɣaryaju erke ügei ene qabur-un segül sar-a-yin qorin tabun-u dotur-a yekeken tusiyal-un tüsimel-dü tusiyan čiyulɣan-u daruy-a man-u yajar medegülür-e iregtün jöričebesü ülü bolumui. egün-ü tula tusiyan ilegebe: Törü Gereltü-yin qoriduɣar on-u qabur-un segül sar-a-yin arban nigen-e:

〔訳〕 盟長から、チングスのグルーン・バートルの後裔ユムドルジらが不服を申したてた件を処理し報告するため、郡王（旗）の衙門に送った催促の文書。

王に知らせる。

命じて送り、迅速に返信を届けてもらう件。

档冊を調べたところ、道光19年秋の最初の月（7月）の2日に、乾清門行走シリ  
ンゴル盟スニト左（旗）札薩克多羅郡王二次加級チェウエンジャブから届いた（文  
書に）、チングス・ハーンの黒いスウルデの御前にて鮮血を飲む、スニト部のグルー  
ン・バートルの子孫、バートル・ユムドルジらが上告した件を処理し、（彼らを他の  
ダルハトたちと）合流させた件を文書にて知らせるよう、と書いてあった。最初、本  
件を知らせ、ユムドルジらから証言を取り、調査にそなえていたことは、档冊に記録  
されている。

その後、盟長札薩克貝子の私が新年朝賀の年班で京師に赴いた際に、このほどシリ  
ンゴル盟盟長スニトの郡王チェウエンジャブのところで本件を催促し、さらに（理藩  
院等）に報告しようとしている（ことが分かった）。いわく、バートル・ユムドルジ

らをわれわれはまったく知らなかった。ただし雍正2年夏の仲月（5月）の10日に、オルドスの郡王ラシバルジョルらがそろって、スニト部のギルーン・バートルの子孫がノルブ・ダルハン・バートルの代に至るまで、「輝かしい聖なるスウルデの御前にて尽力してきた尊事の使者たちは、永遠に馱馬と糧食を免除せよ」という旨の印璽つきの文書を渡していることから、本件を（われわれが）受理したのである。もし彼らが本当にオルドスの郡王旗の人間であったならば、雍正2年に王ラシバルジョルが何ゆえにまたスニト部のギルーン・バートルの子孫である、との文書を出していたのであろう、（といわれた）。

ここで返信を催促すること。貴旗の管旗章京バトムンクを呼んできてたずねたところ、「このことをもし（シリングゴル盟）盟長のところからさらに理藩院に報告したら、集会をひらいて合同審理することになり、微小な我が旗を苦しめないことはないだろう。願うのは平和に処理し、理藩院への報告を中止するようお願い申しあげる」といつてきた。また、「提出した証文のなかに、前任の盟長や歴代ジノンらが発行した印璽つき文書のとおり、黄金スウルデの祭祀に専念させるほか、一切のアルバを徴収しない」と保証していった。

以上のことから、盟長たる私が以下のように決定した。所管する郡王旗はユムドルジらに放牧を委託していた軍馬やラクダを中止するように。黒いスウルデの御前にて血を飲むことは、先王ラシバルジョルが出した信任状どおりにしたがうように。ユムドルジから郡王旗の協理タイジらが租税を少しも取らなかったため、追求しないことにするように。このように処理し終えたことを朝賀の年班を終えて故郷に帰った時に、正式の印璽つき文書を出してスニト王の衙門に報告すると同時に档冊にも記録するように。したがって文書が届き次第、協理タイジ貴殿らのところから調べてみて、ユムドルジらのところにある軍務用の馬やラクダを回収して他人に管理させるように。また、雍正2年に貴旗の札薩克<sup>ジャサク</sup>、王ラシバルジョルが出した文書どおり、アルバ等を徴収せずに、もっぱら黒いスウルデの御前にて羊や山羊の血を飲む役に徹するように。3年に一度比丁を行う時も本来の規定どおり書かせるように。このように送ると同時に、所管協理タイジらが上記決定にしたがうという旨の印璽つきの文書を出して、何卒今年春の最後の月（3月）の25日までに高位の官員に渡し、盟長たる我がところに報告するように。背き妨げてはならない。これゆえに命じ送る。

道光20年春の最後の月（3月）の11日

(*Činggis Qayan-u Naiman Čayan Ordu* 1998: 116-117)。

10. Čiyulyan-u terigün Činggis-ün Gilügen Bayatur-un qoyiči üy-e-yin ür-e ači Yümdorji nar-un yumudal-i sidken Jiyün Wang-un yamun-a yabuyluysan bičig.

wang tan-a ilegebe:

dayaju sidkekü yabuyluq-yin učir.

dangsan-du bayičayabasu Törü Gereltü-yin arban yisüdüger on-u namur-un terigün sar-a-yin sin-e-yin qoyar-a Silin Fool-un Čiyulyan-u daruγ-a. Sönid-ün Jegün jasay törü-yin jiyün wang Čewengjab-un yajar-ača kürjü iregsen Bayatur Yümdorji nar Jiyün Wang-un Qosiyun-u jasay tölügelegči nar alban teskejü jobayan Činggis Qayan-u Qar-a Sülde-yin tayily-a-yin kereg-yi osuldayulqu-du kürgebe kemen jayalduysan nigen kereg-yi čiyulyan-u daruγ-a man-u yajar jarlan iregüljü asayubasu tusalayči tayiji nar tan-u medegülkü inü

Bayatur Yümdorji bolbasu man-u qariyatu jasay törü-yin jiyün wang-du aysan Babudorji Tümenjiryal nar-un büküi čay-ača inerü man-u qosiyun-u janggi Rabjai. Bayajiqu nar-un sumun-u tayiji Tümenyelger Rasinim-a nar-un qariyatu qamjily-a-yin albatu-du bui amui: eden-ü beyes-tü arban yurban jil-dü nigen uday-a Činggis Qayan-u Qar-a Sülde-yin emün-e tayily-a-yin qoni imayan-u čisun uuyquq alban bölüge: egün-ü uy učir-i sayi tusiyal-un tusalayči tayiji nar bida medekü ügei uridu tusiyal-un jiyün wang aysan Babudorji. Tümenjiryal nar-un üy-e-dü Bayatur Yümdorji nar teskekü alban-iyar jobayaba kemen uridu tusiyal-un čiyulyan-u daruγ-a beyile Sodnamrabjayigendün-dü medegüljü mön kü čiyulyan-u daruγ-a-yin oyir-a-yi anu üjejü jasay-un terigün jerge tayiji Serengdejid-tü tusiyan sidkegülkü čay-tu teyin kü jasay-un yajar-ača Yümdorji nar-i jil büri yurban lang alban-i ögjü yabutuγai kemen jakiysan-i dayaju abju öčüken čü öggügsen ügei inü ünün yerü öger-e jüil-ün teskekü alban-iyar jobayaysan učir ügei kemen medegüljüki:

daray-a-bar Bayatur Yümdorji Nayantai nar-i jarlan iregüljü asayubasu qamtu medegülkü inü öčüken bida nar janggi Rabjai. Bayajiqu nar-un sumun-u tayiji Tümenyelger Rasinim-a nar-un qariyatu qamjily-a-yin albatu-du bui amui man-u beyes-tü arban yurban jil-dü nigen uday-a Činggis Qayan-u Qar-a Sülde-yin emün-e tayily-a-yin qoni imay-a-yin čisun uuyquq alban-i dayaju yabumui: teyin atal-a qariyatu wang Babudorji-yin čay-tu uday-a daray-a teskekü alban tungyayaju kögen abuysan učir-tu urida tusiyal-un čiyulyan-u daruγ-a beyil-e-dü medegülkü-yin čay-tu jasay-un terigün jerge-yin tayiji Serengdejid-tü tusiyan sidkegüljü jil büri yurban lang alban ögjü yabutuγai kemen jakiysan yosuyar nekeki bolbaču yadayu-yin tula öčüken čü öggügsen ügei inü ünün: öčüken kümün ner jiči kögegen abijju bolγujai kemen

emiyen sanaju Nayiraltu Töb-ün qoyaduɣar on-du tere tuqai-yin qariyatu wang Rasibaljuur-un bey-e Norbu Darqan Baɣatur-tu tusiyaysan tamayatu bičig-i abju qariyatu čiyulyan-u daruɣ-a jasaɣ jinung-ud-tu üjegülün medegüljü abuɣsan-u daruɣ-a bičig-üd-i qamtu abju Silin Fool-un Čiyulyan-u daruɣ-a jasaɣ jiyün wang tan-a tusalayči tayiji Göngčuy nar teskekü alban tulyaju jobayabai kemen jokiyar jayalduɣsan anu ünem kemen medegüljüki:

darui da yamun-u er-e tügelekü dangsan-du bayičayabasu Tngri Tedkügsen-ü arban jiryuduɣar on-ača Törü Gereltü-yin arban tabuduɣar on kürtel-e yurban jil nige uday-a er-e tügelejü yeke juryan-a ergün medegülügsen dangsan-du Yümdorji nar üy-e ularin janggi Rabjai sumun-u tayiji Tümenelger-ün qariyatu albatu-du yabuɣsan anu todurqai. bayičayabasu Nayiraltu Töb-ün qoyaduɣar on-du tere tuqai-yin qariyatu wang Rasibaljuur. Baɣatur Yümdorji-yin elünče ebüge Norbu Darqan Baɣatur-tu Činggis Qayan-u Qar-a Sülde-yin emün-e čisun uuyqu Sönid-ün Gölügen Baɣatur-un ür-e mön kemen uday-a daruɣ-a tamayatu bičig tusiyaysan qoyin-a tan-u ɣajar-tu jasaɣ törü-yin jiyün wang Babudorji nar alban tungɣayaju körüngge-yin mal kögegen abuɣsan anu ülü neyilečekü bolbaču nigente ebedčin-iyer önggeregsen tula kelelčekü yabudal ügei bolɣasuyai: odu tusalayči tayiji nar tan-u beyes čiyulyan-u daruɣ-a jasaɣ nar-un sidkegsen-i dayaju jil tutum toytaɣsan alban-i nekebeču-ber oytu quriyan abju jaruɣsan jüil ügei-yin tula jiči kelelčekü yabudal ügei bolɣay-a: Baɣatur Yümdorji nar jüi inü wang Rasibaljuur-un jakiju tusiyaysan daruɣ-a bičig-i ergün jayaldubasu jokimui: qarın tusalayči tayiji Göngčuy nar teskekü alban-iyar jobayabai kemen qudal jokin jayalduɣsan anu ülü neyilečekü-yin tula jüi ügei yabuɣsan-i qauli yosuɣar sidkejü dayusqasuyai: mön kü Yümdorji Nayantai nar-i qariyatu qosiyun-u er-e-yin ner-e tögelekü dangsan-du büküi ijayur-un jirum yosuɣar dayaju sidkegülsügei: jiči Baɣatur Yümdorji Qosiyuči Nayantai nar mön kü Rasibaljuur-un toytaɣan jakiju tusiyaysan daruɣ-a bičig-un yosuɣar alban ba ulay-a sigüsü jüil-i oytu öggül ügei egüride Činggis Qayan-u Qar-a Sülde-yin emün-e čisun uuyqu tayily-a-yin alban-yi dayaju yabuɣulsuyai eyin kü sidkejü dayusqasɣan yabudal-i tusalayči tayiji nar tan-a ɣajar-ača duratayiy-a küsen batulaqu tamayatu bičig ɣaryaju medegülügsen-i dangsan-du temdeglegsen yabudal-i qamutuda tusiyar yabuɣulba: kürümegče bičig-ün dotur-a bayičayan üjejü dayaju sidkekü yabudal-i medetügei kemen egün-u tula tusiyar ilegebe:

Törü Gereltü-yin qoriduɣar on-u namur-un terigün sar-a-yin qorin tabun-a:

〔訳〕 盟長から、チンギスのギルーン・バートルの後裔ユムドルジらの不服申したてを処理するため、郡王旗衙門に出した文書。

王に送る。

（盟長の決定に）したがって処理するために送る件。档冊を調べたところ、道光19年秋の最初の月（7月）の2日にシリングル盟盟長、スニト東（旗）札薩克多羅郡王チュエウエンジャブの衙門から届いた（文書）に、バートル・ユムドルジらが郡王旗の代表たる札薩克らに租税で苦しめられて、チンギス・ハーンの黒いスウルデの祭祀に支障が出るまでに至ったことを（上告してきた）、と書いてあった。上告した件について、盟長たる私のところから通知を出して呼んで来てたずねると、協理タイジ貴殿らは次のように報告した。

バートル・ユムドルジらが我が旗札薩克多羅郡王、故バウードルジ、トゥメンジラガルらが在位の時から現在まで、我が旗の章京ラブジャイ、バヤジホラのソムのタイジのトゥメンデレゲル、ラシニマらに属する随丁たるアルバトであった。彼らには13年に一度チンギス・ハーンの黒いスウルデの御前にて、祭祀用の羊と山羊の血を飲むアルバ（義務）があった。本件のもともとの原因については、現在の協理タイジのわれわれは知らない。先代郡王で故バウードルジ、トゥメンジラガルらの時に、バートル・ユムドルジらが租税で苦しめられたとあって、前任の盟長貝勒ソノムラブジャイゲンドゥンに報告した。盟長は近いことを考えて、札薩克一等タイジのセレンデジドに渡して処理してもらった。その時、札薩克のところから（出た）ユムドルジらは毎年（銀）3両のアルバを出すようにとの決定を受け入れたものの、少しも納入しなかったのは事実である。ほかに租税で苦しめたことはない。

と報告した。その後またバートル・ユムドルジとナヤンタイらを呼んで来てたずねたところ、そろって次のように報告した。

鄙少なる私どもは章京ラブジャイ、バヤジホラのソム内のタイジ、トゥメンデレゲル、ラシニマらに属する随丁たるアルバトである。われわれには13年に一度チンギス・ハーンの黒いスウルデの御前にて、祭祀用の羊と山羊の血を飲むアルバがあった。そうしている時、所管の王バウードルジの時、度々租税を課され、徴収されたため、前任の盟長貝勒に報告した。（盟長は）札薩克一等タイジのセレンデジドに渡して処理させた。毎年（銀）3両のアルバを納入せよ、との決定で（またも旗から）納付を求められたが、貧乏のため少しも払っていないのは事実である。鄙少な私どもはいずれまた租税納付を追及されるだろうと恐らくなって、雍正2年に当時の王ラシバルジョルがノルブ・ダルハン・バートルに渡した印璽つきの文書をもって、所管盟長札薩克ジノンらに見せて報告した。つづいてまたそれらの文書を携えてシリングル盟盟長で札薩克郡王殿に協理タイジのグンチュクラが租税で苦しめているとあって訴えたことも事実である。

と報告した。その後盟長衙門にある比丁档冊を調べたところ、乾隆16年から道光15年まで3年に一度比丁を行い理藩院に報告していた档冊にも、ユムドルジらが代々章京ラブジャイのソムのタイジ、トゥメンデレゲルの属民アルバであったことは明らかである。

調べたところ、雍正2年に当時の所管王ラシバルジョルがバートル・ユムドルジの曾祖父ノルブ・ダルハン・バートルをチンギス・ハーンの黒いスウルデの御前にて血を飲むスニト部のギルーン・バートルの子孫である、と（認めて）度々印璽つき文書を発行していた。その後、貴旗の札薩克<sup>ジャサク</sup>多羅郡王バウドルジらがアルバを課して、生活基盤たる家畜を徴収したのは（法に）合わない。ただし、（本人が）すでに病故しているため、追求しないことにしよう。

現在の協理タイジらは盟長らの決定にしたがって、所定のアルバを催促したことがあっても、実際に徴収して使ったことがないため、同じく追求しないことにしよう。

バートル・ユムドルジらは王ラシバルジョルが出した文書を見せて上告すれば正しかったが、協理タイジのグンチュクらが租税で苦しめた、と嘘をいって訴えたのは、（法に）合わないため、その違法行為を法律にもとづいて処理するように。また、ユムドルジとナヤンタイらを所管旗内の比丁档冊内にある以前の規定どおりに処理するように。

バートル・ユムドルジと先鋒ナヤンタイらは、（先王）ラシバルジョルが決定し発行した文書どおりに、アルバや駄馬、それに丸煮シユースを一切納付する必要がない。もっぱらチンギス・ハーンの黒いスウルデの御前にて血を飲む儀礼というアルバに専念するように。

このように処理し終えたことについて、協理タイジら貴殿のところから賛同する旨の印璽つき文書を発行し届けてきたことを档冊に記録した。このこともあわせて伝えて送る。届き次第文書の内容を調べてみて、したがうべきことを知るように。これゆえに送る。

道光20年秋の最初の月（7月）の25日

(*Činggis Qayan-u Naiman Čayan Ordu* 1998: 118-119)。

11. Yeke Juu-yin Čiyulyan-u terigün-eče Činggis-un Gilügen Bayatur-un qoyiči üy-e-yin ür-e ači Yümdorji nar-un yumudal-i sidken sidbürilegsen-iyen Silin Fool-un Čiyulyan-u terigün Sönid Jegün Qosiyun-u jiyün wang Čewengjab-tu medegdegsen bičig.

Kiyen Čing Men-dü yabuqu Silin Ɠool-un Čiyulyan-u daruy-a Sönid-ün jegün törü-yin jiyün wang qoyar jerge nemegsen Čewengjab tan-a ilegebe:  
qoyisi medegülün yabuyulqu učir.

Törü Gereltü-yin arba yisüdüger on-u namur-un terigün sar-a-yin sin-e-yin qoyar. erkim čiyulyan-u daruy-a jasay jiyün wang tan-u yajar-ača kürjü iregsen bičig-tü man-u Silin Ɠool-un Čiyulyan-u teyimü kemen ilegebe: eyimü-yin tula man-u čiyulyan-u jasay törü-yin jiyün wang Erkimbilig-ün tamay-a-yi qamiyaruşsan tusalayči tayiji Göngčüy. qosiyun-u kereg-yi tusalan sidkegči tusalayči tayiji Göngčuydorji nar čiyulyan-u daruy-a man-u yajar jarlan iregüljü asayubasu medegülkü inü

Bayatur Yümdorji bolbasu man-u qariyatu jasay törü-yin jiyün wang-du aşsan Babudorji Tümenjiryal-un бүкүі чай-ача inerü man-u qosiyun-u janggi Rabjai. Bayajiqu nar-un sumun-u tayiji Rasinim-a. Tümenelger-ün qariyatu qamjily-a-yin albatu-du бүкүі amui: eden-ü beyes-tü arban yurban jil nigen uday-a Činggis Qayan-u Qar-a Sülde-yin emün-e tayily-a-yin qoni imay-a-yin čisun uuyquq alban bölüge: egün-ü uy učir-i sayi tusiyal-un tusalayči tayiji nar bida medekü ügei. man-u uridu tusiyal-un qariyatu jasay jiyün wang aşsan Babudorji. Tümenjiryal nar-un üy-e-dü Bayatur Yümdorji nar teskekü alban-iyar jobayabai kemen uridu tusiyal-un čiyulyan-u daruy-a beyile Sodnamrabjayigendün-dü medegüljü mön kü čiyulyan-u daruy-a-yin yajar-ača oyir-a-yi üejü jasay-un terigün jerge tayiji Serengdejid-tü tusiyan sidkegüljü aşsan чай-tu teyin kü jasay-un yajar-ača Yümdorji nar-yi jil büri yurban lang alban-i ögju yabutuıai kemen jakişsan-i dayaju abju öčüken čü öggügsen ügei inü ünener yerü öger-e jüil-ün teskekü alban-iyar jobayaşsan učir ügei kemen medegüljüküi:

daray-a-bar Bayatur Yümdorji Nayantai nar-i jarlan iregüljü asayubasu qamtu medegülkü inü öčüken bidan-du arban yurban jil-dü nigen uday-a Činggis Qayan-u Qar-a Sülde-yin emün-e tayily-a-yin qoni imayan-u čisun uuyquq alban-i dayaju yabumui: teyin atal-a qariyatu wang Babudorji-yin бүкүі чай-tu uday-a daray-a teskekü alban tusqaju kögen abuşsan učir-tu urida tusiyal-un čiyulyan-u daruy-a beyil-e-dü medegülkü-yin чай-tu jasay-un terigün jerge tayiji Serengdejid-tü tusiyan sidkegüljü jil büri yurban lang alban ögju yabutuıai kemen jakişsan yosuyar nekekü bolbaču yadaıu-yin tula öčüken čü öggügsen ügei inü ünener öčüken kümün ner jiči kögegen abčiju bolıujai kemen emiyen sanaju Nayiraltu Töb-ün qoyaduıar on-du tere tuqai-yin qariyatu wang Rasibaljuur-un bey-e Norbu Darqan Bayatur-tu tusiıaşsan

tamaγatu bičig-i abčiju qariyatu čiyulγan-u daruγ-a jasay jinung-ud-tu üjegülün medegüljü abuγsan-u daruγ-a bičig-üd-i qamtu abju Silin Fool-un Čiyulγan-u daruγ-a jasay jiyün wang tan-a tusalayči tayiji Göngčuy nar teskekü alban tusqaju jobayabai kemen demei jokiyān jaγalduγsan anu ünēn kemen medegüljüki:

egün-dü bayičayabasū Nayiraltu Töb-ün qoyaduγar on-du tere tuqai-yin jasay törü-yin jiyün wang Rasibaljuur. Baγatur Yümdorji-yin elünče ebüge Norbu Darqan Baγatur-tu Činggis Qayan-u Qar-a Sülde-yin emün-e čisun uuyuqu Sönid-ün Gölügen Baγatur-un ür-e mön kemen tamaγatu bičig tusiyaysan-u qoyin-a jasay törü-yin jiyün wang Babudorji nar alban tusqaju körünggen mal-i kögegen abuγsan anu ülü neyilelčeki bolbaču nigente ebedčin-iyer nasu önggeregsen tula kelelčeki yabudal ügei bolγasuyai. tusalayči tayiji Göngčuy Göngčuydorji nar čiyulγan-u daruγ-a jasay nar-i sidkegsen-i dayaju jil tutum toγtayaysan alban-i Yümdorji nar-ača oytu quriyan abuγsan jüil ügei-yin tula jiči kelelčeki yabudal ügei bolγay-a. Baγatur Yümdorji nar jüi inü wang Rasibaljuur-un jakiju tusiyaysan daruγ-a bičig-i ergün jaγaldubasu jokimui qarin tusalayči tayiji Göngčuy nar teskekü alban-iyar jobayabai kemen qudal jokiyān jaγalduγsan anu ülü neyilelčeki-yin tula jüi ügei yabuγsan qauli yosuγar sidkejü dayusqasuyai: Baγatur Yümdorji Qosiyüči Nayantai nar-i mön kü wang Rasibaljuur-un tusiyaysan tamaγatu bičig-ün yosuγar alban-u ulay-a sigüsü öggül ügei egüride Činggis Qayan-u emün-e čisun uuyuqu tayilγ-a-yin alban-yi dayaju yabuγulsuyai.eyin kü sidkejü dayusqaysan yabudal-yi erkim čiyulγan-u daruγ-a jasay wang tan-a medegülün egün-ü tula ilegebe:

Törü Gereltü-yin qoriduγar on-u namur-un terigün sar-a-yin qori yisün-e:

〔訳〕 イケ・ジョー盟盟長から、チンギスのギルーン・バトルの後裔ユムドルジらの不服申したてを処理した結果をシリングル盟盟長スニト東旗の郡王チェウエンジャブに知らせた文書。

乾清門行走シリングル盟盟長スニト左（旗）の多羅郡王二次加級チェウエンジャブ殿に呈する。

伝えて送る件。

道光19年秋の最初の月（7月）の2日に、貴盟盟長<sup>ジャサク</sup>札薩克郡王貴殿のところから届いた文書のなかに、「我がシリングル盟の……云々」とあった。そのため、我が盟

楊 儀礼が維持する集団の歴史的記憶

の札薩克多羅郡王エルキムベレクの印務を署理する協理タイジのグンチュク、協理旗務タイジのグンチョクドルジらを盟長たる私のところに呼んできてたずねたところ、次のように報告した。

バートル・ユムドルジらが我が旗札薩克多羅郡王、故パウードルジ、トゥメンジラガルらが在位の時から現在まで、我が旗の章京ラブジャイ、バヤジホラのソムのタイジのラシニマ、トゥメンデレゲルらに属する随丁たるアルバトであった。彼らには13年に一度チンギス・ハーンの黒いスウルデの御前にて、祭祀用の羊と山羊の血を飲むアルバがあった。本件のもともとの原因については、現在の協理タイジのわれわれは知らない。先代郡王で故パウードルジとトゥメンジラガルらの時に、バートル・ユムドルジらが租税で苦しめられたといて、前任の盟長貝勒ソムラブジャイゲドゥンに報告した。盟長は近いことを考えて、札薩克一等タイジのセレンデジドに渡して処理してもらった。その時、札薩克のところから（出た）ユムドルジらは毎年（銀）3両のアルバを出すようにとの決定を受け入れたものの、少しも納入しなかったのは事実である。ほかに租税で苦しめたことはない。

と報告した。その後またバートル・ユムドルジとナヤンタイら呼んできてたずねたところ、そろって次のように報告した。

鄙少なる私どもには13年に一度チンギス・ハーンの黒いスウルデの御前にて、祭祀用の羊と山羊の血を飲むアルバがあった。そうしている時、所管の王パウードルジの時、度々租税を課され、徴収されたため、前任の盟長貝勒に報告した。（盟長は）札薩克一等タイジのセレンデジドに渡して処理させた。毎年（銀）3両のアルバを納入せよ、との決定で（またも旗から）納付を求められたが、貧乏のため少しも払っていないのは事実である。鄙少なる私どもはいずれまた租税納付を追及されるだろうと恐らくなって、雍正2年に当時の王ラシバルジョルがノルブ・ダルハン・バートルに渡した印璽つきの文書をもって、所管盟長札薩克ジノンらに見せて報告した。つづいてまたそれらの文書を携えてシリングル盟盟長で札薩克郡王殿に協理タイジのグンチュクらが租税で苦しめているといて訴えたことも事実である。

と報告した。そこで調べたところ、雍正2年に当時の札薩克多羅郡王ラシバルジョルが、バートル・ユムドルジの曾祖父ノルブ・ダルハン・バートルに、チンギス・ハーンの黒いスウルデの御前にて血を飲むスイト部のギルーン・バートルの子孫であると（認めて）、印璽つきの文書を発行していた。その後、札薩克多羅郡王パウードルジらがアルバを課し、生活基盤である家畜を徴収したのは理にかなわない。ただし、（本人が）すでに病故しているため、追求しないことにさせていただきたい。協理タイジのグンチュク、グンチョクドルジらは盟長札薩克らの決定にしたがって、毎年所定のアルバをユムドルジらから（徴収しようとしたが）、まったくとれなかったため、追求しないことにしたい。

バートル・ユムドルジらに関しては、王ラシバルジョルの発行した印璽つきの文書を呈して上告すれば正しかったが、協理タイジのゲンチュクらが租税で苦しめていると嘘をいって訴えたのは法に合わないため、(その)違法行為を法にもとづいて処理させていただきたい。

バートル・ユムドルジと先鋒ナヤンタイらを、王ラシバルジョルが発行した印璽つき文書どおりに、アルパとしての馱馬や丸煮シューズを納付せずに、今後ともチングス・ハーンの御前にて血を飲むという祭祀のアルパに専念させることにしたい。

このように処理し終えたことを貴盟の盟長札薩克<sup>ジャサク</sup>王殿に報告する。  
これゆえに送る。

道光20年秋の最初の月(7月)の29日

(*Činggis Qayan-u Naiman Čayan Ordu* 1998: 119-121)。

## 12. Dalad-tu ilegebe:

ulamjilan kürgegülkü-yin učir.

man-u čiyulyan-u jiyün wang Činggis Qayan-u Naiman Čayan Ordun-yi tayiqu Darqad qoyurundu-ban Yümdorji nar-i buliyaldun jayalduγsan nigen kereg-i čiyulyan-u daruγ-a man-u yajar-ača Kiyen Čing Men-dü yabuqu Silin Fool-un Čiyulyan-u daruγ-a Jegün Sönid-ün jasay törü-yin jiyün wang Čewengjab-un yamun-a yabuγulqu duγtui bičig nige-yi tusqai tamayatu bičig dayayulun kürgegülbe: kürümeγče beyise tan-u yajar bičig-ün doturaki-yi bayičayan üjeju Ulayančab-un Čiyulyan-u daruγ-a-yin yajar yabuγulju ulamjilan Silin Fool-un Čiyulyan-u daruγ-a-yin Sönid wang-un yamun-a kürgegülün kergin ulamjilan kürgegülügen yabudal-i qoyisi qariyu tamayatu bičig kürgen iregülsügei egün-ü tula tusiyan ilegebe:

Törü Gereltü-yin qoriduγar on-u namur-un terigün sar-a-yin qori yisün-e.

〔訳〕ダラト旗に送る。

転送してもらう件。

我が盟の郡王とチングス・ハーンの八白宮をまつるダルハトとのあいだで、ユムドルジらをめぐって上告した件について、盟長たる私のところから乾清門行走、シリングル盟盟長、東スニトの札薩克<sup>ジャサク</sup>多羅郡王チェウエンジャブの衙門に送る封筒つきの文書ひとつに印璽つき文書を添付して送り届ける。届き次第、貝子貴殿のところまで文書

の内容を調べてみて、ウラーンチャブ盟盟長のところへ送り、さらにシリングル盟盟長スニト王の衙門に送り届けるように。このように転送した経緯について、印璽つきの返信を送ってくるように。これゆえに命じて送る。

道光 20 年秋の最初の月（7 月）の 29 日  
(*Činggis Qayan-u Naiman Čayan Ordu* 1998: 121)。

## 注

- 1) ギルーンに対し、ギルグーダイあるいはギョルグダイは愛称である。モンゴル語の場合、男子の名前の後ろに「ダイ」や「タイ」がつくと、愛称になる。
- 2) ここでいう乳酒とはアルジャ (arja) とホールジャ (qourja) の 2 種類である。アルジャは最初の蒸留で得た酒で、ホールジャは 2 度蒸留後のものであり、度数が高い。
- 3) 同じくオルドス地域にまつられているアラク・スウルデにも「血祭」がある。アラク・スウルデの血祭は「13 年に一度の寅年」におこなわれる。その際、アラク・スウルデのバートル爵の祭祀者は右腕を露出して片足跳びをし、血を啜り飲む (楊 2001: 105-106)。両スウルデのバートルの腕の露出形式が左右逆になっているのが特徴的である。
- 4) 別の『金書』では *Quyildar* となっている (楊 1998: 107)。
- 5) ハイシツヒはさきわめてユニークな『十善福白史』を公表している。その『十善福白史』の冒頭には他の写本にない内容、つまり八白宮祭祀に関する法規が明記されている (Heissig 1959b: 3-4; 17-20)。サガスターはハイシツヒの研究に依拠しなから『十善福白史』には 2 つの系統がある、と指摘している。そのうちの一種は冒頭にチンギス・ハーン祭祀に関する法規等があるのに対し、かような内容のない写本もあるという (Sagarter 1976: 53)。井上はサガスターの分類に賛同しつつ、祭祀法規のある写本はチンギス・ハーン祭祀と関わりを持つ人物による編集であろうと推察している (井上 1991: 71-83; 1992: 1-24)。厳密に言えば、冒頭に祭祀法規があるか否かはともかく、『十善福白史』の本文中にチンギス・ハーン祭祀の「四季の大宴」に関する詳細な記述があることから、同書とチンギス・ハーン祭祀との関連はもともとさきわめて強かったと認めなければならない。
- 6) 現在の軍神黒いスウルデ祭祀における編陣から考えると、『蒙古源流』が記すギルーン・バートルとマンガート部のホイルダルの役割も浮かびあがってくる。中央アジア遠征にしても、アムバガイ・ハーン制圧にしても、2 人はモンゴル軍の先鋒をつとめていたと推察できよう。
- 7) セールイス師は発表当時、文書が八白宮の『金書』であることを正しく認識しておらず、八白宮祭祀そのものを観察する機会もなかったためか、随所に誤読に起因するミスがある。
- 8) サインジャラガルが公表した「祈祷用ヒツジのトイ書」(Sayinjiryal 2001: 213-215) を初歩的に検討した結果、その内容は私が 1998 に『『金書』研究への序説』のなかで紹介し (楊 1998: 29)、その後ホルチャバートルとともに公開した「聖主の祝詞および尊き食べ物の作法の書」のなかの一部 (Qurčabayatur and Čoytu 2001: 43-61) とほぼ同質な内容であることが判明した。
- 9) 現在のオルドスでも、氏族の共同墓地を「大いなる地」(yekes-ün yajar) と呼ぶ。
- 10) モンゴルの父系親族集団オボクとヤス (骨) については、私は博士学位請求論文『オルドス・モンゴル族の社会構造——ヤスの機能とその歴史の変容』のなかで詳しく論じたことがある (楊 1994)。
- 11) おそらくはタイシ (太師) のビルーンダライであろう。
- 12) Mostaert 師の初期の著作においても、より正確に現地音に近づくために、Ordus を Urdu と表記している (Mostaert 1926: 851-869)。
- 13) Barintai は恐らくユムドルジの息子 Bartai の書写ミスであろう。
- 14) この sogsiui という言葉の意味は不明である。

- 15) この省略は資料集の編集者によるものか、それともオリジナルに省略があったかは不明である。
- 16) 道光17年7月11日付けの文書(本論文のNo.1の文書)は、当時副盟長だったチャクドゥルスレンから郡王旗の協理タイジらに出されたものである。その際、「故トゥメンジラガルの印璽を守護する協理タイジ」と表現していた。恐らく当時、トゥメンジラガルの子息エルキムベレクはまだ亡父の郡王爵を継承していなかったためであろう。
- 17) No.1の文書では「盟長」となっている。その後、文書4からも分かるように、チャグドラセレンは実際には副盟長に就任しなかったため、ここでは貝子としている。
- 18) No.1の文書では「貝勒」となっている。

## 文 献

### Dahrm-a

1987 *Altan Kürdün Mingyan Kegesütü* (モンゴル文, 『金輪千輻』), 呼和浩特: 内蒙古人民出版社。

### De Rachewiltz, Igor, J. R. Krueger and B. Ulaan

1990 *Erdeni-yin Tobci: A Mongolian Chronicle of 1662*. Canberra: the Australian National University.

### Dorungy-a

1998 *Čingis Qayan-u Takil-un Sudur Orusiba* (モンゴル文, 『チンギス・ハーン祭祀の書』), 呼和浩特: 内蒙古人民出版社。

### Eldengtei and Ardajab

1986 *Mongyol-un Niγuča Tobčiyān-Seyiregüül Tayilburi* (モンゴル文, 『モンゴル秘史還原註釈』), 呼和浩特: 内蒙古人民出版社。

### エリアーデ

1970(1963) 『永遠回帰の神話』堀一郎訳, 東京: 未来社。

### Haenisch, E.

1955 *Eine Urga-Handschrift des Mongolischen Geschichtswerks von Secen Sagang (alias Sanang Secen)*. Berlin: Akademie-Verlag.

### Heissig, W.

1959a *Mongolisches Schrifttum im Linden-Museum. Tribus* 8, 39-56.

1959b *Die Familien-und Kirchengeschichtsschreibung der Mongolen I*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.

### ハイシツヒ

2000 『モンゴルの歴史と文化』田中克彦訳, 東京: 岩波書店。

### Hecken Van, J. L.

1972 *Les Princes Borjigia des Ordos Depuis Leur Soumission aux Mandchoux en 1635 Jusqu'a Leur disparation en 1951. Central Asiatic Journal* (xvi), 132-155.

### Hurcabaatur, L.

1999 *Die Divination Mit der Schafsleber bei den Ordos-Mongollen. Antoine Mostaert-C. I. C. M. Missionary and Scholar; Louvain Chinese Studies IV*, 135-144.

### 井上 治

1991 「『ツァガン・トゥーフ』の写本評価について」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』哲学史学編別冊18, 71-83。

1992 「『チャガン・テウケ』の2つの系統」『東洋学報』73(3・4), 1-24。

### Jamba

1984 *Asarayči Neretü-yin Teüke* (モンゴル文, 『アサラクチ史』) 北京: 民族出版社。

### Kesigtoγtaqu, Č.

1998 *Činggis Qayan-u Altan Tobči Ner-e-tü-yin Čadig* (モンゴル文, 「『アルタン・トブチというチンギス・ハーン伝』」), In Dorungy-a (eds.), *Činggis Qayan-u Takil-un Sudur Orusiba*, pp.1-17. 呼和浩特: 内蒙古人民出版社。

楊 儀礼が維持する集団の歴史的記憶

- 1999 Činggis Qayan-u Altan Tobči Ner-e-tü-yin Čadig-un Jokiyaydaysan Čay Üy-e-yin Tuqai (モンゴル文, 「アルタン・トブチというチンギス・ハーン伝の創作年代について」), In Kesigtoytaqu (eds.) *Mongyul-un Erten-ü Udq-a Jokiyal-un Sin-e Sudulul* pp.199-208. 呼和浩特: 内蒙古人民出版社。
- レヴィ = ストロース  
2000(1976) 『野生の思考』(大橋保夫訳), 東京: みすず書房。
- Liujinsüwe  
1981 *Arban Buyantu Nom-un Čayan Teüke* (モンゴル文, 『十善福白史』), 呼和浩特: 内蒙古人民出版社。  
2000 *Qad-un Ündüsün-ü Quriyangyui Altan Tobči* (モンゴル文, 『黄金史綱』), 呼和浩特: 内蒙古人民出版社。
- Lubsangdanjin  
1990 *Erten-ü Qad-un Ündüsülegsén Törü Yosun-u Jokiyal-i Tobčilan Quriyaysan Altan Tobči Kemekü Orusibai*. Ulaanbaatar: Ulus-un Kelel-ün Gajar.
- Mostaert, A.  
1926 Le Dialecte des Mongols Urdus (Sud). *Anthropos* XXI, 851-869.
- Narasun and Wangcüy  
1998 *Činggis Qayan-u Naiman Čayan Ordu* (モンゴル文, 『チンギス・ハーンの八白宮』), 海拉爾: 内蒙古文化出版社。
- 岡 洋樹  
2001 『清代公文書資料による内モンゴル旗社会の研究』(科学研究費補助金研究成果報告書)。
- 岡田英弘  
1993 『世界史の誕生』, 東京: 筑摩書房。  
2002 『歴史とはなにか』, 東京: 文芸春秋。
- Odunčeeğ  
1987 *Ordus Doluyun Qosiyun-u Wang-un Üy-e Jaljamji-yin Temdeglel* (モンゴル文, 「オルドス七旗札薩克の王位継承」), *Yeke Juu-yin Soyul Teüke-yin Materiyal* (4), pp.189-213.
- Öljeiyitü  
1983 *Erten-ü Mongyol-un Qad-un Ündüsün-ü Yeke Sir-a Tujuji Orusiba* (モンゴル文, 『大黃冊』), 北京: 民族出版社。
- Qurča (bilig), N.  
1990 *Darqad-un Tayisi Terigütei 'Erkim Dörben Čolas'-i Soyurqaysan ba Bayilyaju Dakiyuluysan Učir* (モンゴル文, 「ダルハトのタイシ爵をはじめとする『尊き4つの爵号』の由来とその変遷」), 『内蒙古社会科学』(蒙文版) 2, 94-105.  
1991 *Darqad-un Kereyid kemekü Obuy-un Nereyidül-ün Učir* (モンゴル文, 「ダルハトのケレイト・オボクの名称について」), 『内蒙古師範大学学报』(蒙文版) 3, 33-38.  
1994 *Erten-ü Mongyul-un Yamu Tügegekü Yosun-u Tuqai Angqan-u Sudulul* (モンゴル文, 「古代モンゴルのヤム分配に関する初歩的な考察」), 『内蒙古社会科学』(蒙文版) 3, 40-47。
- Qurčabaytur, L.  
1992(90) *Qatagin Arban Furban Atay-a Tngri-yin Tayily-a* (モンゴル文, 『ガタギン部十三天神祭』), 海拉爾: 内蒙古文化出版社。  
1999 *Zum Činggis-Qayan-Kult* (Senri Ethnological Reports 11), Osaka: National Museum of Ethnology.
- Qurčabaytur and Üjüm-e  
1991 *Mongyol-un Böge Mörgül-ün Tayily-a Takily-a-yin Suyul* (モンゴル文, 『モンゴルにおけるシャマニズム祭祀文化』), 海拉爾: 内蒙古文化出版社。
- Qurčabaytur and Čoytu (楊 海英)  
2001 *Činggis Qayan-u Altan Bičig* (モンゴル文 『チンギス・ハーンの「金書」』), 海拉爾: 内蒙古文化出版社。
- ホルチャバートル, 楊 海英  
1997 「モンゴルの祭祀用絵画について—新発見の八白宮所蔵絵画」『内陸アジア史研究』 12, 69-77。

- Sagaster, K.  
 1970 Die Bittrede des Kilügen Bayatur und der Činggis-Khan-Kult. *Mongolian Studies* (xiv), 495-505.  
 1976 *Die Weisse Geschichte (Čayan teike)*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- Sayinjiryal and Šaraldai  
 1983 *Altan Ordun-u Tayily-a* (モンゴル文, 『黄金オルドの祭祀』), 北京: 民族出版社。
- Sayinjiryal  
 1998 Sönid-ün Gilügen (モンゴル文, 「スニト部のギルーン」), 『内蒙古社会科学』(蒙文版) 6, 80-81.  
 2001 *Mongyl Takily-a* (モンゴル文, 『モンゴルの祭祀文化』), 北京: 民族出版社。
- Шастиной, Н. П.  
 1957 *Шара Туджу*. Москва: Издательство Академии Наук.
- Serruys, H.  
 1975 A Catalogue of Mongol Manuscripts from Ordos. *Journal of the American Oriental Society* (95), 191-208.  
 1982 A Dalaly-a Invocation from Ordos. *Zentralasiatische Studien* (16), 141-147.  
 1984 The Cult of Činggis-Qan: A Mongol Manuscript from Ordos. *Zentralasiatische Studien* (17), 29-62.
- 田山 茂  
 1954 『清代に於ける蒙古の社会制度』, 東京: 文京書院。
- 利光有紀  
 1989 「ヒツジに託す願い——モンゴル族, 春のチンギス・ハン祭典」『季刊民族学』48: 36-46。
- 烏 蘭  
 2000 『《蒙古源流》研究』 沈陽: 遼寧民族出版社。
- 楊 海英  
 1995 「チンギス・ハーン祭祀の政治構造」『内陸アジア史研究』10, 27-54。  
 1996 「オルドス・モンゴルの祖先祭祀——末子トロイ・エジン祭祀と八白宮の関連を中心に——」『国立民族学博物館研究報告』21 (3), 635-708。  
 1997 「チンギス・ハーンとその子孫たち——世界帝国の英主から『中華民族の英雄』へ——」『茨城県立歴史館報』24, 1-13。  
 1998 『「金書」研究への序説』 国立民族学博物館調査報告 7。  
 1999 「モンゴルにおける『白いスウルデ』の継承と祭祀」『国立民族学博物館研究報告別冊』20, 135-212。  
 2000 「アルプス山とチンギス・ハーン」『静岡大学人文学部・人文論集』51.1, 27-77。  
 2001 「モンゴルにおけるアラク・スウルデの祭祀について」『アジア・アフリカ言語文化研究』61, 71-113。
- 『清史稿』(第28冊) 1976, 趙爾巽等撰, 北京: 中華書局。  
 『欽定外藩蒙古回部王公表伝』(乾隆44年勅撰, 文淵閣四庫全書第454冊) 台湾: 商務印書館。